

宮本武蔵

地の巻

吉川英治

青空文庫

鈴

一

——どうなるものか、この天地の大きな動きが。

もう人間の個々の振舞いなどは、秋かぜの中の一片の木の葉で
しかない。なるようになってしまえ。

たけぞう武蔵は、そう思った。

かばね屍と屍のあいだにあつて、彼も一個の屍かのように横たわつた
まま、そう観念していたのである。

「——今、動いてみたツて、仕方がない」

けれど、実は、体力そのものが、もうどうにも動けなかったのである。武蔵自身は、気づいていないらしいが、体のどこかに、二つ三つ、銃弾たまが入っているに違いなかった。

ゆうべ。——もつと詳しくいえば、慶長五年の九月十四日の夜よ半なかから明け方にかけて、この関ヶ原地方へ、土砂ぶりに大雨を落した空は、今日の午ひるすぎになつても、まだ低い密雲を解とかなかつた。そして伊吹山いぶきやまの背や、美濃みのの連山を去来するその黒い迷雲から時々、サアーツと四里四方にもわたる白雨が激戦の跡を洗つてゆく。

その雨は、武蔵たけぞうの顔にも、そばの死骸にも、ばしやばしやと

落ちた。武蔵は、鯉のように口を開いて、鼻ばしらから垂れる雨を舌へ吸いこんだ。

——末期まつごの水だ。

痺しびれた頭のしんで、かすかに、そんな気もする。

戦いは、味方の負けと決まった。金吾きんご中納言秀秋ちゆうなごんひであきが敵に内

応して、東軍とともに、味方の石田三成をはじめ、浮田うきた、島津、

小西などの陣へ、逆さかさに戈ほこを向けて来た一転機からの総くずれで

あった。たった半日で、天下の持主は定まったといえる。同時に、

何十万という同胞どうぼうの運命が、眼に見えず、刻々とこの戦場から、

子々孫々までの宿命を作られてゆくのであろう。

「俺も、……」

と、武蔵は思った。故郷くにに残してある一人の姉や、村の年とし老よりなどのことをふとまぶたうか瞼まぶたうかに泛うかべたのである。どうしてであろう、悲しくもなんともない。死とは、こんなものだろうかと疑った。だが、その時、そこから十歩ほど離れた所の味方の死骸の中から、一つの死骸と見えたものが、ふいに、首をあげて、

「武たけやアん！」

と、呼んだので、彼の眼は、仮死から覚めたように見まわした。槍一本かっただきりで、同じ村を飛び出し、同じ主人の軍隊に従ついて、お互いが若い功名心に燃え合いながら、この戦場へ共に来て戦っていた友達の又また八はちなのである。

その又八も十七歳、武たけ蔵ぞうも十七歳であった。

「おうつ。又またやんか」

答えると、雨の中で、

「武やん生きてるか」

と、むこう彼方で訊く。

武蔵は精いッぱいな声でどなった。

「生きてるとも、死んでたまるか。又やんも、死ぬなよ、犬死するなっ」

「くそ、死ぬものか」

友の側へ、又八は、やがて懸命に這って来た。そして、武蔵の手をつかんで、

「逃げよう」

と、いきなりいった。

すると武蔵は、その手を、反対に引っぱり寄せて、叱るように、「——死んでろつ、死んでろつ、まだ、あぶない」

その言葉が終らないうちであつた。二人の枕としてゐる大地が、釜のように鳴り出した。真つ黒な人馬の横列が、喊声とぎをあげて、関ヶ原の中まんなか央あを掃きながら、此方こなたへ殺到して来るのだつた。

旗差物はたさしものを見て、又八が、

「あつ、福島の子隊だ」

あわて出したので、武蔵はその足首をつかんで、引き伏した。

「ばかつ、死にたいか」

——一瞬の後だつた。

泥によごれた無数の軍馬の脛すねが、織機はたのように脚きやく速そくをそろえて、敵方の甲冑かつちゆうむしや武者のを騎せ、長槍や陣刀を舞わせながら、二人の顔の上を、躍りこえ、躍りこえして、駈け去った。

又八は、じつと俯うツ伏したきりでいたが、武蔵は大きな眼をあいて、精悍せいかんな動物の腹を、何十となく、見ていた。

二

おとといからの土砂降りあきあは、秋暴れのおわかれだったとみえる。九月十七日の今夜は、一天、雲もないし、仰ぐと、人間にんげんを睨にらまえていような恐い月であった。

「歩けるか」

友の腕を、自分の首へまわして、負うように援たすけて歩きながら、武蔵は、たえず自分の耳もとでする又八の呼い吸きが気になって、

「だいじょうぶか、しっかりしておれ」

と、何度もいった。

「だいじょうぶ！」

又八は、きかない気でいう、けれど顔は、月よりも青かった。

ふた晩も、伊吹山の谷間の湿地にかくれて、生なまぐり栗だの草だの

を喰べていたため、武蔵は腹をいたくしたし、又八もひどい下痢げり

をおこしてしまった。勿論、徳川方では、勝かちいくさ軍の手をゆるめ

ずに、関ヶ原崩れの石田、浮うきた田、小西などの残党を狩りたててい

るに違いはないので、この月夜に里へ這いだしてゆくには、危険だという考えもないではなかったが、又八が、

(捕まってもいい)

というほどな苦しみを訴えて迫るし、居坐つたまま捕まるのも能がないと思つて決意をかため、垂井たるいの宿しゆくと思われる方角へ、彼を負つて降りかけて来たところだった。

又八は、片手の槍を杖に、やっと足を運びながら、

「武やん、すまないな、すまないな」

友の肩で、幾度となく、しみじみいった。

「何をいう」

武蔵は、そういつて、しばらくしてから、

「それは、俺の方でいうことだ。浮田中納言様や石田三成様が、
軍を起すと聞いた時、おれは最初しめたと思つた。——おれの親
達が以前仕えていた新免伊賀守様は、浮田家の家人だから、そ
の御縁を恃んで、たとえ郷士の倅でも、槍一筋ひっさげて駈けつ
けて行けば、きつと親達同様に、士分にして軍に加えて下さ
ると、こう考えたからだつた。この軍で、大将首でも取つて、お
れを、村の厄介者にしてゐる故郷の奴らを、見返してやろう、死
んだ親父の無二齋をも、地下で、驚かしてやろう、そんな夢を抱
いたんだ」

「俺だつて！ ……俺だつて」

又八も、頷き合つた。

「で——俺は、日頃仲のよいおぬしにも、どうだ、ゆかぬかと、すすめに行ったわけだが、おぬしの母親は、とんでもないことだと俺を叱りとばしたし、また、おぬしとは許いいなずけ婚しっぽうじの七宝寺のお通つうさんも、俺の姉までも、みんなして、郷土の子は郷土でおれと、泣いて止めたものだ。……無理もない、おぬしも俺も、かけがえのない、跡とり息子だ」

「うむ……」

「女としよりや老人に、相談無用と、二人は無断で飛び出した。それまでは、よかったが、新免家の陣場へ行ってみると、いくら昔の主人でも、おいそれと、士分にはしてくれない。足軽でもと、押売かまりり同様に陣借りして、いざ戦場へと出てみると、いつもかまり見物の

役や、道ごさえの組にばかり働かせられ、槍を持つより、鎌を持つて、草を刈った方が多かつた。大将首はおるか、土分の首を獲とる機おりもありはしない。そのあげくがこの姿だ、しかし、ここでおぬしを犬死させたら、お通さんや、おぬしの母親に何と、おれは謝まがつたらいいか」

「そんなこと、誰が武やんのせいにするものか。敗まけ軍いくさだ、こうなる運だ、何もかも滅茶くそだ、しいて、人のせいにするなら、裏切者の金吾きんご中納言秀秋が、おれは憎い」

ほどへ
程経てから二人は、曠野こうやの一角に立っていた、眼の及ぶかぎり
野分のわきの後の萱かやである、灯も見えない、人家もない、こんな所を目
ざして降りて来たわけでないはずだがと、

「はてな、此処ここは？」

改めて、自分たちの出て来た天地を見直した。

「あまり、喋舌しゃべつてばかり来たので、道を間違えたらしいぞ」

武蔵が、つぶやくと、

「あれは、杭瀬川くいぜがわじゃないか」

と、彼の肩にすがっている又八もいう。

「すると、この辺はおとつ一昨日、浮田方と東軍の福島と、小早川の軍
と敵の井伊や本多勢と、乱軍になって戦った跡だ」

「そうだったかなあ。……俺もこの辺を、駈け廻ったはずだが、何の記憶おぼえもない」

「見ろ、そこらを」

武蔵は、指さした。

のわき

野分に伏した草むらや、白い流れや、眼をやる所に、おとといの戦で斃おれた敵味方の屍かばねが、まだ一個も片づけられずにある。萱かやの中へ首を突っ込んでいるのや、仰向けに背中を小川に浸ひたしているのや、馬と重なり合っているのや、二日間の雨にたたかれて血こそ洗われているが、月光の下もとに、どの皮膚も、死魚のように色が変わっていて、その日の激戦ぶりを偲しのばせるに余りがあった。

「……虫が、啼いてら」

武蔵の肩で、又八は病人らしい大きな息をついた、泣いているのは、鈴虫や、松虫だけではなかった、又八の眼からも白いすじが流れていた。

「武やん、俺が死んだら、七宝寺のお通を、おぬしが、生涯持つてやってくれるか」

「ばかな。……何を思い出して、急にそんなことを」

「俺は、死ぬかもわからない」

「気の弱いことをいう。——そんな気もちで、どうする」

「おふくろの身は、親類の者が見るだろう。だが、お通は独りぼつちだ。あれやあ、あかご 嬰兒のころ、寺へ泊った旅の侍が、さむらい 置いてき放しにした捨子じゃといった、可哀そうな女よ、武やん、ほんと

に、俺が死んだら、頼むぞ」

「下痢くだりばら腹ぐらいで、なんで人間が死ぬものか。しつかりしろ」

はげまして――

「もう少しの辛抱だぞ、こらえておれ、農家が見つかったら、薬ももらつてやろうし、楽々と寝かせてもやれようから」

関ヶ原から不破への街道には、宿場もあり部落もある。武蔵は、要心ぶかく歩きつづけた。

しばらく行くとまた、一部隊がここで全滅したかと思われる程な死骸のむれに出会った。だがもう、どんな屍を見ても、残酷むごいとも、哀れとも二人は感じなくなっていた。そうした神経だったのに、武蔵は何に驚いたのか、又八もぎよつとして足をすくめ、

「あつ？ ……」

と軽くさげんだ。

るいりい

累々とある屍と屍の間に、誰か、兎のように迅い動作で、身をかくした者があつた。昼間のような月明りである。じつと、そこを見つめると、屈かがんでゐる者の背がよくわかる。

——野武士か？

とは、すぐ思つたことだったが、意外にもそれはまだやつと十三、四歳にしかなるまいと思われる小娘であつて檻つづれ樓てはいるが金きんらん欄らしい幅のせまい鉢の木帯をしめ、袂たもとのまるい着物を着てゐるのである。——そしてその小娘もまた此方こなたの人影をいぶかるものの如く、死骸と死骸との間から、迅はしこい猫のような眸ひとみを、じ

つと、射向けているのであつた。

四

戦いくさが熄やんだといつても、まだ素槍や素刀は、この辺を中心に、附近の山野を残党狩りに駆けまわっているし、死屍ししは、随所に、横たわっていて、鬼哭きこく啾しゅう々しゅうといつてもよい新戦場である。年とし端しはもゆかない小娘が、しかも夜、ただひとり月の下で、無数の死骸の中にかくれ、いつたい、何を働いているのか。

「……？」

怪しんでも怪しみ足りないように、武蔵と又八とは息をこらし

て、小娘の容ようす子を、ややしばし見まもっていた。——が、試みに、やがて、

「こらっ！」

武蔵が、こう怒鳴つてみると、小娘のまろい眸は、あきらかにビクリとうごいて、逃げ走りそうな気ぶりを示した。

「逃げなくともいい。おいつ、訊くことがあるっ」

あわてていい足したが、遅かった。小娘はおそろしく素すばや迅しんいのである。後も見ずに、彼方むこうへ駈け出してゆく。帯ひもの紐たもとが袂たもとに付ついている鈴ねでもあろうか、躍なつてゆく影かげにつれて、弄なぶるような美よい音がして、二人の耳へ妙に残のこった。

「なんだろ？」

茫然と、武蔵の眼が、夜の狭霧さぎりを見てみると、

「物の怪ものけじゃないか」

と、又八はふと身ぶるいした。

「まさか」

笑い消して、

「——あの丘と丘の間へ隠れた。近くに部落おどがあると見える。脅おどさずに、訊けばよかったが」

二人がそこまで登ってみると、果たして人家の灯が見えた、不ふ破山わやまの尾根をひろく南へ曳いている沢である。灯が見えてからも、十町も歩いた、漸くにして近づいてみると、これは農家とも見えぬ土塀と、古いながら門らしい入口を持った一軒建である。柱は

あるが朽ちていて、扉などはない門だった。入ってゆくと、よく伸びた藪の中に、母屋おもやの口は戸閉とぎされてあった。

「おたのみ申します」

まず、軽くそこを叩いて、

「夜分、恐れ入るが、お願いの者でござる。病人を、救っていただきたい、ご迷惑はかけぬが」

——ややしばらく返辞がない。さっきの小娘と、家の者とが、何か、ささやき合っているらしく思える。やがて、戸の内側で物音がした。開けてくれるのかと待っていると、そうではなくて、

「あなた方は、関ヶ原おちゅうどの落人おちゅうどでしよう」

小娘の声である。きびきびという。

「いかにも、私どもは、浮田勢うきたぜいのうちで、新免伊賀守しんめんの足輕組あしかりの者でござるが」

「いけません、落人をかくまえば、私たちも罪になりますから、ご迷惑はかけぬというても、こちらでは、ご迷惑になりますよ」

「そうですか。では……やむを得ない」

「ほかへ行つて下さい」

「立ち去りますが、連れの男が、実は、下痢腹くだりばらで悩んでいるのです。恐れいるが、お持ち合わせの薬を一服、病人へ頒わけていただけまいか」

「薬ぐらいなら……」

しばらく、考えているふうだったが、家人へ訊きに行ったので

あろう、鈴の音につれるあしおと躑あしおと音が、奥のほうへ消えた。

すると、べつな窓口に、人の顔が見えた。さつきから外を覗いていたこの家の女房らしい者が、はじめて言葉をかけてくれた。

「あけみ朱実や、開けておあげ。どうせおちゆうど落人だろうが、雑兵なんか、ごせんぎ御詮議の勘定には入れてないから、泊めてあげても、気づかいはないよ」

五

ほおずみ朴炭の粉を口いっばいの服んでは、にらがゆ葦粥を食べて寝ている又八と、鉄砲で穴のあいたふかもも深股の傷口を、せつせとしやうちゆう焼酎で洗

つては、横になつてゐる武蔵と、薪小屋の中で二人の養生は、それが日課だつた。

「何が稼業かぎようだろう、この家は」

「何屋でもいい、こうして匿かくまつてくれるのは、地獄に仏というもののだ」

「内儀ないぎもまだ若いし、あんな小娘と二人限りぎりで、よくこんな山里に住んでいられるな」

「あの小娘は、七宝寺のお通さんに、どこか似てやしないか」

「ウム、可愛らしい娘こだ、……だが、あの京人形みたいな小娘が、なんだつて、俺たちでさえもいい気持のしない死骸だらけな戦場を、しかも真夜半まよなか、たった一人で歩いていたのか、あれが解げせな

い」

「オヤ、鈴の音がする」

耳を澄まして――

「朱実あけみというあの小娘が来たらしいぞ」

小屋の外で、跫あしおと音が止まった。その人らしい。啄木きつつきのように、外から軽く戸をたたく。

「又八さん、武蔵さん」

「おい、誰だ」

「私です、お粥かゆを持って来ました」

「ありがとう」

錠むしろの上から起き上がって、中から錠じょうをあける。朱実は、薬だの

食物だのを運び盆にのせて、

「お体はどうですか」

「お蔭で、この通り、二人とも元気になった」

「おつ母さんがいいましたよ、元気になっても、余り大きな声で話したり、外へ顔を出さないようにって」

「いろいろと、かたじけない」

「石田三成様だの、浮田秀家様だの、関ヶ原から逃げた大将たちが、まだ捕まらないので、この辺も、御詮議で、大変なきびしさですって」

「そうですか」

「いくら雑兵でも、あなた方を隠していることがわかると、私た

ちも縛られてしまいますからね」

「分りました」

「じゃあ、お寝やすみなさい、また明日あした——」

微笑んで、外へ身を退ひこうとすると、又八は呼びとめて、

「朱実さん、もう少し、話して行かないか」

「嫌いや！」

「なぜ」

「おっ母さんに叱られるもの」

「ちよつと、訊きたいことがあるんだよ。あんた、幾いくつ歳？」

「十五」

「十五？ 小さいな」

「大きなお世話」

「お父さんは」

「いないの」

「稼業かぎようは」

「うちの職業しよくばいのこと？」

「ウム」

「もぐさ屋」

「なるほど、灸やいの艾ともぐさは、この土地の名産だっけな」

「伊吹の蓬よもぎを、春に刈つて、夏に干して、秋から冬にもぐさにして、それから垂井たるいの宿場で、土産物みやげものにして売ります」

「そうか……艾もぐさ作りなら、女でも出来るわけだな」

「それだけ？ 用事は」

「いや、まだ。……朱実さん」

「なアに」

「この間の晩——俺たちがここの家へ初めて訪ねて来た晩さ——。まだ死骸がたくさん転がっている戦の跡を歩いて、朱実ちゃんはいつたい何していたのだい。それが聞きたいのさ」

「知らないッ」

ぴしゃつと戸をしめると、朱実は、袂の鈴を振り鳴らして、母屋のほうへ駈け去った。

どくだけ
毒茸

一

五尺六、七寸はあるだろう、武蔵たけぞうは背がすぐれて高かった、よく駈ける駿馬しゅんめのようである。脛すねも腕も伸々としていて、唇くちが朱あかい、眉が濃い、そしてその眉も必要以上に長く、きりつと眼じりを越えていた。

——豊年童子ほうねんわらべや。

郷里の作州さくしゅう宮本村の者は、彼の少年の頃には、よくそういつてからかった。眼鼻だちも手足も、人なみはずれて寸法が大きいので、よくよく豊年に生まれた児だろうというのである。

またはち
又八は、

その「豊年童子」にかぞえられる組だった。だが又八のほうは、彼よりいくらか低くて固肥りに出来ていた。碁盤のような胸幅が肋骨をつつみ、丸ツこい顔の団栗眼を、よくうごかしながら物をいう。

いつのまに、覗いて来たのか、

「おい、武蔵、ここの若い後家は、毎晩、白粉をつけて、化粧しこむぞ」

などとささやいたりした。

どつちも若いのである。伸びる盛り肉体だった、武蔵の弾傷がすっかり癒る頃には、又八はもう薪小屋の湿々した暗闇に、じつと蟋蟀のような辛抱はしていられなかった。

おもや
母屋の炉ばたにまじつて、後家のお甲ここうや、小娘の朱実あけみを相手に、
まんざい
万歳を歌つたり、軽口をいって、人を笑わせたり、自分も笑い
こけている客があると思うと、それがいつの間にか、小屋には姿
の見えない又八だった。

——夜も、薪小屋には寝ない晩のほうが多くなっていた。

たまたま、酒くさい息をして、

たけぞう
「武蔵も、出て来いや」

などと、引っぱり出しに来る。

初めのうちは、

「ばか、俺たちは、
おちゆうど
落人の身じゃないか」

と、たしなめたり、

「酒は、嫌いだ」

と、そっけなく見ていた彼も、ようやく倦怠けんたいをおぼえてくる
と、

「——大丈夫か、この辺は」

小屋を出て、二十日ぶりに青空を仰ぐと、思うさま、背ぼねに
伸びを与えて欠伸あくびした。そして、

「又やん、余り世話になつては悪いぞ、そろそろ故郷くにへ帰ろうじ
やないか」

と、いった。

「俺も、そう思うが、まだ伊勢路も、上方の往来も、木戸が厳し
いから、せめて、雪のふる頃まで隠れていたがよいと、後家もい

うし、あの娘もいうものだから——」

「おぬしのように、炬ばたで、酒をのんでいたら、ちつとも、隠れていることにはなるまいが」

「なあに、この間も、浮田中納言様だけが捕まらないので、徳川方の侍らしいのが、躍起やつきになつて、ここへも詮議せんぎに来たが、その折、あいさつに出て、追い返してくれたのは俺だった。薪小屋の隅で、登あしおと音の聞えるたび、びくびくしているよりは、いっそ、こうしている方が安全だぞ」

「なるほど、それもかえつて妙だな」

彼の理窟とは思いながら、武蔵も同意して、その日から、共に母屋へ移った。

お甲後家は、家の中が賑やかになつてよいといい、よろこ欣んでいるふうこそ見えるが、迷惑とは少しも思っていないらしく、

「又さんか、武さんか、どつちか一人、朱実の婿むこになつて、いつでもここにいてくれるとよいが」

と、いったりして、うぶ初心な青年がどきまぎするのを見てはおかしかった。

二

すぐ裏の山は、松ばかりの峰だった。朱実は、籠を腕にかけて、「あつた！ あつた！ お兄さん来て」

松の根もとをさぐり歩いて、松茸まつたけの香に行きあたるたびに、無邪気な声をあげて叫んだ。

少し離れた松の樹の下に、武蔵も、籠を持ってかがみこんでいた。

「こつちにもあるよ」

針葉樹の梢こずえからこぼれる秋の陽が、二人の姿に、細かい光の波になって戦そよいでいた。

「さあ、どつちが多いでしょ」

「俺のほうが多いぞ」

朱実は、武蔵の籠へ手を入れて、

「だめ！ だめ！ これは紅茸べにだけ、これは天狗茸てんぐだけ、これも毒茸」

ぽんぽん選^えり捨ててしまつて、

「私の方が、こんな多い」

と、誇つた。

「日が暮れる——帰ろうか」

「負けたもんだから」

朱実は、からかつて、雉^{きじ}子のような迅^{はし}こい足で、先に山道を降りかけたが、急に顔いろを変えて、立ちすくんだ。

中腹の林を斜めに、のそのそと大股に歩いて来る男があつた。

ぎよろりと、眼がこつちへ向く。おそろしく原始的で、また好戦的な感じもする人間だつた。獰^{どうもう}猛^{もう}そうな毛虫眉も、厚く上にめくれている唇も、大きな野太刀も鎖帷^{くさりかたびら}子も、着ている獣^{けもの}の皮

も。

「あけ坊」

朱実のそばへ歩いて来た。黄いろい歯を剥いて笑いかけるのである。しかし、朱実の顔には、白い戦慄しかなかった。

「おふくろは、家にいるか」

「ええ」

「帰ったらよくいっておけよ。俺の眼をぬすんでは、こそこそ稼いでいるそうだが、そのうちに、年貢ねんぐを取りにゆくぞと」

「……………」

「知るまいと思っっているだろうが、稼いだ品を売こかした先から、すぐ俺の耳へ入ってくるのだ。てめえも毎晩、関ヶ原へ行つたら

う」

「いいえ」

「おふくろに、そういえ。ふざけた真似まねしやがると、この土地に置かねえぞと。——いいか」

睨みつけた。そして、運ぶにも重たそうな体を運んで、のそのそと沢のほうへ降りて行つた。

「なんだい、あいつは？」

武蔵は、見送つた眼をもどして、慰め顔に訊いた。朱実の唇はまだ脅おびえをのこして、

「不破村の辻つじ風かぜ」

と、かすかにいった。

「野武士だね」

「ええ」

「何を怒られたのだい？」

「……………」

「他言はしない。——それとも、俺にもいえないことか」

朱実はいいにくそうに、しばらく惑っているふうだったが、突
然、武蔵たけぞうの胸にすがって、

「他人ひとには、黙っていてください」

「うむ」

「いつかの晩、関ヶ原で、私が何をしていたか、まだ兄さんには
分りませんか？」

「……分らない」

「私は泥棒をしていたの」

「えっ？」

「戦いくさのあつた跡へ行つて、死んでいる侍の持つている物——刀だの、笄こうがいだの、香におい囊ぶくろだの、なんでも、お金になる物を剥はぎ取つて来るんですよ。怖いけれど、食べるのに困るし、嫌だというと、おつ母さんに叱られるので——」

三

まだ陽が高い。

武蔵は、朱実にもすすめて、草の中へ腰をおろした。伊吹の沢の一軒が、松の間を透かして、下に見える傾斜にある。

「じゃあ、この沢の蓬よもぎを刈きって、艾もぐさを作るのが職しよばい業だど、いつかいったのは嘘だな」

「え。うちのおつ母さんという人は、とても贅ぜいたく沢な癖のついてる人だから、蓬なんか刈きっているくらいでは、生活くらしがやってゆけないんです」

「ふうむ……」

「お父ちちつさんの生きていた頃には、この伊吹七郷で、いちばん大きな邸やしきに住すんでいたし、手下もたくさんに使つかっていたし」

「おやじさんは、町人か」

「野武士の頭領かしら」

朱実は、誇るくらいな眼をしていった。

「——だけどさつき、ここを通つた辻風つじかぜ典馬てんまに、殺されてしまつた……。典馬が殺したのだと、世間でも皆いつています」

「え。殺された？」

「……………」

うなず

頷く眼から、自分でも計らぬもののように、涙がこぼれた。十五とは見えない程、この小娘は身装なりは小さいし、言葉もひどくませていた。そして時には、人の目をみはらせるような迅はしこい動作を見せたりするので、武蔵は、遽にわかに、同情をもてなかつたが、膠にかわで着けたような睫毛まつげから、ぼろぼろと涙をこぼすのを見ると、

急に抱いてやりたような可憐さを覚えた。

しかし、この小娘は、決して尋常な教養をうけてはいないらしく思える。野武士という父からの職業を、何ものよりいい天職と信じているのだ。泥棒以上の冷血な業も、喰べて生きるためには、正しいものと、母から教えこまれているに違いない。

もつとも長い乱世を通して、野武士はいつのまにか、怠け者で生命知らずな浮浪人には、唯一の仕事になっていた。世間もそれを怪しまないのである。領主もまた戦争のたびに、彼らを利用し、敵方へ火を放けさせたり、流言を放たせたり、敵陣からの馬盗みを奨励したりする。もし領主から買いに来ない場合は、戦後の死骸を剥ぐか、落人を裸体にするか、拾い首を届けて出るか、

いくらでもやることがあつて、ひといくさ戦 あれば半年や一年は、自じだらく墮落だらくにて食えるのであつた。

農夫や樵夫きこりの良民でさえ、戦が部落の近くにあつたりすると、畑仕事はできなくなるが、後のこぼれを拾うことによつて、不当な利得の味をおぼえていた。

野武士の専門家は、そのために縄張りを守ることが厳密だつた。もし、他の者が、自己の職場を犯したと知つたら、ただはおかない鉄則がある。必ず残酷な私刑によつて自己の権利を示すのだつた。

「どうしよう?」

朱実は、それを恐れるもののように、戦慄した。

「きつと、辻風の手下が、来るにちがいない……来たら……」

「来たら、俺が、挨拶してやるよ、心配しないがいい」

山を降りて来たところ——沢はひっそり黄昏たそがれていた、風呂の煙が一つ家の軒やからひろがって、狐色の尾花の上を低く這はっている。後家のお甲は、いつものように、夜化粧をすまして、裏の木戸に立っていた。そして、朱実と武蔵が、寄り添って、帰ってくる姿を見かけると、

「朱実っ——、何しているのだえっ、こんな暗くなるまで！」

いつにない険けんのある眼と声があった。武蔵は、ぼんやりしていたが、この小娘は、母の気持に何よりも敏感である。びくツとして、武蔵のそばを離れたと思うと、顔を紅あかめながら、先へ駈けだ

していた。

四

辻風典馬のことを、あくる日、朱実から聞かされて、急に慌あわてたらしいのである。

「なぜもつと早く、いわないのさ！」

お甲後家は、叱ちつていた。

そして、戸棚の物、抽斗ひきだしの中の物、納屋なやの物など、
一ひとところ所

へ寄せ集めて、

「又さんも、武さんも、手伝っておくれ、これをみんな天井裏へ

上げるのだから——」

「よし来た」

又八は、屋根裏へ上がった。

踏み台に乗って、武蔵は、お甲と又八の間に立ち、天井へ上げる物を、一つ一つ取り次いだ。

きのう朱実から聞いていなければ、武蔵は胆きもを潰つぶしたに違いない。永い間であろうが、よくもこう運び込んだものと思う。短刀がある、槍の穂がある、鎧よろいの片袖がある。また、鉢かぶとのない兜かぶとの八幡座ふたごころだの、懐ふところに入るぐらいな豆厨子まめずしだの、数珠ずずだの旗竿かざだの、大きな物では、蝶貝や金銀で見事にちりばめた鞍などもあつた。

「これだけか」

天井裏から、又八が顔を見せる。

「も一つ」

お甲は、取り残していた四尺ほどの黒櫪くろがしの木剣を出した、武蔵が間でうけとった。反り味そと、重さと固い触感とが、掌てに握ると、離したくない気持を彼に起させた。

「おばさん、これ、俺に出来ないか」

武蔵がねだると、

「欲しいのかえ」

「うむ」

「……………」

遣やるとはいわないが、当然、武蔵の意思をゆるしているように、

笑えくぼ靨ぼでうなずく。

又八は、降りて来て、ひどく羨ましい顔をした。お甲は笑つて、
「拗すねたよ、この坊やは」

と、瑪瑙めのうだま珠たまのついている革巾かわぎんちやく着やくを、彼には与えたが、あまり欣うれしがらなかつた。

夕方——この後家は、良人のいたころからの習慣らしく、必ず風呂に入つて、化粧して、晚酌をたしなむ。自分のみでなく、朱あ實けみにもそうさせる、性質が派手ずきなのだ、いつまでも若い日でありたい質たちなのだ。

「さあ、みんなお出いで」

炉ろをかこんで、又八にも酌つぐし、武蔵にも杯さかずきを持たせた。どう

ことわっても、

「男が、酒ぐらい飲めないで、どうしますえ。お甲が、仕込んであげよう」

と、手くびを持って、無理に強いたりした。

又八の眼は、時々、不安な浮かない顔つきになって、じつとお甲の容子ようすに見入った。お甲はそれを感じながら、武蔵の膝へ手をかけ、このごろ流行はやる歌というのを、細い美音で口遊くちずさんで、

「今の謡うたは、わたしの心。——武蔵さん、分りますか」
といったりした。

朱実あづみが、顔を外向そむけているのも関かまわず、若い男の羞恥はにかみと、一方ねたの妬みとを、意識していることだった。

いよいよ、面白くないように、

「武蔵、近いうちに、もう出立しような」

又八が、或る時いうと、お甲が、

「どこへ、又さん」

「作州の宮本村へさ、故郷くくにへ帰れば、これでも、おふくろも、許い
いななずけ嫁よめもあるんだから」

「そう、悪かったネ、匿かくまつて上げたりして。——そんなお人が
あるなら、又さん一人で、お先に立っても、止めはしないよ」

五

掌てでにぎりしめて、ぎゅうと、扱しごいてみると、伸びと反そりとの調和に、無限な味と快感がおぼえられる。武蔵は、お甲からもらった黒くろがし櫛がしの木剣を常に離さなかつた。

夜もその木剣を抱いて寝た。木剣の冷たい肌を頬に当てると、幼年のころ、寒かんげいこ稽こ古ゆかの床で、父の無むにさい二さい斎いからうけた烈きしい気魄はくが、血のなかに甦よみがえつてくる。

その父は、秋しゅうそう霜そうのように、嚴格一方な人物だった。武蔵は幼少にわかれた母ばかりが慕したわしくて、父には、甘える味を知らなかつた、ただ煙たくて恐こいものが父だった。九ここのつ歳の時、ふと家を出て、播ばんしゅう州しゅうの母の所へ、奔はしつてしまったのも、母から一言、

(才、大きゆうなつたの)

と、やさしい言葉をかけてもらいたい一心からであつた。

だが、その母は、父の無二齋が、どういふわけか離縁した人だつた、播州の佐用郷さよごうの士さむらいへ再縁して、もう二度目の良人の子供があつた。

(歸つておくれ、お父上の所へ——)と、その母が、掌てをあわせ、抱きしめて、人目のない神社の森で泣いた姿を、武蔵は今でも、眼うかに泛うかべることができぬ。

間もなく、父の方からは、追手が来て、九ここのつ歳の彼は、裸馬の背に縛られて、播州からふたたび、美みまさか作の吉野郷宮本村へ連れもどされた。父の無二齋はひどく怒つて、

(不届者不届者)

と、杖で打って打って打ちすえた。その時のことも、まざまざと、童心どうしんにつよく烙やきつけられてある。

(二度と、母の所へゆくと、我子といえど、承知せぬぞ)

その後、間もなく、その母が病気で死んだと聞いてから、武蔵は、鬱ふさぎ性せうから急に手のつけられない暴れン坊ぼうになった、さすがの無二斎も黙ってしまった、十手を持って懲こらそうとすれば、棒を取って、父へかかって来る始末だった、村の悪童はみな彼に懼こしよう伏ふくし、彼と対峙たいじする者は、やはり郷土せがれの倅せがれの又八だけだった。十二、三には、もう大人に近い背丈せたけがあつた。或る年、村へ金は箔磨くみがきの高札を立てて、近郷の者に試合を挑みに来た有馬喜兵衛

という武者修行の者を、矢来の中で打ち殺した時は、

(豊年童子わらべの武やんは強い)

と、村の者に、凱歌をあげさせたが、その腕力で、いくつになつても、乱暴がつづくつと、

(武蔵が来たぞ、さわるな)

と、怖がられ、嫌われ、そして人間の冷たい心ばかりが彼に映つた。父も、厳格で冷たい人のままでやがて世を去つた、武蔵の残虐性は、養われるばかりだった。

もし、お吟ぎんという一人の姉がいなかったら、彼は、どんなだい大それた争いを起して、村を追われていたか知れない。だが、その姉が泣いてという言葉には、いつもすなおに従つた。

今度、又八を誘つて、軍へ働きに出て来たのも、そうした彼にかすかにでも、転機の光がさして来たためともいえる。人間になろうとする意思がどこかで芽をふきかけていた。——けれど今の彼は、ふたたびその方向を失つていた。真つ暗な現実には。

しかし、戦国というあらゆる神経の世でもなければ、生み出し得ないような暢気さもある若者だった。微塵も、明日のことなどは、苦にしていけない寝顔でもある。

故郷の夢でも見ているのだろう、ふかぶかと寝息をかいて。そして例の木剣を、抱いて。

「……武蔵さん」

ほの暗い短檠たんけいの明りを忍んで、いつのまにか、お甲は、その

枕元へ来て、坐っていた。

「ま……この寝顔」

武蔵の唇を、彼女の指は、そつと突いた。

六

ふっ！……

お甲の息が、短たんけい繋けいの明りを消した。横にのばした体を猫のよ
うに縮めて、武蔵たけぞうのそばへ、そつと寄り添って。

年のわりに派手な寝衣裳も、その白い顔も、ひとつ闇になって、
窓びさしに、夜露の音だけが静かである。

「まだ、知らないのかしら」

寝ている者の抱いている木剣を、彼女が取りのけようとするのと、がばつと、武蔵が匆^はね起きたのと、一緒だった。

「盗^{ぬす}ッ人！」

短檠の倒れた上へ、彼女は、肩と胸をついた、手をねじ上げられた苦しさに、思わず、

「痛いっ」

と、さけぶと、

「あつ、おばさんか」

武蔵は、手を離して、

「なんだ、盗人かと思つたら——」

「ひどい人だよ、おお痛い」

「知らなかった、ご免なさい」

「謝らなくともいい。……武蔵さん」

「あつ、な、なにをするんだ」

「叱しつ……。野暮、そんな大きい声をするもんじゃありません。

私が、おまえをどんな気持で眼にかけているか、よくご存じだろ
う」

「知っています、世話になったことは、忘れないつもりです」

「恩の義理のと、堅くるしいことでなくさ。人間の情というものは、もつと、濃くて、深くて、やる瀬ないものじゃないか」

「待ってくれ、おばさん、いまあか灯りをつけるから」

「意地悪」

「あつ……おばさん……」

骨が、齒の根が、自分の体じゆうが、がくがくと鳴るように、武蔵は思えた。今まで出会ったどんな敵よりも怖かった。関ヶ原で顔の上を翔^かけて行つた無数の軍馬の下に仰向いて寝ていた時でも、こんな大きな動悸^{どつき}は覚えなかつた。

壁の隅へ、小さくなつて、

「おばさん、あつちへ行つてくれ、自分の部屋へ。——行かないと、又八を呼ぶぜ」

お甲は、うごかなかつた、いらいらとこじれた眼が、睨みつけているらしく、闇のうちで呼吸^{いき}をしていた。

「武蔵さん、おまえだって、まさか、私の気持が、分らないはずはないだろう」

「……………」

「よくも恥をかかしたね」

「……恥を」

「そうさ！」

二人とも、血がのぼっていたのである。で、気のつかない様子であったが、さつきから、表の戸をたたいている者があって、ようやく、それが大声に変わって来た。

「やいつ、開けねえかつ」

ふすま襖の隙に、ろうそく蝋燭の光がうごいた。朱実が眼をさましたのである

ろう、又八の声もしていた。

「なんだろう？」

と、その又八の蹠音につづいて、

「おつ母さん——」

朱実が、廊下のほうで呼ぶ。

何かは知らず、お甲もあわてて、自分の部屋から返辞をした。

外の者は戸をこじあけて、自分勝手に入り込んで来たものとみえ、土間の方を透^すかしてみると、大きな肩幅を重ね合つて、六、七名の人影がそこに立ち、

「辻風だ、はやく灯りをつけろ」

と中の一人が怒鳴っていた。

おとし櫛ぐし

一

土足のまま、どやどやと上がってきた、寝込みを衝ついて来たのである。納戸なんど、押入、床下と、手分けをして搔かきまわ廻まわしにかかる。辻風典馬てんまは、炬たきばたへ坐りこんで、乾こぶん児ごたちの家搜やさがしするのを、眺めていたが、

「いつまでかかっているのだ、何かあつたらう」

「ありませんぜ、何も」

「ない」

「へい」

「そうか……いやあるまい、ないのが当り前だ、もうよせ」

次の部屋に、お甲は背を向けて、坐っていた、どうにでもするがいいといったように、捨て鉢な姿で。

「お甲」

「なんですえ」

「酒でも爛っけねえか」

「そこらにあるだろう、勝手に飲むなら飲んでおいで」

「そういうな、久し振りに、典馬が訪ねて来たものを」

「これが、人の家を訪ねるあいさつかい」

「怒るな、そつちにも、科とががあるう、火のない所に煙は立たない。
蓬屋よもぎやの後家が、子をつかつて、戦場いくさばの死骸から、呑み代しろを稼かせ
ぐという噂は、たしかに、俺の耳へも入っていることだ」

「証拠をお見せ、どこにそんな証拠があつて」

「それを、穿ほじり出す気なら、何も朱実あけみに前触れはさせておかぬ。

野武士の掟おきてがある手前、一応は、家捜しもするが、今度のところは
大目に見て宥ゆるしているのだ。お慈悲だと思え」

「誰が、ばかばかしい」

「ここへ来て、酌でもしねえか、お甲」

「……………」

「物好きな女だ、俺の世話になれば、こんな生活くらしはしねえでもす

むものを。どうだ、考え直してみちやあ」

「ご親切すぎて、恐ろしさが、身に沁しみるとさ」

「嫌か」

「私の亭主は、誰に殺されたか、ご存知ですか」

「だから、仕返ししてえなら、及ばずながら、おれも片腕を貸してやろうじゃないか」

「しらをお切りでないよ」

「なんだと」

「下手人は辻風典馬てんまだと、世間であんなにいつているのが、おまえの耳には聞えないのか。いくら野武士の後家でも、亭主のかたきの世話になるほど、心まで落魄おちぶれてはいない」

「いったな、お甲」

にが笑いを注ぎこんで、典馬は、茶碗の酒を仰飲あおつた。

「——そのことは、口に出さない方が、てめえたち母娘おやこの身のためだと、俺は思うが」

「朱実あけみを一人前に育てたら、きつと仕返しをしてやるから、忘れずにいたがよい」

「ふ、ふ」

肩で笑っているのである。典馬は、あるたけの酒を呑みほすと、肩へ槍を立てかけて、土間の隅に立っている乾児こぶんの一人に、

「やい、槍の尻で、この上の天井板を五、六枚つつ刎ばねてみる」と命じた。

槍の石突きを向けて、その男が、天井を突いて歩いた。板の浮いた隙間から、そこに隠しておいた雑多な武具や品物が落ちてきた。

「この通りだ」

典馬は、ぬつと立った。

「野武士仲間の掟だ、この後家をひきずり出して、みせしめ（私刑）にかける」

二

女一人だ、無造作にそう考えて、野武士たちは、そこへ踏み込

んで行つた、しかし、棒でも呑んだように、部屋の口に、突つ立つてしまった、お甲へ手を出すことを怖れるように。

「何をしている、早く、引きずり出して来いっ」

辻風典馬が、土間のほうで焦心いらつている、それでも、乾児こぶんの野武士たちと、部屋の中とは、じつと、睨み合いのかたちで、いつまでも埒らちがあきそうもない。

典馬は舌打ちをして、自身でそこを覗いてみた。すぐお甲のそばへ近づこうとしたが、彼にも、そのの鬨しきいは越えられなかった。

炉部屋からは見えなかつたが、お甲のほかには、二人の逞しい若者がそこにいたのだ。武蔵たけぞうは黒檜くろがしの木剣を低く持つて、一歩でも入つて来たならその者の脛すねをへし折ろうと構えていたし、又八

は、壁の陰に立って、刀を振りかぶり、彼らの首が入口から三寸と出たら、ばさりと斬ツて落そうと、撓ためきツている。

朱実には怪我をさせまいとして、上の押入へでも隠したのか、姿が見えない。この部屋の戦闘準備は、典馬が炬ばたで酒をのんでいる間に整っていたのだ。お甲も、その後ろ楯があるために、落着き払っていたのかも知れなかった。

「そうか」

典馬は思い出して呻うめいた。

「いつぞや、朱実と山を歩いていたら若造があつた。一人はそいつだろう、あとは何者だ」

「……………」

又八も武蔵も、一切口は開かなかつた。ものは腕でいおうという態度だ。それだけに、不気味なものを漂わせている。

「この家に、男おとこ気けはねえ筈だ、察するところ、関ヶ原くずれの宿なしだろう、下手な真似をすると、身の為にならねえぞ」

「……………」

「不破村の辻風典馬を知らぬ奴は、この近郷にないはずだ、落おち人うどの分際で、生意気な腕だて、見ている、どうするか」

「……………」

「やいつ」

典馬は、乾児こぶんたちをかえりみて手を振った、邪魔だから退どいていろというのである。あとさがりに、側をはなれた乾児の一人は、

炉の中へ、足を突つこんで、あつといった。松薪まつまきの火の粉と煙が、天井を搏うち、いちめんの煙となった。

じつと、部屋の口を睨ねめすえていた典馬は、くそつ、と吠えながら、猛然、その中へ突入した。

「よいしょつ」

待ち構えていた又八は、とたんに両手の刀を揮ふり降ろしたが、典馬の勢いは、その迅はやさも及ばなかった。彼の刀の鐙こじりのあたりを、又八の刀が、かちつと打った。

お甲は、隅へ退のいて立っていた、その跡の位置に、武蔵は黒檜の木剣を横に撓ためて待っていた、そして典馬の脚もとを目がけて、半身を投げ出すように烈しく払った。

——空間の闇が、びゅつと鳴る。

すると相手は、身をもつて、岩みたいな胸板をぶつけて来た。まるで大熊に取っ組まれた感じだ、かつて武蔵が出会ったことのない圧力だった。咽喉のどに、拳こぶしを置かれて、武蔵は、二つ三つなぐ撲られていた、頭蓋骨が砕けたかと思うほどこたえる、しかし、じつと蓄たくわえていた息を、満身から放つと、辻風典馬の巨おおきな体は、宙へ足を巻いて、家鳴やなりと共に壁へぶつかった。

三

こいつと見こんだら決して遁のがさない——噛かぶりついてもあいて

を屈伏させる——また、生なまごろ殺しにはしておかない、徹底的に、やるまでやる。

武蔵の性格は、元来そういう質たちなのだ、幼少からのことである、血液の中に、古代日本の原始的な一面を濃厚に持つて生れて来たらしい、それは純粹なかわりに甚だ野性で、文化の光にも磨かれていないし、学問による知識ともまだなっていない生れながらのままのものだった。真まことの父親の無二齋でさえ、この子を余り好かなかったのは、そういう所に原因していたらしい。その性質を撓ためるために、無二齋がたびたび加えた武士的な折せつ檻かんは、かえつて、豹ひょうの子に牙きばをつけてやったような結果を生んでしまったし、村の者が、乱暴者と、嫌えば嫌うほど、この野放しな自然児は、

いよいよ遅しく伸び、人も無げに振舞い、郷土の山野をわがもの顔にただけではあき足らないで、大それた夢をもつて、ついに関ヶ原までも出かけて来たものだった。

関ヶ原は、武蔵にとって、実社会の何ものかを知った第一歩だった。見事にこの青年の夢はペシヤンコに潰れた。——しかし、もともと裸一貫なのだ、それがために、青春の一步につまずいたとか、前途が暗くなったとか、そんな感傷は、今のところみじんもない。

しかも、今夜は思いがけない餌えにありついた。野武士の頭かしらだという辻風典馬だ。こういう敵にめぐりあいたいことを、彼は関ヶ原でもどんなに願っていたことか。

「卑怯ひきようつ、卑怯つ、やあいつ、待てえつ！」

こう呼ばわりながら、彼は、真つ暗な野を韋駄天いだてんのように駈けて
いる——

典馬は、十歩ほど前を、これも宙を飛んで逃げてゆくのだつた。
武蔵の髪の毛は逆立っていた、耳のそばを、風がうなつて流れ
る、愉快のなんのつて、たまらない快感だつた、武蔵の血は、身
の駈けるほど、獣けものに近い欣よろこびにおどつた。

——ぎやつツ。

彼の影が、典馬の背へ、重なるように躍とびかかつたと見えた時
に、黒櫓の木剣から、血が噴いて、こうもの凄こい悲鳴が聞えた。

もちろん辻風典馬の大きな体は、地ひびきを打って、転がった

のだ。頭蓋骨は、こんにやくのように柔らかになり、二つの眼球が、顔の外へ浮かびだしていた。

二撃、三撃と、つづけさまに木剣を加えると、折れたあばら骨が、皮膚の下から白く飛びだした。

武蔵は、腕を曲げて、額ひたいを横にこすった。

「どうだ、大将……」

颯さっそう爽と、一顧こして、彼はすぐ後ろへ戻って行くのである。なんでもないことのようにだった。もし先が強ければ、自分が後に捨てられてゆくだけのこととしかしていなかった。

「——武蔵か」

遠くで又八の声がした。

「おう」

と、のろまな声をだして、武蔵が見まわしていると、

「——どうした？」

駈けてくる又八の姿が見えた。

「殺^やった。……おぬしは」

答えて、問うと、

「俺も、——」

柄^{つかいと}糸まで血によごれたものを武蔵に示して、

「あとの奴らは、逃げおった、野武士なんて、みんな弱いぞ」

肩を誇らせて、又八はいう。

血をこねまわしてよろこぶ^{あかご}嬰兒にひとしい二人の笑い声だった。

血の木剣と、血の刀をぶらさげたまま、元気に何か語りあいながら、やがて、
彼方あなたに見える蓬よもぎの家の一つ灯ひへ向つて歸つて行くのであつた。

四

野馬が、窓へ首を入れて、家の中を見まわした。鼻を鳴らして、大きな息をしたので、そこに寝ていた二人は眼をさました。

「こいつめ」

武蔵は、馬の顔を、平手で撲なぐつた。又八は、拳こぶしで天井を突きあげるような伸びをしなから、

「アアよく寝た」

「陽が高いな」

「もう日暮れじゃないか」

「まさか」

ひと晩眠ると、もう昨日のことは頭にない、今日と明日があるだけの二人である。武蔵は、早速、裏へとびだして、もろ肌をぬぎ出した。清せいれつ冽な流れで体を拭き、顔を洗い、太陽の光と、深い空の大气を、腹いっぱい吸いこむように仰向いていた。

又八は又八で、寝起きの顔を持ったまま、炉部屋へ行つて、そこにいるお甲と朱実あけみへ、

「おはよう」

わぎと、陽気にいつて、

「おばさん、いやに鬱ふさいでいるじやないか」

「そうかえ」

「どうしたんだい、おばさんの良人おつとを打つたという辻風典馬は、打ち殺してくれたし、その乾兒こぶんも、懲こらしてやったのに、鬱ふさいでいることはなかりうに」

又八の怪訝いふかるのはもつともだった。典馬を討つてやったことはどんなに、この母娘おやこから欣よろこばれることだろうと期待していたのに、ゆうべも、朱実は手をたたいて喜んだが、お甲は、かえつて不安な顔を見せた。

その不安を、今日まで持ち越して、炬ばたに沈みこんでいるの

が、又八には、不平でもあるし、わけがわからない——

「なぜ。なぜだい、おばさん」

朱実の汲んでくれた渋茶をとって、又八は膝をくむ。お甲は、うすく笑った、世間を知らない若者のあらい神経を羨むうらやように。

「——だって、又さん、辻風典馬にはまだ何百という乾児こぶんがあるんだよ」

「あ、わかった。——じゃあ奴らの仕返しを、恐がっているんだな、そんな者がなんだ、俺と武蔵がおれば——」

「だめ」

軽く手を振った。

又八は、肩を盛りあげて、

「だめなことはない、あんな虫けら、幾人でも来い、それとも、おばさんは、俺たちが弱いと思つていいのか」

「まだ、まだ、お前さん達は、わたしの眼から見ても、嬰あかン坊だもの。典馬には、辻風黄平こうへいという弟があつて、この黄平がひとり来れば、お前さん達は、束たばになつても敵かなわない」

これは又八にとつて心外なる言葉であつた。けれど、だんだんと後家の話すところを聞くと、そうかなあと思わぬこともない。

辻風黄平は、木曾の野洲川やすがわに大きな勢力を持つてゐるばかりでなく、また兵法の達人であるばかりでなく、乱波らっぱ（忍者しのび）の上手で、この男が殺そうと狙つけねらつた人間で天寿を全まうしてゐる者はかつてなかつた。正面から名乗つてくるなら防ぎもなろうが、寝首

搔^かきの名人には、防ぎがないというのである。

「そいつは、苦手だな、おれのような寝坊には……」

又八が、腮^{あご}をつまんで考えこむと、お甲は、もうこうなつては仕方がないから、この家をたたんで、どこか、他国へ行つて暮すほかはない、ついては、おまえさん達二人はどうするかといひだした。

「武蔵^{たけぞう}に、相談してみよう。——どこへ行つたら、あいつめ」
戸外^{おもて}にも、いなかった。手をかざして遠くを見ると、今し方、

家のまわりにうろついていた野馬の背にとび乗つて伊吹山の裾野を乗りまわしている武蔵のすがたが、遙かに、小さく見えた。

「のん気な奴だな」

又八は、つぶやいて、両手を口にかざした。

「おおいっ。帰って来いようっ」

五

枯れ草のうえに、二人は寝ころんだ。友達ほどいいものはない、寝ころびながらの相談もいい。

「じゃあ、俺たちは、やっぱり故郷くにへ帰ると決めるか」

「帰ろうぜ。——いつまで、あの母娘おやこと一しよに暮しているわけにもゆくまい」

「ウム」

「女はきらいだ」

武蔵が、いうと、

「そうだな、そうしよう」

又八は、仰向けにひっくり返った。そして青空へ向って、どなるように、

「——帰ると決めたら、急に、おら、お通の顔が見たくなつた！」
脚を、ばたばたさせて、

「畜生、お通が、髪の毛を洗った時のような雲があるぞ」
と、空を指さす。

武蔵は、自分の乗りすてた野馬の尻を見ていた、人間なかまでも、野に住む者の中がいい性質があるように、馬も野馬は気だて

がよい、用がすめば、何も求めず、勝手にひとりでどこへでも行つてしまふ。

むこうで、朱実が、

「御飯ですようっ——」

と、呼ぶ。

「飯だ」

二人は起き上がって、

「又八、馳かけ競ツこ」

「くそ、負けるか」

朱実は、手をたたいて、草ぼこりを立てて駈けてくる二人を迎えた。

——だが、朱実は、午^{ひる}すぎから急に沈んでいた、二人が、故郷^{くに}へ帰ると決めたことを聞いてからである。二人が家庭に交^まじりつてからの愉快な生活を、この少女は、この先も長いものと思つていたらしかつた。

「お馬鹿ちゃんだよ、お前さんは、何をメソメソしているのだえ」
夕化粧をしながら、後家のお甲は、叱つていた、そして、炬^{たき}ばたにいた武蔵を、鏡の中から、睨^{にら}みつけた。

武蔵はふと、前の晩の、枕元へ迫つた後家のささやきと、甘酸^{あまざす}い髪の香^かをおもいだして、横を向いた。

横には、又八がいた、酒の壺^{つぼ}を棚から取つて、自分の家の物のように勝手に酒瓶^{ちゅうりん}へうつしているのだ、今夜はお別れだから大い

に飲もうというのである、後家の白粉おしろいは、いつもより念入りだった。

「あるったけ飲んでしまおうよ。縁の下に残して行つたつてつまらない」

酒壺を三つも倒した。

お甲は、又八にもたれかかつて、武蔵が顔をそむけるような悪ふざけをして見せた。

「あたし……もう歩けない」

又八に甘えて、寢所まで、肩を借りて行く程だった。そして、面つらあてのように、

「武さんは、そこいらで、一人でお寝。——一人が好きなんだか

ら」

と、いった。

いわれた通り武蔵はそこで横になってしまった。ひどく酔っていたし、夜もおそかったし、眼がさめたのは、もう、翌日の陽がカンカンあたっている頃だった。

——起き出で、彼がすぐ気づいたことは、家の中が、がらんとしていることだった。

「おや？」

きのう朱実と後家がひとまとめにしていた荷物が無い、衣裳も、はきもの履物も失くなっている。第一、その母娘のおやこすがたばかりでなく、又八が見えないのだ。

「又八つ。……おいつ」

裏にも、小屋の中にも、いなかった。ただ開け放しになつてい
る水口のしきい際ぎわに、後家のさしていた朱あかい櫛くしが一枚落ちていた
だけである。

「あ？ ……又八め……」

櫛を鼻につけて嗅かいでみた、おとといの晩の恐い誘惑をその香にお
いは思い出させた、又八は、これに負けたのだ、なんともいえな
い淋しみしさが胸をつきあげた。

「阿呆あほうつ、お通さんを、どうする気か」

櫛を、そこへ、たたきつけた。自分の腹立たしきより、彼を故く
郷にで待っているお通のために泣きたい気がする——

憮然^{ぶぜん}として、いつまでも、台所にぶつ坐っている武蔵のすがた
 を見て、きのうの野馬が、のつそりと、軒下から顔を出した。い
 つものように、武蔵が鼻づらを撫でてやらないので、馬は、流し
 元にふやけている飯粒を舐^なめまわしていた。

花御堂^{はなみどう}

一

山また山という言葉は、この国において初めてふさわしい。播^ば
 州^{んしゅう}龍野^{りゅうたつ}口^{のぐち}からもう山道である、作州街道はその山ばかりを縫

つて入る、国境の棒杭ぼうぐいも、山脈の背なかに立っていた、杉坂を越え、中山峠を越え、やがて英田川あいだがわの峽きようこく谷を足もとに見おろすあたりまでかかると、

(おやこんな所まで、人家があるのか)

と、旅人は一応そこで眼をみはるのが常だった。

しかも戸数は相当にある。川沿いや、峠の中腹や、石ころ畑や、部落の寄りあいではあるが、つい去年の関ヶ原の戦いくさの前までは、この川の十町ばかり上流かみには、小城ながら新免伊賀守の一族が住んでいたし、もつと奥には、因州境よしかいの志戸坂しどさかの銀山に、鉾山かなやま掘ほりが今もたくさん来ている。

——また鳥取から姫路へ出る者、但馬たじまから山越えで備前へ往来

する旅人など、この山中のひとまち一町には、かなり諸国の人間がながれこむので、山また山の奥とはいえ、旅籠はたごもあれば、呉服屋もあり、夜になると、白い蝙蝠こうもりのような顔をした飯盛女めしもりおんなも軒下に見えたりする。

ここが、宮本村だった。

石を乗せたそれらの屋根が、眼の下に見える七宝寺しっぽうじの縁がわで、お通つうは、

「アア、もうじき、一年になる」

ぼんやり、雲を見ながら、考えていた。

孤児みなしごであるうえに、寺育ちのせいもあるう、お通おとめという処女は、香炉こうろの灰のように、冷たくて淋しい。

年は、去年が十六、許いいなずけ嫁いの又八とは、一つ下だった。

その又八は、村の武蔵たけぞうといつしよに、去年の夏、戦いくさへとびだしてから、その年が暮れても、沙汰がなかった。

正月には——二月には——と便りの空だのみも、この頃は頼みに持てなくなった。もう今年の春も四月に入っているのだった。

「——武蔵さんの家へも、何の音沙汰がないというし……やつぱり二人とも、死んだのかしら」

たまたま、他人ひとに向つて、嘆息をもらして訴えると、あたりまえじやと、誰もがいう。ここの領主の新免伊賀守の一族からして、一人として、帰つて来た者はいないのだ、戦いくさの後、あの小城へ入っているのは、みな顔も見知らない徳川系の武士衆さむらいしゅうではない

かという。

「なぜ男は、戦いくさになど行くのだろう。あんなに止めたのに——」

縁がわに坐りこむと、お通は、半日でもそうして居られた、さびしいその顔が、独りで物思ものうことを好むように。

きょうも、そうしていると、

「お通さん、お通さん」

誰かよんでいる。

庫裡くりの外とだった。真まつ裸はだかな男が、井戸いどのほうから歩いてくる、

まるで煤いぶしにかけた羅漢らかんである。三年か四年目には、寺へ泊たる但た馬じまの国の雲水うんすいで、三十歳じゅうさんじぐらいな若い禅坊主ぜんぼうしゅなのだ、胸毛むねげのはえた肌はだを陽ひなたにさらして、

「——春だな」

独りでうれしそうにいう。

「春はよいが、半風子のやつめ、藤原道長のように、この世をばわがもの顔に振舞うから、一思いに今、洗濯したのさ。……だが、このボロ法衣ごころも、その茶の木には干しにくいし、この桃の樹は花ざかりだし、わしが生半可なまはんか、風流を解する男だけに、干し場に困ったよ。お通さん、物干し竿あるか」

お通は、顔を紅らめて、

「ま……沢庵たくあんさん、あなた、裸になってしまつて着物の乾くあ

いだ、どうする気です？」

「寝てるさ」

「あきれたお人」

「そうだ、明日ならよかった、四月八日の灌かんぶつえ仏会だから、甘茶を浴びて、こうしている——」

と、沢庵は、真面目くさって、両足をそろえ、天てんじょうてんげ上天下へ指をさして、お釈迦しゃかさまの真似をした。

二

「——天上天下唯ゆいがどくそん我独尊」

いつまでもご苦労さまに、沢庵が真面目くさって、誕たんじょうぶつ生仏の真似して見せているので、お通は、

「ホホホ、ホホホ。よく似あいますこと。沢庵さん」

「そつくりだろう、それもそのはず。わしこそはしつたるたたいし悉達多太子の生れかわりだ」

「お待ちなさい、今、頭から甘茶をかけてあげますから」

「いけない。それは謝る」

蜂が、彼の頭をさしに来た。お釈迦さまはまた、あわてて蜂へも両手をふりまわした。蜂は、彼のふんどしが解けたのを見て、その隙に逃げてしまった。

お通は、縁にうつ伏して、

「アア、お腹なかがいたい」

と、笑いがとまらずにいた。

但馬たじまの国生れの宗しゅう彭ほう沢たく庵あんと名のるこの若い禅坊主には、ふさぎ性のお通も、この青年僧の泊っているあいだは、毎日笑わずにいられないことが多かつた。

「そうそうわたしは、こんなことをしてはいられない」
草履へ、白い足をのばすと、

「お通さん、どこへ行くのかね」

「あしたは、四月八日でしょう、和尚おしょうさんから、いつつけられていたのを、すっかり忘れていた。毎年するように、花はな御堂みどうの花を摘つんできて、灌かん仏ぶつ会えのお支度をしなければならぬし、晩には、甘茶も煮ておかなければいけないでしょう」

「——花を摘みにゆくのか。どこへ行けば、花がある」

「しもしよ下の庄の河原」

「いっしよに行こうか」

「たくさん」

「花御堂にかざる花を、一人で摘むのはたいへんだ、わしも手伝おうよ」

「そんな、裸のまままで、見ツともない」

「人間は元来、裸のものさ、かまわん」

「いやですよ、尾ついて来ては！」

お通は逃げるように、寺の裏へ駈けて行つた。やがて負おい籠かごを背にかけ、鎌を持って、こつそり裏門からぬけてゆくと、沢たくあん庵は、どこから捜してきたのか、ふとんでも包むような大きな風呂

敷を体に巻いて、後から歩いてきた。

「ま……」

「これならいいだろう」

「村の人が笑いますよ」

「なんと笑う？」

「離れて歩いてください」

「うそをいえ、男と並んで歩くのは好きなくせに」

「知らない！」

お通は先へ駈け出してしまふ。沢庵たくあんは、雪山せつせんから降りてき

たしやくそん 糶尊しやくそんのように、風呂敷のすそをへんぽん 翩翻へんぽんと風にふかせながら、

後ろから歩いて来るのであつた。

「アハハハ、怒ったのかい、お通さん、怒るなよ、そんなにふくれた顔すると、恋人にきらわれるぞ」

村から四、五町ほど下流しもの英田川あいだがわの河原には、撩りょうらん乱と春の草花がさいていた。お通は、負い籠をそこにおろして、蝶の群れにかこまれながら、もうそこらの花の根に、鎌の先をうごかしている——

「平和だなあ」

青年沢庵は、若くして多感な——そして宗教家らしい詠嘆えいたんを洩らしてその側に立った。お通が、せつせと花を刈っている仕事には手伝おうともしないのである。

「……お通さん、おまえの今の姿は、平和そのものだよ。人間は

誰でも、こうして、万華まんげの浄土じょうどに生を樂しんでいられるものを、好んで泣き、好んで悩み、愛慾しゆらと修羅るつぽの坩堝おへ、われから墜おちて行つて、八寒十熱の炎に身を焦やかなければ気がすまない。……お通さんだけは、そうさせたくないものだな」

三

菜なのはな、春菊、鬼まげし、野のばら、すみれ——お通は刈りとるそばから籠へ投なげて、

「沢庵たくあんさん、人にお説教するよりは、自分の頭をまた蜂にさされないようにお気をつけなさいよ」

と、ひやかした。

沢庵は、耳も貸さない。

「ばか、蜂の話じゃないぞ、ひとりの女人にょにんの運命について、わしは釈尊のおつたえをいつているのだ」

「お世話やきね」

「そうそう、よく喝破かつぱした。坊主という職しやうばい業は、まったく、

おせっかいな商売にちがいない。だが、米屋、呉服屋、大工、武士——と同じように、これもこの世に不用な仕事でないから有ることにも不思議でない。——そもそもまた、その坊主と、女人とは、三千年の昔から仲がわるい。女人は、夜叉やしや、魔王、地獄使じごくしなどと仏法からいわれているからな。お通さんとわしと仲のわるいのも、

遠い宿縁だろうな」

「なぜ、女は夜叉？」

「男をだますから」

「男だって、女をだますでしょ」

「——待てよ、その返辞は、ちよつと困つたな。……そうそうわかつた」

「さ、答えてごらんなさい」

「お釈迦しゃかさまは男だった……」

「勝手なことばかりいって！」

「だが、女人よ」

「オオ、うるさい」

「女人よ、ひがみ給うな、釈尊もお若いころは、菩提樹ぼだい下で、欲よ染くぜん、能悦のうえつ、可愛かあい、などという魔女たちに憑つきなやまされて、ひどく女性を悪観したものだ、晩年になると、女のお弟子も持たれている。龍樹りゆうじゆぼさつ菩薩は、釈尊にまけない女ぎらい……じやアない……女を恐がつたお方だが、随順ずいじゆん姉妹しまいとなり、愛樂あいらく友ゆうとなり、安慰母あんいぼとなり、随意婢使ひしとなり……これ四賢良妻なり、などと仰つしやつてゐる、よろしく男はこういう女人を選べといつて、女性の美德を讃たたえている」

「やっぱり、男のつごうのいいことばかりいつてるんじやありませんか」

「それは、古代の天竺てんじく国が、日本よりは、もつともつと男尊女

卑の国だったからしかたがない。——それから、龍樹菩薩ぼさつは、女人にむかつて、こういうことばを与えている」

「どういうこと？」

「女人よ、おん身は、男性に嫁とつぐなかれ」

「ヘンな言葉」

「おしまいまで聞かないでひやかしてはいけない。その後こういう言葉がつく。——女人、おん身は、真理に嫁かせ」

「……………」

「わかるか。——真理に嫁せ。——早くいえば、男にほれるな、真理に惚れるということだ」

「真理って何？」

「訊かれると、わしにもまだ分っていないらしい」

「ホホホ」

「いつそ、俗にいおう、真実に嫁ぐのだな。だから都の軽薄なあこがれの子など孕はらまずに、生れた郷土で、よい子を生むことだな」
「また……」

打つ真似をして、

「沢庵さん、あなたは、花を刈る手伝いに来たんでしよう」

「そうらしい」

「じゃあ、喋しゃべ舌べつてばかりいないで、すこし、この鎌を持って下

さい」

「おやすいこと」

「その間に、私は、お吟ぎん様の家へ行つて、あした締める帯がもう縫えているかも知れないから、いただいて来ます」

「お吟様。アア、いつかお寺へ見えた婦人の邸やしきか、おれも行くよ」

「そんな恰かつこう好で——」

「のどが渴かわいたのだ。お茶をもらおう」

四

もう女の二十五である、きりようが醜みにくいわけではなし、家からはよいのだし、そのお吟に嫁入り話がないわけでは決してなかつた。

もつとも、弟の武蔵たけぞうが近郷きつての暴れんぼで、本位ほんいでんむら田村の又八か宮本村の武蔵かと、少年時代から悪太郎あくたろうの手本にされているので、

(あの弟がいては)

と、縁遠いところも多少あつたが、それにしてもお吟のつつましさや、教養を見こんで、ぜひ——という話は度々あつた。しかしその都度つど、彼女の断る理由は、いつでも、(弟の武蔵が、もうすこし大人になるまでは、わたくしが、母となつていてやりとうございますから——)

という言葉であつた。

兵学の指南役として新免家しんめんけに仕えていた、父の無二齋がその

新免という姓を主家からゆるされた盛りの時代に建てた屋敷なので、英田川あいだがわの河原を下にした石築き土堀まわしの家構えは、郷士には過ぎたものであった。広いままに古びて、今では屋根には草あやめが生え、そのむかし十手術の道場としていた所の高窓とひさし廂のあいだには、燕ふんの糞が白くたかっていた。

永い牢ろうにん 人生活の後の貧しい中に父は死んで行つたので、召使もその後はいないが、元の雇やといにん 人はみなこの宮本村の者ばかりなので、そのころの婆やとか仲ちゆうげん 間とかが、かわるがわるに來ては台所へ黙つて野菜を置いて行つたり、開けない部屋を掃除して行つたり、水みずがめ 瓶に水をみたして行つたりして、衰えた無二齋の家を守っていてくれている。

今も——

誰か裏の戸をあけて入ってくる者があるとは思つたが、おおかたそれらの中の誰かであろうと、奥の一室に縫い物をしていたお吟は、針の手もとめずにいると、

「お吟さま。今日は——」

うしろへお通つうが来て、音もなく坐っていた。

「誰かと思つたら……お通さんでしたか。今、あなたの帯を縫っているところですが、あしたの灌かんぶつえ仏会に締めるのでしよう」

「ええ、いそがしいところを、すみませんでした。自分で縫えばいいんですけれど、お寺のほうも、用が多くなって」

「いいえ、どうせ、私こそ、ひまで困っているくらいですもの。」

……何かしていないと、つい、考えだしていけません」

ふと、お吟のうしろを仰ぐと、とうみようざら燈明皿とうみようざらに、小さな灯がまたたいていた。その仏壇には、彼女が書いたものらしく、

行年十七歳 新免武蔵之靈

同年 本位田又八之靈

ふたつの紙位牌かみいはいが貼つてあり、ささやかな水と花とが捧げられているのだった。

「あら……」

お通は、眼をしばたいて、

「お吟様、おふたりとも、死んだという報しらせが来たのでござい
ますか」

「いいえ、でも……死んだとしか思えないではございませんか、私は、もうあきらめてしまいました。関ヶ原の戦いくさのあつた九月十五日を命日と思っています」

「縁起えんぎでもない」

お通は、つよく顔を振って、

「あの二人が、死ぬものですか、今にきつと、帰つて来ますよ」

「あなたは、又八さんの夢を見る？ ……」

「え、なんども」

「じゃあ、やっぱり死んでいるのだ、私も弟の夢ばかり見るから」

「嫌ですよ、そんなことをいつては。こんなもの、不吉だから、剥はがしてしまふ」

お通の眼は、すぐ涙をもった。起たつて行つて、仏壇の燈明をふき消してしまふ。それでもまだ忌いまわしさが晴れないように、捧あげである花と水の器うつわを両手に持つて、次の部屋の縁先へ、その水をさつとこぼすと、縁の端に腰をかけていた沢たく庵あんが、

「あ、冷たい」

と、飛びあがつた。

五

着ている風呂敷で、沢庵は、顔や頭のしづくをこすりながら、「こらつ、お通阿女あま、なにをするか。この家で、茶をもらおうと

はいつたが、水をかけてくれとは誰もいわぬぞ」

お通は、泣き笑いに笑ってしまった。

「——すみません、沢庵さん、ごめんなさいませ」

謝ったり、機嫌をとったり、また、そこへ望みの茶を汲んで与えたりして、やがて奥へもどつて来ると、

「誰ですか、あの人は」

と、お吟は、縁のほうを覗いて、眼をみはっていた。

「お寺に泊っている若い雲水さんです。ほら、いつか、あなたが来た時に、本堂の陽あたりで、頬づえをして寝そべっていたでしょう。その時、わたしが、何をしているんですかと訊ねると、半風子に角力をとらせているんだと答えた汚い坊さんがあつたじゃ

ありませんか」

「あ……あの人」

「え、宗しゅうほう 彭 沢庵さん」

「変り者ですね」

「大変り」

「法衣ころもでもなし、袈裟けさでもなし、何を着ているんです、いったい」

「風呂敷」

「ま……。まだ若いのでしよう」

「三十一ですって。——けれど、和尚おすさまに訊くと、あれでも、

とても偉い人なんですとさ」

「あれでもなんていうものではありません、人はどこが偉いか、

見ただけでは分りませんからね」

「但馬たじまの出石村いずしの生れで十歳で沙弥しゃみになり、十四歳で臨濟りんざいの勝福寺に入つて、希先きせん和尚きかいに帰戒をさずけられ、山城の大徳寺からきた碩学せきがくについて、京都や奈良に遊び、妙心寺の愚堂和尚とか泉南いづとうぜんじの一凍いっとう禅師ぜんじとかに教えをうけて、ずいぶん勉強したんですつて」

「そうでしょうね、どこか、違つたところが見えますもの」

「——それから、和泉いづみの南宗寺の住持ぢゆうぢにあげられたり、また、勅命をうけて、大徳寺の座主ざすにおされたこともあるんだそうですが、大徳寺は、たった三日いたきりで飛びだしてしまい、その後、豊臣秀頼さままだの、浅野幸長よしながさままだの、細川忠興さままだの、なお

く卿方では烏丸光広さまなどが、しきりと惜しがって、一寺を建こんりゆう立するから来いとか、寺禄じろくを寄進するからとどまれとかいわれるのだそうですが、本人は、どういう気持か分りませんが、ああやって、半風子しらみとばかり仲よくして、乞食おかみたいのに、諸国をふらふらしているんですって。すこし、気が狂おかしいんじゃないんですでしょうか

「けれど、向うから見れば、私たちのほうが気が変だというかも知れません」

「ほんとに、そういいますよ。私が、又八さんのことを思い出して、独りで泣いていたりしていると……」

「でも、面白い人ですね」

「すこし、面白すぎますよ」

「いつ頃までいるんです？」

「そんなこと、わかるもんですか、いつも、ふらりと来て、ふらりと消えてしまう。まるで、どこの家でも、自分の住居すまいと心得ている人ですもの」

縁がわの方から、沢庵たくあんは、身をのばして、

「聞えるぞ、聞えるぞ」

「悪口をいつていたのじゃありませんよ」

「いつてもよいが、なにか、あまいものでも出ないのか」

「あれですもの、沢庵さんと来たひには」

「なにが、あれだ、お通阿女あま、お前のほうが、虫も殺さない顔し

て、その実、よほど性が悪いぞたち

「なぜですか」

「人にカラ茶をのませておいて、のろけをいったり泣いたりして
いる奴があるかつ」

六

だいしょうじ

大聖寺の鐘が鳴る。

七宝寺のかねも鳴る。

夜が明けると早々から、午過ひるぎも時折、ごうんごうんと鳴って
いた。赤い帯をしめた村の娘、商家のおかみさん、孫の手をひい

てくる老^{としより}婆^{より}たち。ひつきりなし寺の山へ登つて来た。

若い者は、参詣人のこみあつて七宝寺の本堂をのぞき合つて、

「いる、いる」

「きようは、よけいに綺麗にして」

などと、お通のすがたを見て、囁^{ささや}いて行く。

きようは灌^{かんぶつえ}仏^{ぶつ}会の四月八日なので、本堂の中には、菩提^{ぼだいじゆ}樹

の葉で屋根を葺^ふき、野の草花で柱を埋めた花^{はな}御^み堂^{どう}ができていた、

御堂の中には甘茶をたたえ、二尺ばかりの釈尊の黒い立像が天上

天下を指さしている、小さな竹^{たけ}柄^{びしやく}杓^{やく}をもつて、その頭から甘茶

をかけたたり、また、参詣人の求めに応じて、順々にさし出す竹筒

へ、その甘茶を汲んでやっているのは、宗しゅう 彭ほう 沢庵であつた。

「この寺は、貧乏寺だから、おさい銭はなるべくよけいにこぼして行きなよ。金持は、なおのことだ、一杓しやくの甘茶に、百貫の金かねをおいてゆけば、百貫だけ苦惱がかかるくはうけあいだ」

花御堂を挟んで、その向つて左側にお通は塗机をすえて坐つていた、仕立ておろしの帯をしめ、蒔絵まきえのすずり箱をおき、五色の紙に、禁厭まじないの歌をかい、それを乞う参詣者まきえに頒わけているのである。

ちはやふる

うづきようか

卯月八日は吉きち日にちよ

かみさげ虫を

成敗せいばいぞする

家の中へこの歌を貼っておくと、虫除けや悪病よけになるとこの地方ではいい伝えている。

もう手くびの痛くなるほど、お通は、同じ歌を何百枚もかいた、こうぜいふう行成風のやさしい文体が少しくたびれかけていた。

「沢庵さん」

——と彼女はすきを見ていった。

「なんじやい」

「あまり、人様に、おさい銭の催促をするのはよして下さい」

「金持にいつているんだよ、金持の金をかるくしてやるのは、善の善なるものだ」

「そんなことをいって、もし今夜、村のお金持の家へ泥棒でも入ったらどうしますか」

「……そらそら、すこしすいたと思つたらまた参詣人が混こんで来たよ。押さないで、押さないで——おい若いの——順番におしよ」
「もし、坊さん」

「わしかい？」

「順番といいながら、おめえは、女にばかり先へ汲んでやるじゃないか」

「わしも女子おなごは好きだから」

「この坊主、極ごく道者だ」

「えらそうにいうな、お前たちだつて、甘茶や虫除けが貰いたく

て来るんじゃないやあるまい、わしには、分っている、お釈迦さまへ掌てを
あわせに来るのが半分で、お通さんの顔を拝みにくる奴が半分。
お前らも、その組だろう。——こらこらおさい錢をなぜおいてゆ
かん、そんな量りようけん見では、女にもてないぞ」

お通は、真まつ紅かになつて、

「沢庵さん、もういいかげんにしないと、ほんとに私、怒ります
よ」

と、いった。

そして、疲れた眼でも休めるように、ぼんやりしていたが、ふ
と、参詣人の中に見えた一人の若者の顔へ、

「あつ……」

と口走ると、指の間から筆を落した。

彼女が、起つと共に、彼女の見た顔は、魚のようにすばやく潜ひそんでしまった。お通は、われを忘れて、

「武蔵たけぞうさんつ、武蔵さんつ……」

廻廊のほうへ駈けて行つた。

野のの人ひとたち

一

ただの百姓ではない、半農半武士だ、いわゆる郷士なのである。

本位^{ほんいでん}田家の隠居は、きかない気性の老母^{としより}だった、又八のおふくろに当る人だ、もう六十ぢかいが、若い者や小作の先に立つて野良仕事に出かけ、畑も打てば、麦も踏む、暗くなるまでの一日仕事をおえて帰るにも、手ぶらでは帰らない、腰の曲つた体のかくれるほど、春蚕^{はるご}の桑の葉を背負いこんで、なお、夜業^{よなべ}に飼蚕^{かいこ}でもやろうというくらいなお杉婆^{すぎ}あさんであった。

「おばばアー」

孫の鼻たらしが、畑のむこうから、素はだしで来るのを見かけて、

「おう、丙太^{へいた}よつ、汝^われ、お寺へ行つたのけ？」

桑畑から腰をのばした。

丙太は、躍って来て、

「行ったよっ」

「お通さん、いたか」

「いた、きようはな、おばば、お通姉さんは美麗な帯をして、花祭りしていた」

「甘茶と、虫除けの歌を、もろうて来たか」

「ううん」

「なぜもろうて来ぬのだ」

「お通姉さんが、そんな物はいいから、はやくおばばに知らせに、家へ帰れけえというたんや」

「何を知らせに？」

「河向いの武蔵たけぞうがなよ、今日の花祭りに歩いていたのを、お通姉さんが見たのだとよ」

「ほんとけ？」

「ほんとだ」

「……………」

お杉は眼をうるませて、息子の又八のすがたが、もうそこらに見えてでもいるように見まわした。

「丙太、汝われ、おばばに代つて、ここで桑摘つんどれ」

「おばば、どこへゆくだ」

「邸やしきへ、帰けえつてみる、新免家しんめんけの武蔵がもどつていゝなら、又八

も、邸やしきへ帰けえつていゝにちがいなからう」

「おらも行く」

「阿呆、来んでもええ」

大きな櫛かしの木にかこまれた土豪の住居である。お杉は、納屋なやの前へ駈けこむと、そこらに働いている分家の嫁や、作さく男おとこに向つて、

「又八が、帰けえつて来たかよつ」

と、怒鳴つた。

みんな、ぽかんとして、

「うんにや」

と、首を振つた。

しかし、この老母の興奮は、人々のいぶかるのを、間抜けのよ

うに叱りつけた。息子はもう村へ帰っているのだ。新免家の武蔵が村をあるいている以上、又八も一緒にもどつて来ているに違いない、早くさがして邸へ引っぱつて来いと命じるのだった。

関ヶ原の合戦の日を、ここでも大事な息子の命日として悲しんでいたところだった、わけてもお杉は、又八が可愛くて、眼の中へでも入れてしまいたい程なのだった、又八の姉には智を持たせて分家させてあるので、その息子は、本位田家の後継息子あとつぎむすこでもあつた。

「見つかったかよつ？」

お杉は、家うちを出たり入ったりして、繰返し繰返し訊ねていた。

——やがて日が暮れると、先祖の位牌いはいに、燈明あかしをともし、何か

念じるように、その下に坐っていた。

夕飯もたべずに、家の者は皆、出払っていた、夜になつても、その人々からの吉報はなかなか聞かれなかつた。お杉はまた、暗い門口へ出て、立ちとおしていた。

水っぽい月が、邸のまわりの檜かしこずえの梢にあつた、後ろの山も、前の山も白い霧につつまれ、梨なし畑ぼたけの花から甘い香がただよつてくる。

その梨畑あぜの畦から、誰か歩いてくる影が見えた、息子の許いいなず嫁けであるかと分ると、お杉は手をあげた。

「……お通かよ？」

「おば様」

お通は、濡れ草履ぬぞうりの音を重そうに、走り寄ってきた。

二

「お通。——おぬし、武蔵のすがたを見たそうだが、ほんとけ？」

「え。たしかに武蔵さんなんです、七宝寺の花祭りに見えました」

「又八は、見えなんだかよ」

「それを訊こうと思って、急いで呼ぶと、なぜか、隠れてしまっ
たんです。もとから武蔵さんという人は、変っている人ですが、
なんで、私が呼ぶのに逃げてしまったのかわかりません」

「逃げた？ ……」

お杉は、首をかしげた。

わが子の又八を、戦へ誘惑したものは、新免家の武蔵であるといつて、常々、恨んでいたこの老母は、何か、邪推でもまわしているらしく考えこんでいた。

「あの、悪蔵め……、ことによると、又八だけを死なして、おのれは、臆病かぜに吹かれて、ただ一人のめのめと帰つて来たのかも知れぬ」

「まさか、そんなことはないでしょう。そうならばそうといつて、何か遺物かたみでも持って来てくださるでしょうに」

「なんのいの」

老母は、つよく、顔を振った。

「彼奴が、そんなしおらしい男かよ。又八は、悪い友達を持ちおつたわ」

「ばば様」

「なんじゃ？」

「私の考えでは、きつと、お吟様の邸へゆけば、今夜はそこに武蔵たさんもいるだろうと思ひますが」

「姉きょうだい弟きょうだいじゃもの、それやいるだろう」

「これから、ばば様と二人して、訪ねて行つてみましょうか」

「あの姉も姉、自分の弟が、わしがとこの息子を戦に連れ出して行つたのを承知しながら、その後、見舞にも来ねば、武蔵がもどつたと知らせても来おらぬ。何も、わしの方から出向くすじはな

いわ。新免から来るのが当りまえじゃ」

「でも、こんな場合ですし、一刻もはやく武蔵さんに会って、細かい様子も聞きとうございます。あちらへ参つた上の挨拶はわたしがいいたしますから、おば様もご一緒に来てくださいますせ」

お杉は渋々、承知した。

そのくせ息子の安否を知りたいことは、お通にも劣らないほどだった。

そこから十二、三町はある、新免家は河向うだった。その河を挟んで本位田家も古い郷士だし、新免家も赤松の血統だし、こういうことのない前から、暗黙のうちに、対峙たいじしている間がらであった。

門は閉まつていた、灯りもみえないほど樹立ちがふかい。お通が裏口へまわろうというとき、お杉は、

「本位田の老母としよりが、新免を訪ねるのに、裏口から入るような弱味は持たぬ」

と、動かないのである。

やむなく、お通だけ裏へ廻つて行つた。しばらく経つと、門のうちで灯りがさした。お吟も出て来て迎え入れる。野良で畑を耕しているお杉とは打つて變つて、

「夜中じやが、捨ておかれぬことゆえに、出向いて来ましたぞよ。お迎え、ご大儀じや」

と、高い気位と言葉にも権式けんしきを取つて、ずっと、新免家の一

間へ上がった。

三

荒神様こうじんさまのお使いのように、お杉はだまつて上座へ坐つた。お吟ぎんのあいさつを鷹揚おうようにうけて、すぐ、
 「おまえの家のうち、悪蔵あくぞうがもどつて来たそうじやが、ここへ、呼んでおくりやれ」

と、いった。

藪やぶから棒だ、お吟は、

「悪蔵とは、誰のことでございまするか」

と、訊きかえした。

「ホ、ホ、ホ。これは口が^{すべ}に^{すべ}つた。村の衆がそういうので、^{ばば}婆も
つい染まったとみゆる。悪蔵とは、武蔵のこと、^{いくさ}戦から帰って、
ここに隠れておろうかの」

「いいえ……」

肉親の弟のことを、ずけずけいわれたので、お吟は白^{しら}けた顔に
唇を噛んだ。お通は気の毒になつて、武蔵のすがたを、今日の灌^か
^{んぶつえ}仏会で見かけたと側から告げて、

「ふしぎでございますね、ここへも来ないとは？」

と双方の間をとりなした。

お吟は、苦しげに、

「……来ておりません、姿を見せたなら、そのうちには、参りましようが」

すると、お杉の手が、とんと畳をたたいた、そして、舅しゅうとのようなこわ怖い顔をしていった。

「なんじゃ、今のいい草は。そのうちに参りましょうで、よう済ましていられたもの。そもそも、わしがとこの息子そそのかを唆いして、戦へつれ出したのは、ここの悪蔵じゃないか。又八はな、本位田の家にとつては、大事な大事な、後継あととりじゃぞ。それを——わしの眼をぬすんで誘おびき出したばかりか、おのれ一人、無事にもどつて来て済むものか。……それもよい、なぜ、挨拶に来さつしやらぬ、自体この新免家の姉きょうだい弟は、小癩こしやくにさわる、この婆を何と思

うていなさるのじや。さつ……おのれが家の武蔵が帰つて来たからには、又八も、ここへ帰してください、それが出来ねば、悪蔵めをここへすえて、又八の安否と落着きをこの婆に得とくしん心こころがなるように聞かしてもらいましょう」

「でも、その武蔵がおりませぬことには」

「白しろ々じらしい。おぬしが、知らぬはずはない」

「ご難題でございます」

お吟は、泣き伏してしまった。父の無二斎がいるならばと、すぐ胸うちの裡うちでは思うのだった。

と、その時、縁側の戸が、がたつと鳴った。風ではない、はつきり、戸の外には人の蹠あしおと音おとらしい気配がしたのである。

「おやつ？」

お杉が、眼を光らすと、お通はもう起ちかけていた。——途端に次の物音は、絶叫だった、人間の発する声のうちでは最も獣に近い呻うめきであった。

つづいて、何者かが、

「——あッ、捕まえろっ」

迅はやい烈しい足音が、邸のまわりを駈け出した。樹の折れるような音——藪やぶの揺れて鳴る音——足音は一人や二人のものではない。

「武蔵たけぞうじゃ」

お杉は、そういつて、ぬつと立った。泣き伏しているお吟の襟え元りもとを睨みつけて、

「いるのじゃ！ 見え透すいたことをこの女あまは、婆あまに隠かくしくさる。

なんぞ理わけがあるろう、覚えていやい」

歩いて、縁側の戸を開けた。そして外をのぞくと、お杉は、土つ気ちけいろに顔を変えた。

脛すねへ具足を当てた一人の若者が仰向けになつて死んでいたのである。口や鼻から鮮血をふき出している無残ていな態たいから見ると、何か木剣のような物で、一撃のもとに、打ち殺されたものらしかった。

四

「た……誰じゃ……誰かここに殺されているがの」

お杉のただ事でない顫わななごえき声に、

「えっ？」

お通は、縁側まで行燈あんどんを提さげて出た。お吟も怖こわごわ々大地をの

ぞいてみた。

死骸は、武蔵たけぞうでもなし又八でもなかった。この辺に見馴なれな

い武士なのだ。戦慄のうちにも、ほっとしたように、

「下手人は、何者じやろう？」

お杉は、呟つぶやいて、それから急にお通へ向つて、関かかりあいになる

とつまらないから帰ろうといい出した。お通は、この老母としよりが息

子の又八を盲愛する余り、ここへ来ても酷ひどいことばをいいちらし

たのみで、お吟が可哀そうでならなかつた。何か事情もあろうと
思うし、慰めてもやりたいので、自分は後から帰るといふと、

「そうか。勝手にしやい」

膠にべもなく、お杉はひとりで、玄関から出て行つた。

「お提燈ちようちんを」

と、お吟が親切にいふと、

「まだ、本位田家の婆は、提燈を持たねば歩かれぬほど、
はしておらぬ」
耄碌もうろく

と、いふ。

まつたく、若い者にも負けない氣の老母だつた。外へ出ると、
裾はしよを端折つて夜露のふかい中をててくともう歩み出して行く。

「婆。ちよつと待て」

新免家を出ると、すぐ呼びとめた者がある。彼女のもつとも怖れていたかか関り合あいがもう来たのだ。人影は陣太刀を横たえ、半具足で手足をかためている、この村に見かけない堂々とした武士である。

「そちは、今、新免家から出て来たな」

「はい、左様でござりますが」

「新免家の者か」

「とんでもない」

あわてて、手を振った。

「わしは、河向いの郷士の隠居」

「では、新免武蔵と共に、関ヶ原へ戦いくさに出た本位田又八の母か」

「されば。……それも倅せがれが好んで行つたのではなく、あの悪蔵めに騙だまされたのでござりまする」

「悪蔵とは」

「武蔵のやつで」

「さほどこに、村でもよくいわぬ男か」

「もうあなた様、手のつけられぬ乱暴者でござりましての、倅があんな人間とつき合あうたため、わたしどもまで、どれほど泣きを見たことやら」

「その息子は、関ヶ原で死んだらしいな。しかし、悔やむな、敵かたきはとつてやる」

「あなた様は？」

「それがしは、戦の後、姫路城の抑えに参つた徳川方の者だが、主命をおびて、播州境ざかいに木戸を設け往来人を検あめていたところ、
此邸ここの——」

と、うしろの土塀を指さして、

「武蔵と申す奴が、木戸を破つて逃げおつた。その前から、新免伊賀守の手について、浮田方へ加担かたんした者とわかつているゆえ、この宮本村まで追いつめて来たところじゃ。——したがあの男、おそろしく強い、数日来、追い歩いて、疲れるのを待っているが、容易には捕まらん」

「ア……それで」

お杉は、うなずいた。武蔵が、七宝寺へも、姉の側へも立ち寄らない理^{わけ}が解^とけた。同時に、息子の又八は帰らずに、彼のみ生きて帰ったことが、憤^{いきどお}ろしかった。

「旦那様……なんぼ、武蔵が強うても、捕^やまえるのは、易^{やす}いこと
でございませぬか」

「何せい人数が少ないのだ。今も今とて、彼奴^{きやつ}のために、一人、
打ち殺されたし……」

「婆に、よい智慧がありますのじや、そつと、耳をお貸しなされ
……」

五

どんな策を、囁いたのであろうか。

「む！なるほどな」

姫路城から国境の目付めつけに来ているその武士さむらいは大ききうなずいた。

「首尾ようおやりなされよ」

お杉婆は、煽せんどう動するようについて、立ち去った。

——間もなく。その武士は、新免家の裏手に、十四、五名の人数をまとめていた。何か、密ひそかにいい渡して、やがて堀をこえて邸のうちへなだれこんだ。

若い女同士の——お通とお吟ぎんとが——お互いの薄命でも語らい

合っていたのか、更けた灯りの下に涙をぬぐい合っている所へであつた。人数は土足のまま、両方の襖から入り込んで来て、部屋へいっぱい立ち塞がった。

「……あつ？」

お通は蒼ざめて、おののいたきりだったが、さすがに無二斎の娘であるお吟は却つてきびしい眼でその人々を見つめた。

「武蔵の姉はどつちだ」

一人がいうと、

「私ですが」

と、お吟はいつて、

「邸のうちへ、無断で、何事でござりますか。女住居おんなずまいと

無礼な所作しよさなどあそばすと、ゆるしてはおかれませぬぞ」

膝がしらを向けて責めると、先刻、お杉と立ち話しを交わした組頭らしい武士が、

「お吟は、こつちだ」

と、彼女の顔を指さした。

屋鳴りと同時に灯りが消えた。お通は悲鳴をあげて庭先へまろび落ちた。理不尽りふじんでもあるし、突然な狼藉ろうぜきぶりだ、お吟ひとりに向つて、十名以上の大の男が押しかぶさつて来て繩にかけようとするのである。お吟はそれに対して女とも思われない壮烈な抵抗を見せているのだった。——しかしそれも一瞬だった。ねじ伏せられて、足蹴あしげにされているらしい。——

たいへんだつ。

どこを走つて来たのか自分でもわからないが、とにかく深夜の道を、お通は七宝寺の方へ向つて、裸足はだしのまま人心地もなく駈けていた。平和に馴れてきた処女の胸には、この世が顛動てんどうしたよ
うな衝撃だつた。

寺のある山の下まで来ると、

「お。お通さんではないか」

こかげ樹蔭の石に腰をおろしていた人影が起つて来ていった。宗 彭しゅうほう
うたくあん沢 庵なのである。

「こんな遅くまで帰らないことはないのに、どうしたかと思つて、
捜していた所だつた。おや、はだし跣で？ ……」

彼女の白い足へ眼を落すと、お通は、泣きながらその胸へとびついて訴えた。

「沢庵さん、大変です、アア、どうしよう」

沢庵は、相変らず、

「大変？ ……世の中に大変なんていうことがそうあるだろうか。まあ、落着いて、理^{わけ}を聞かせなさい」

「新免家のお吟さんが捕まって行きました。 ……又八さんは帰って来ないし、あの親切なお吟様は捕まってゆくし。 ……わ、わたし、これから先 ……ど、どうしたらいいんでしょう」

泣きじやくつて、いつまでも沢庵の胸に身をふるわせていた。

いばら
茨

一

土も草も大地は若い女のような熱い息をしている、むしむしと顔の汗からも陽炎かげろうが立ちそうである。そして、ひそりとした春の昼中。

武蔵たけぞうはひとり歩いてきた。自己の対象となる何物もない山中を、いらいらした眼つきを持ち、例の黒檜くろがしの木剣を杖に持つてである。彼はひどく疲れているらしかった。禽とりが飛んでも、すぐ鋭い眸ひとみがそれに動く。動物的な官能と猛気が、泥や露に汚れ果

てた全身に漲みなぎっていた。

「畜生つ……」

誰にとはなく、こう呪のろいを呟くと、やり場のない憤いきどおりが、ふいに木剣をうならせて、

「えいッ！」

太い生木の幹を、パツと割った。

木の裂け目から白い樹乳ちちがながれた、母の乳を思いだしたか、じつと目を注いでいた。母のいない故郷は、山も河もたださびしかった。

「おれを、この村の者は、なんで目の仇かたきにするんだ。——おれの姿を見れば、すぐ山の関所へ告げ口するし、おれの影を見れば、

狼おおかみに出会ったようにこそそこそ逃げてしまふ……」

彼は、この讚甘さぬもの山に、きようで四日も隠れていた。

ひる霞がすみのあなたには、先祖以来の——そして孤独の姉がいる邸が望まれるし、すぐ麓ふもとの樹の中には七宝寺の屋根がしずかに沈んで見える——

だが、そのどつちへも、彼は近づき得ないのである。灌仏かんぶつ会

の日に、人ごみに紛まぎれて、お通つうの顔を見に行つたが、お通が、大きな声で自分の名を群衆の中でよんだので、発見されたら、彼女へも禍わざわいがかかるし、自分も、捕まつてはならぬと思つて、あわてて姿を晦くらましてしまった。

晩になつて、姉のいる邸へもそつと訪ねて行つたが、折悪く又

八の母が来ていた。又八のことを訊かれたら何といおう、自分だけが帰つて来て、あの老母としよりに何と詫びようかななどと、外にたたずんだまま、姉のすがたを戸の隙間からのぞき見して惑っているうちに、張り込んでいた姫路城の武士さむらいたちに見つかつてしまい、言葉もひとつ交わさぬうち、姉の邸からも逃げ退かなければならなかつた。

それ以来は、この讚甘さぬもの山から見ていると姫路の武士さむらいたちが、自分の立ち廻りそうな道を、血眼ちまなこになつて捜し歩いている様子だし、村の者も結束して、毎日、あの山この山と、山狩をして自分を捕まえようとしているらしく思われる。

「……お通さんだつて、俺を、どう考えているか？」

武蔵は、彼女にさえも、疑心暗鬼を持ち始めた、故郷ふるさとのあらゆる人間が、敵となつて、自分の四方を塞ふさいでいるように疑われて来るのだつた。

「お通さんには、又八がこういう理由わけで帰らなくなつたのだと、ほんとのことは、いい難にくい。……そうだ、やつぱり又八のおふくろに会つて告げよう。それさえ果せば、こんな村に、誰がいてやるか」

武蔵は腹をきめて、歩みかけたが、明るいうちは里へ出られなかつた。小石をつぶてにして、小鳥を狙い撃ちに落とし、すぐ毛をむしつて、その生温かい肉を裂いては、生のままむしやむしやと食べて歩いていた。

すると、

「あつ……」

出会いがしらのことである。誰か、彼のすがたを見ると共に、樹の間へあわてて逃げこんだ者がある。武蔵は、理由なく自分を忌み厭う人間に、憤ツとしたらしく、

「待てツ」

ひょう豹のように跳びついた。

二

よくこの山を往来する炭焼きなのだ。武蔵はこの男の顔を見知

っている、襟えりがみをつかんでひき戻しながらいった。

「やいつ、なぜ逃げる？ 俺はな、忘れたか、宮本村の新免武蔵だぞ、何も、捕つて食おうといいはしない。挨拶もせず、人の顔見て、いきなり逃げいでもよかろう」

「へ、へい」

「坐れ」

手を離すと、また逃げかけるので、今度は、弱腰を蹴とばして、木剣で撲なぐるまねをすると、

「わっツ」

頭をかかえて、男はうつ伏した、そのまま腰をぬかしたように戦慄して、

「た、たすけてッ」

と、喚わめいた。

村の者が、何のために、自分をこんなに恐怖するのか、武蔵たけぞうにはわからなかった。

「これ、俺が訊くことに、返辞をせい、よいか」

「なんでも、申しますだが、生命いのちだけは」

「誰が生命をとるといったか。麓には、討手がいるだろうな」

「へい」

「七宝寺にも、張りこんでいるか」

「おりますだ」

「村の奴ら、きょうも、俺を捕まえようとして、山狩に出ている

か」

「……………」

「汝^{おの}れも、その一人だな」

男は、跳びあがって、唾^{おし}のように首を振った。

「うんにや、うんにや」

「待て待て」

その首の根をつまんで、

「姉上は、どうしているか」

「どツちやの？」

「俺の姉上——新免家のお吟^{ぎん}姉だ、村の奴ら、姫路の役人に狩りたてられて、俺を追うのはぜひもないが、よもや姉上のお身を、

責めはしまいな」

「知らん、おら、何も知らんで」

「こいつ」

木剣を、振りかぶって、

「怪しい物のいい振りをする。何かあつたな、ぬかさぬと、頭の鉢を、これが打ち砕くぞ」

「あつ、待ってくれ。いうがな、いうがな」

炭焼きは、掌てをあわせた。そして、お吟が捕まつて行つたこと、また、村へは布令ふれがまわつて、武蔵に食物を与えた者や、武蔵に寝小屋を貸した者は、すべて同罪であるという達しと共に、一戸から一人ずつ隔日に若い者が徴発されて、毎日、姫路の武士を先

頭にして、山狩をしていることなど告げた。

武蔵の皮膚は、憤怒のため鳥肌になった。

「ほんとか！」

念を押して――

「姉上に何の罪があつて！」

と、血になった眼をうるませた。

「わしら、何も知らん、わしらはただ、御領主が怖ろしいで」

「何処だ、姉上の捕まつて行つた先は。――その牢屋は」

「日名倉ひなぐらの木戸だと、村の衆はうわさしていただが」

「日名倉――」

国境の山の線を、呪のろいにみちた眸ひとみがじつと振り仰いだ、もうそ

の辺りの中国山脈の脊^{せきちゆう}柱^{ちゆう}は灰色の夕雲に、斑^{まだら}になつて黒ずんでいた。

「よしつ、貫いにゆくぞ、姉上を……姉上を……」
 つぶや
 呟^{つぶや}きながら、武蔵は木剣を杖について、水音のする沢^{さわ}辺^べの方へ、
 一人でガサガサと降りて行つた。

三

勤^{ごんぎ}行^{よう}の鐘が、今しがた終つた。旅へ出て留守だつた七宝寺の住持も、きのうか今日、帰つて来ているらしい。

外は、鼻をつままれても分らない闇だつたが、伽藍^{がらん}のうちには、

あかい燈明や庫裡くりの炉の灯や、方丈ほうじょうの短檠たんけいがゆらぐのが覗のぞかれて、およそそこに起たち居いする人影も淡く見てとれる。

「お通さん、出てくればいいが……」

武蔵は、本堂と方丈との通路になつている橋廊架はしろうかの下に、じつとうずくまっていた。夕餉ゆうげの物を煮るにおいが生あたたかく漂つてくる、彼は、けむりの出る汗や飯を想像した、この数日、生なまの小禽こどりだの、草の芽などよりほか、何も入っていない胃ぶくろは、胸さきで暴れて、痛みだした。

「がつ……」

口から胃液を吐いて、武蔵は苦しんだ。

その声がひびいたとみえ、

「なんじや」

方丈で、誰かがいう。

「猫でしよう」

お通が、答えた。そして、夕餉ゆうげの膳を下げて、武蔵のうつ伏している上の橋廊架をわたってゆくのである。

——あつ、お通さん。

武蔵は呼ばわろうとしたが、苦しくて声が出なかった。だが、それはかえって僥倖ぎょうこうでもあつた。

すぐ彼女の後から、

「風呂場は、どこじやな」

と尾ついて来た者がある。

寺の借着に、細帯をしめ、手拭てぬぐいをさげている。ふとあおぐと、武蔵には覚えのある姫路城の武士なのだ。部下や村の者に山狩をさせたり、夜昼のけじめなく搜索に奔命ほんめいさせたりしておいて、自分は、陽が暮ればこの寺を宿として、馳走酒ちそうざけにあずかっているという身分らしい。

「お風呂でございますか」

お通は、持ち物を下において、

「ご案内いたしましょう」

縁づたいに、裏へ導いてゆくと、鼻下にうす髯ひげのあるその武士は、お通のうしろからいきなり抱きすくめて、

「どうじゃ、いっしょに入浴はいらないか」

「あれっ……」

その顔を、両手で抑えつけて、

「えいじゃないか」

頬へ、唇をすりつけた。

「……いけません！ いけません！」

お通は、かよわかった。口をふさがれたのか、悲鳴も出ないのである。

——武蔵は、身の境遇の何かをも忘れて、

「何をするっ！」

縁の上へ、跳び上がった。

うしろから突いた拳こぶしが武士の後頭部に鳴った。手もなくお通を

抱えたまま、相手は下に転げ落ちている。

お通が、高い悲鳴をあげたのも、その途端であつた。

仰天した武士は、

「やつ、おのれは、武蔵じゃな。——武蔵だつ、武蔵が出てきた。各、出で合えつ」

と、喚わめいた。

忽ち、寺内は足音や呼びあう声の暴風となつた。武蔵のすがたを見たらばと、かねて合図してあつたか、鐘しょうろう楼からはごんごんと鐘が鳴つた。

「素破すわ」

と、山狩の者は、七宝寺を中心に、駈け集まつた。時を移さず

裏山つづき讚甘さぬもの山一帯をさがし始めたが、その頃、武蔵はどこをどう走って来たか、本位田家のだだっ広い土間口に立つて、

「おばば、おばば」

と、母屋おもやの明りをのぞいて、訪れていた。

四

「たれじや」

紙燭ししよくを持って、何気なく、お杉は奥から出てきた。

下顎したあごから、逆さに紙燭の明滅をうけている窪くぼの多い顔が、土つち気ちけいろにさっと変った。

「あつ、おぬしは！ ……」

「お婆ば、一言、告げに来た。 ……又八は戦で死んだのじゃない、生きている、或る女と、他国で暮している。 ……それだけだ、お通さんにも、お婆ばから伝えておいてくれや」

素晴らしい終ると、

「ああ、これで気がすんだ」

武蔵は、すぐ木剣を杖について、暗い戸外へもどりかけた。

「武蔵」

お杉は呼びとめた。

「汝^われ、これから、何処へゆく気じゃ？」

「おれか」

沈痛に――

「おれは、これから、日名倉の木戸をぶち破つて、姉上を奪りかえすのだ。そのまま、他国へ走るから、おばばとも、もう会えん……ただ、ここの息子を、戦で死なして、おれ一人、帰つて来たのではないということ、この家の者と、お通さんに告げたかつたのだ。もう、村には、未練はない」

「そうか……」

紙燭を持ちかえて、お杉は、手招ぎした。

「おぬしは、腹がすいてはおらぬのか」

「飯など、幾日も、食べたことはない」

「不愍な……。ちようど、温かいものが煮えている。何ぞ、餓

せんべ

別もしてやりたい。ばばが支度するあいだ、湯でも浴あみていやい」

「……………」

「のう、武蔵、おぬしの家と、わしが家とは、赤松以来の共に旧家じゃ、わかれが惜しい、そうして行かつしやれ」

「……………」

武蔵は、肱ひじを曲げて、眼を拭ぬぐった。ふいに温かい人情にふれたので、猜疑さいぎと警戒心だけに張りつめていたものが、急に人間の肌を思いだしたのであった。

「さ……早う裏へ廻れ、人が来たらどうもならぬ。……手拭は持つていやるか、風呂を浴あみている間に、そうじゃ、又八の肌着や

小袖もある、それを出しておいて上げよう、飯の支度もしておこう。……ゆるりと、湯に浸^{つか}っていたがよい」

紙燭をわたして、お杉は奥へかくれた、するとすぐ分家の嫁が、庭から、どこへやら走って行ったようであった。

戸の鳴った風呂小屋の中には、湯の音がして、明りの影がゆるいでいる、お杉は母屋から、

「湯のかげんは、どうじやな」
と声をかけた。

武蔵の声が、風呂場から、

「いい湯だよ。……ああ生き甦^{かえ}ったような気がする」

「ゆるりと、温^{ぬく}まっていたがよいぞ、まだ、飯が炊^たけておらんよ

うじや」

「ありがとう。こんなことなら、早く来ればよかつたのだ。俺はまた、おばばが、きつと俺を怨んでいるだろうと思つてな……」

よろこ
あふ
欣びに溢れた声が、それから湯の音に交じつて二言三言していたが、お杉の返辞はしなかつた。

やがて、息をせいで、分家の嫁が門の外までもどつて来た。――後ろに、二十人ほどの武士さむらいや山狩の者を連れてゐる。

外に出ていたお杉は、低声こごえで、その人々へ何か囁いた。

「なに、風呂小屋へ入れておいたと？ そいつは出来でかした。……よしつ、今夜は捕えたぞ」

武士たちは人数をふた手に分けて、大地を墓ひきの群れのように這

つてゆく。

風呂口の火が、闇の中に真つ赤に見えていた。

五

何か——何とはなくである——武蔵の六感はおののいた。

ふと、戸の隙間から外をのぞいた途端にである。彼は、総身の毛穴をよだてて、

「あつ、騙だまされたつ」

と、叫んだ。

裸はだか体だ、風呂場の狭い中だ、どうする分別も、いとまもない。

気がついたのがすでに遅いのだ、棒、槍、十手、そんな武器を持った人影が、板戸のそこには、充満している、実際は十四、五名に過ぎなかったろうが、彼の眼には、何倍にも映った。

逃げる策がない。身にまとう一枚の肌着すらここにはないのだ。だが武蔵は、怖い感じを持たなかった、お杉に対するいきどお憤りがむしろ彼の野性を駆って、

「うぬっ、どうするか見ておれっ」

守勢を考えない。こんな場合にも、彼は、敵と思う者へ、こつちから出てゆくところにしかなれないのだ。

捕手たちが、互いに、踏みこむのを譲り合っている間に、武蔵は内から戸を蹴とばして、

「なんだッ！」

喚わめいて、躍り出した。

素裸なのだ、濡れ髪は解けて、ざんばらになっている。

武蔵は齒を咬かみ鳴らし、胸いたへ走つて来た敵の槍の柄えへしがみついた、相手を振りとばし、それを自分の物として握り直すと、「こいつらっ」

無茶である、縦横に槍を振りまわして、撲なぐるのだ。しかし大勢に対しては、これは効果がある、穂先を使わずに柄を使う槍術は、そもそも関ヶ原の実戦で彼は教えられたものである。

ぬかった！ なぜ先に死に物狂いで、三、四人風呂場の中へこつちから飛び込まなかつたかと、後手ごてを悔いるように、捕手の武

士たちは、叱咤しつたを交わしあつた。

十度とたびほど、大地を撲なぐると、槍は折れてしまった。武蔵は、納屋ひさしの廂ひさしの下にあつた漬物樽たるの押し石をさしあげて、取りかこむ群れほうへ抛りつけた。

「それつ、母屋へ、跳びこんで行つたぞつ」

外から、人々がこう喚わめくと、一室からは、お杉だの分家の嫁だのが、跣はだしのまま裏庭へころげ降りた。

家の中を、雷かみなり鳴があるいているように、何か、凄まじい物音をさせながら、武蔵は、歩いていた。

「俺の着物は、どこへやった、俺の着物を出せつ」

そこらには野良着が脱ぎすててあるし、手をかければ衣裳いしやうだん箆

筒すもあるが、眼もくれない。

血眼で、自分のつづれた着物を、やっと厨くりやの隅に見つけ出すと、それを抱えたまま、土泥どべっつい竈の肩に足をかけて、引窓から屋根へ這い出した。

堤を切った濁流へ自失の声を揚げるように下では騒いでいる。

武蔵は、大屋根のまん中へ出て、悠々と、着物を着ていた、そして歯で帯の端を咬かみ裂き、濡れ髪をうしろに束ねて、根元を自分でかたく結んだ。眉も、眼じりも、引ツ吊れるほどに。

大空は一面、春の星であつた。

孫子そんし

「おおーいっ」

此方こなたの山で呼ぶと、向うの山でも、

「オウーイ」

と、遠く答えてくる。

毎日の山狩だ。

飼蚕かいこの掃きたても、畑打ちも手につかないのである。

当村、新免無二しんめんむに斎さいの遺子武蔵たけぞう事、予而かねて、追捕ついでお沙汰中

の所、在所の山道に出没し、殺戮さつりく悪業いたらざるなきを以

て、見当り次第成敗仕る可者也、依而、武蔵調伏に功ある者には、左之通り、御賞おんしょうを下被くださる。

一 捕えたるもの 銀 十貫

一 首打つたるもの 田 十枚

一 匿かくれ場所告げたるもの 田 二枚

以上

慶長六年 池田勝しょうにゆうさい入齋てるまさ輝政 家中かちゆう

こういう物々しい高札が、庄屋の門前や、村の辻に、いかめしく立った、本位田家のまわりは、武蔵たけぞうが復讐ふくせうに来るだろうといふ噂で、お杉ばばも家族も、戦々せんせんきようきよう兢々として門を閉じ、

出入り口にも鹿垣を作った。姫路の池田家から応援に来た人勢は、そこにも夥しくいて、万一武蔵が出てきた場合は、法螺貝や寺の鐘や、あらゆる音響で互いに連絡をとり、袋づつみにしてしまおうと作戦は怠りない。

だが、何の効もなかった。

——今朝もだ。

「わあ、また、ぶち殺されている」

「誰じゃ、こんどは」

「お武士じゃがな」

村端れの道ばたの草むらへ、首を突っこんで、二本の足を変な恰好に上げて死んでいる死骸を発見して、恐怖と好奇心にかられ

た顔が、取り巻いて騒いでいた。

死骸は、頭蓋骨をくだかれていた、それも附近に立っていた高札で撲ったものとみえ、朱あけになった高札が、死骸とぶつ交ちがえに、死人の背に負わせて捨ててある。

褒美の文句が、高札の表に出ているので、それを読む気もなく読むと、残酷な感じは消されて、まわりの者は、何だかおかしくなつて来た。

「笑うやつがあるか」

と、誰かいった。

七宝寺のお通つうは、村の人々の間から、白い顔を引っこめた、唇まで白っぽく変っていた。

(見なければよかつた——)

悔いながら、まだ眼にちらつく死人の顔を忘れようとして、小走りに寺の下まで駈けてきた。

慌^{あわ}ただしく、上から降りて来たのは、寺を陣屋みたいにして、

先頃から泊りこんでいる大将だった。五、六名の部下と一緒に、報^しらせをうけて駈けつける所らしかつた、お通の姿を見かけると、

「お通か。何処へ参つたな」

などと、暢^{のんき}気なことをたずねた。

お通は、この大将の泥^{どじよう}鰯^{いしやう}ひげが、いつぞやの晩のいやらしい

ことがあつて以来、見るのも虫^{むし}酸^すが走つてならなかつた。

「買^かい物^{もの}に」

それも投げ捨てるようにいって、見向きもせず、本堂前の高い石段を駆け上がった。行つた。

二

沢庵たくあんは、本堂の前で、犬と遊んでいた。

お通が、犬を避よけて走つて行くのを見て、

「お通さん、飛脚が届いているよ」

「え……わたしに」

「留守だったから、預かつて置いた」

袂たもとからそれを出して、彼女の手へ渡しながら、

「顔いろが悪いが、どうかしたのか」

「道ばたで、死人を見ましたら、急にいやな気持になつて——」

「そんなもの見なければいいに。……だが、眼をふさぎ道をよけても、今の世の中では、到るところに、死人が転がっているのだから困るな。この村だけは、浄土じょうどだと思つていたが」

「武蔵さんは、なぜあんなに、人を殺すんでしよう」

「先を殺さなければ、自分が殺される。——殺される理わけもないのに、無駄に死ぬこともない」

「怖い！……」

戦慄して、肩をすぼめ、

「ここへ来たら、どうしましょう」

山にはまた、うす黒い綿わたぐも雲が降りていた。お通は無自覚に手紙を持って、庫裡くりの横にある機舎はたやへかくれた。

織りかけてある男物の布地ぬのじが、機はたにかけられてあつた。

朝に夕に思慕の糸を紡つむぎ溜めて、やがて許いいなずけ婚の又八が帰国したら——あの人に着てもらおう——そう楽しんで去年から少しずつ織っていたものだった。

箴おさの前へ、腰かけて、

「……誰からだろう？」

飛脚の文を見直した。

孤児みなしごの自分には、便りをくれる人もなし、便りを出す人もな

い。何か人まちがいのような気もされて、彼女は、何度も宛名書

きを見直すのだった。

長い駅伝を通つてきたらしく、飛脚文ひきやくぶみは手ずれや雨じみでボロボロになつていた。封を解いてみると、二本の手紙が中からこぼれた、まず一通を先に開けて見る。

それはまったく見覚えのない女文字で、やや年とし長けた人の筆らしく――

べつの文、ご覧なされ候わば、多言には及ぶまじと思われ候
えど、証あかしのため、私わたしよりも認めしたたまいらせ候。

又八どの、此度このたび、御縁ごえんの候て、当方の養子にもらいうけ候
に就いては、おん前様まえさまのこと、懸念けんねんのようにみえ候まま、
左さ候ては、ゆく末、双方ふためゆえの不為故、事理ことわけおあかし申

し候て、おもらい申候。何とぞ、以後は又八どのの事、御わすれくだされたく先は斯まづよかうに迄、一筆しめし参もうしらせ申まそろ。かしこ。

お甲

お通さま

もう一つの書状は、正まさしく本位田又八の手蹟なのである。それにはくどくどと帰国できない事情が書き連ねてある。

つまるところ自分のことはあきらめて、他ほかへ嫁とついでくれというのだった。実家の母へは、自分からは手紙にも書きにくいから、他国で生きているということだけを、会った時に、告げておいてくれなどとも認したためてある。

「……………」

お通は、頭のしんが、氷のようになるのを覚えた。涙も出ない。
顫おのきながら紙の端を支えている指の爪が、先刻さつき、使いの途中で見た死人の爪と、同じような色に見えた。

三

部下のすべては、野に臥ふし山に寝、日夜奔命ほんめいに疲れていたが、どじょう髯ひげの大將は、本陣の寺をむしろ安息所ともして、悠々と泊りこんでいるため、寺では夕方になると風呂をわかすとか、川魚を煮たくとか、佳よい酒を民家からさがして来るとか、毎晩のもて

なしもなかなか気づかないであつた。

その忙せわしない夕暮になつても、お通のすがたが厨くりやに見えないので、きようは、方丈の客へ膳を出すのが晩おそくなつた。

沢庵たくあんは、迷子を捜すように、お通の名を呼びながら、境内を歩いていたが、機舎はたやの中には、箴おきの音もしないし、戸も閉まつているので、何度もその前を通りながら、開けてみなかつた。

住職は、時々、橋廊架はしろうかへ出て来て――

「お通は、どうしたつ？」

とわめいている。

「おらんはずはないわ。酌しやくにん人が見えいでは、酒には及ばぬと、お客様はおっしやるではないか。はよう捜して来こうつ」

寺男はどうとう麓のほうまで、提燈ちようちんをもって降りて行った。

沢庵は、ふと、機舎はたやの戸を開けてみた。

お通はいた。機はたの上へ、俯うつつ伏していたのである。暗いなりに、ただ独り寂じやくまく寞いたを抱きしめて。

「? ……」

沢庵は、見まじきものを見たように、しばらく黙っていた。彼女の足もとには、怖ろしい力で捻ねじ縊よった二通の手紙が、呪咀のろいの人形のように踏みつけてあった。

そつと沢庵は、拾い取って、

「お通さん、これは昼間来た飛脚文じゃないか、しまっておいたらどうだ」

「……………」

お通は、手にも触れない。かすかに顔を振るだけであつた。

「みんなが、捜しているのだ。さ……気がすすまないだろうが、方丈へお酌しやくに行つておやり、住持が弱っているらしい」

「……頭が痛いんです。……沢庵さん……今夜だけは行かなくて
もよいでしょう」

「わしは、いつだって、酒の酌などに、其女そなたが出るのをよいこと
だとは思っていない。しかし、ここの住持は世間人だ、見識をも
つて、領主に対し、寺の尊厳を維持してゆく力などはない人だか
らな。——ご馳走もせねばならんじやろうし、どじよう髯ひげの機嫌
もとらずばなるまいて」

と、お通の背を撫でて、

「其女も、幼少から、此寺ここの和尚には、育てられて来た人。こういう時には、住持の手伝いになってやれ。……よいか。ちよつと、顔を出せばよいのだ」

「え……」

「さ、行こう」

抱き起すと、涙の蒸れたむにおいの中から、お通は、ようやく顔を上げて、

「沢庵さん……じゃあ参りますから、すみませんが、あなたも一緒に方丈かまにいてくれませんか」

「それやあ関かまわないが、あのどじょう髯ひげの武士さむらいは、わしが嫌い

らしいし、わしも、あの髯を見ると、何か、からか揶揄いたくなくなっ
ていかんのじゃ。大人おとなげ気ないが、そういう人間がままあるもんでな」

「でも、私、一人では」

「住持がいるからよいではないか」

「和尚おす様は、私がゆくと、いつも席をはず外しておしまいなさるので
す」

「それは不安だ。……よしよし、一緒に行つてやろう。案じない
ではやく、お化粧つくりをしておいで」

四

方丈の客は、やがてお通も見えたもので、曲がりかけていたお冠かんむりもやや直り、悦えつに入つて、酒杯さかずきもかさね、あから顔のどじょう髯ひげに対立して、眼じりもおもむろに下がつて来た。

しかしまだほんのご機嫌になりきれないものがある。それは燭台の向う側によけいな人間が一人いて、ぺたんと盲人のように猫背に坐り、膝を机に書物を読んでいるからである。

沢庵なのだ。どじょう髯の大将は、この寺の納所なっしょと思つてい
るらしく、遂に、

「オイ、こちら」

と、顎あごを指していった。しかし沢庵は顔を上げようともしないので、お通がそつと注意すると、

「え。わしを？」

見まわすのを——どじよう髯は、大ふうに、

「コラ納所。その方には用事もない。退さがっておれ」

「イエ、結構でございます」

「酒のそばで、書物など読んでいられては、酒が不味まずくていかん。

立てっ」

「書物はもう伏せました」

「眼ざわりじゃ！」

「では、お通さん、書物を部屋の外へ出しておくれ」

「書物がではない、その方という者が、酒の座に、不景色でいかに
んというのだ」

「困りましたな。悟空尊者ごくうそんじやのように、煙になったり、虫に化けて、膳のすみに止まっているわけにもゆかず……」

「退がらんかつ！ ぶ、ぶ礼な奴だ」

遂に、怒り出すと、

「はい」

と、一応かしこ畏まって、沢庵はお通の手を取った。

「お客様は、独りが好きだと仰せられる。孤独を愛す、それ君子の心境だ。……さ、お邪魔しては悪い、あちらへ退さがろう」

「こッ、こらっ」

「何ですか」

「だれが、お通まで、連れて退さがれと申したか。自体、その方は

平常から傲慢ごうまんで憎い奴だ」

「坊主と武士さむらい、可愛らしい奴というようなのは、まあ尠すくのうございますなあ。——例えば、あなたの髯ひげの如きも」

「直れっ！ それへ」

床の間に立てかけてある陣刀へ手をのばした。そしてどじょう髯ひげが、ピンと刎はね上がったのを、沢庵は、まじまじと見つめて、

「直れとは、どういう形になるのですか」

「いよいよ、怪けしからぬ納所め。成敗せいばいいたしてくれ」

「では、拙僧の首をですか。……あはははは、およしなさい、つまらない」

「何じやと」

「坊主の首を斬るほど張合いのないものはない、胴を離れた首が、ニコと笑っていたりしていたら、斬り損でしょう」

「才、胴を離れた首で、そう吐かしてみいッ」

「しかし——」

沢庵の饒舌は、彼を怒らすばかりだった。太刀の柄にかか

つている拳は、憤りにガタガタふるえていた。お通は身をもつて

沢庵を庇いながら、沢庵の弄舌を泣き声出してたしなめた。

「何をいうのです沢庵さん、お武士様へ向つて、そんな口をき

く人がありますか。謝りなさい、後生ですから、謝っておしまいなさい。斬られたら、どうしますか」

だが、沢庵はまだいった。

「お通さんこそ退いておいで。——なアに大丈夫。多くの人数を抱えながら、二十日も費やして、いまだに独りの武蔵を成敗できない能なしに、何で沢庵の首が斬れよう。斬れたらおかしい。余程おかしい」

五

「ウヌ、うごくくなっ」

どじよう髯は、満顔に朱をそそいで、太刀の鯉口を切った。

「お通、退いとれ、口から先に生れたこの納所めを、真二ツにしてくれねばならん」

お通は、沢庵を後ろに庇かばい、彼の足もとへ身を伏して、

「お腹立ちでもございましょうが、どうぞ堪忍してあげて下さい。この人は、誰むかに対してもこんな口をきくのです。決してあなた様ばかりへ、こういう戯ざれ口ぐちをいうのではございません」

すると沢庵が、

「これ、お通さん何をいう。わしは戯れ口をいつているのではない。真実をいつているのだ。能なしだから能なし武士ざむらいといった。

それが悪いか」

「まだ申すな」

「いくらでも申す。先ごろから騒いでいる武蔵の山狩など、お武むらい士しには、幾日かかろうと関かまうまいが、農家はよい迷惑、畑仕事

をすてて、毎日、賃銀なしのただ仕事に狩り出されては、小作など、顎あごが乾ひあがる」

「ヤイ納所、おのれ坊主の分際をもつて、御政道を誹ひ謗ぼうしたな」
 「御政道ではない——領主と民の間に介在して、禄盗みも同様な奉公ぶりをしている役人根性へわしはいうのだ。——例えばじや、おぬしは今宵、何の安んずるところがあつて、この方丈に便々と長袖を着、湯あがりの一杯などと、美女に寢酒の酌をさせているか。どこに、誰に、その特権をゆるされてござるのか」

「……………」

「領主に仕えて忠、民に接して仁、それが吏りの本分ではないか。しかるに、農事の邪さまたげを無視し、部下の辛苦も思いやらず、われ

のみ、公務の出先、閑かんをぬすみ、酒肉を漁あさり、君威をかさに着て民力を枯らすなどは悪吏の典型的なるものじゃ」

「……………」

「わしの首を斬つて、おまえの主人、姫路の城主池田輝政殿の前へ持つて行ってごらんじやい、輝政大人うしは、オヤ沢庵、今日は首だけでお越しかと驚くじやろう。輝政殿とわしとは、妙心寺の茶会からの懇意、大坂表おもてでも、大徳寺でも、度々お目にかかつてゐるんだよ」

——どじょう髯ひげは、毒つ気を抜かれた形である、酔いもいささか醒さめ気味になつて来たし、沢庵のことばの果たして真まことか嘘かについて、正しい判断が下し得ないでゐる姿だった。

「まず、坐るがいい」

と沢庵は、救いを与えて、

「うそと思うなら、これから、蕎麦粉そばこでも土産に持って、姫路城の輝政殿を、ぶらりと、訪ねて行つてもよろしい。——だがわしは、大名の門をたたくのが、何より嫌い。……それに、宮本村でこうこうとお前の噂でも茶ばなしに出たら、早速、切腹ものじやないかな、だから、最初から、およしというたのに、武士さむらいは、あとさき後先の考えがないからいかん。武士の短所は、実にそこにある」

「……………」

「刀を、床の間へお返し。それから、もう一つ文句がある。孫子そんしを読んだことがあるかい？ 兵法の書だ、武士たる者、孫子そんし呉子ごし

を知らん筈はあるまい。——それについてな、宮本村の武蔵を、
どうしたら、兵を損ぜずに、縛からめ捕とれるか、その講義をこれから
わしがしようというのじゃ。これや、貴公の天職に関するな、慎
んで聞かざばなるまいて。……まあ、お坐り、お通さん、一杯酌つ
ぎ直してやんなさい」

六

年からいえば、十も違うのだ、三十だいの沢庵と、四十を出て
いるどじよう髯とは。——しかし、人間の差は、年にはよらない
ものである。質でありまた質の研みがきによる。平常へいぜいの修養鍛錬が

ものをいうことになる、王者と貧者とでも、この違いはどうにもならない。

「いや、もう酒は……」

最初のえらい権幕けんまくは何処へやら、どじよう髯は、猫のように、態度をあらためて、

「——左様でござったか、それがしの主人勝入斎輝政様と、ご入つこん懇であろうとは、いや、存じも寄らず、失礼の단은幾重にもひとつ御用捨のほどを」

おかしいくらい恐縮する。

だが沢庵は、敢えて、高いところへ納まり返りはしなかった。「まあまあ、そんなことは、どうでもよろしいでしょう。要は、

武蔵をいかにして召捕るか。つまるところ、尊公の使命も、武士たる面目も、そこにかかつておるのじやないか」

「左様で……」

「其そこもと許は、武蔵の捕われが、遅れれば遅れるほど、安閑と、寺に泊つて、据膳すえぜんさげ膳で、お通さんを追い廻していられるからかま関うまいが……」

「いや、その儀はもう……何分とも、主人輝政へも」

「内分にでござろう、心得ておるよ。——しかし、山狩山狩と、掛け声ばかりで、こう延び延びになつては、農家の困窮もとは固より、人心きようきよう恟々、良民は安んじて業いそに励いそむことはでけん」

「されば、それがしも、心の裡うちでは、日夜焦慮いたしていないこ

ともないので」

「——策がないだけじゃろ。つまり豎子^{じゅし}、兵法を知らんのじゃ」

「面目ない次第で」

「まったく、面目ないことだ。無能、徒食の奸吏^{かんり}と、わしにいわれてもしかたがない。……だが、そう凹^{へこ}ましただけでは気の毒だから武蔵はわしが三日の間に捕まえてやるよ」

「えっ？ ……」

「うそと思うのか」

「しかし……」

「しかし、なんだい」

「姫路から数十名の加勢まで迎え、百姓足輕を加えれば、総勢二

百人からの者が、毎日ああやって山入りをしておるので」

「ご苦労様な」

「また、ちようど今は、春なので山には幾らも食物があるため、武蔵めには都合がよく、吾々には、まずい時期でもある」

「じゃあ、雪の降るまで、待つてはどうだ」

「左様なわけにも」

「——参るまいナ。だからわしが縛からめ捕とつてやろうというのだ。人数は要いらん、一人でもよいが、そうさな、お通さんを加勢に頼もうか、二人で十分にことは足りる」

「また、お戯たわむれを」

「馬鹿いわツしやい。宗しゅうほう 彭 沢庵、いつでも冗談で日を暮らし

ていると思うか」

「はっ」

「豎子兵法を知らずといったのはそこだ。わしは坊主だが、孫呉の神髓しんずいが何だかぐらいは、嚙かじつておる。ただし、わしが引き受けるには条件がある、それを承知せねば、わしは、雪の降るまで、見物側に廻っている考えだが」

「条件とは」

「武蔵を縛からめ捕った上の処分は、この沢庵にまかすことだ」

「さあ、その儀は？」

と、どじょう髯ひげは、そのどじょう髯をつまんで考えこんだが、この得態えたいの知れない青坊主、或は、大言壮語だけで自分を煙に巻

いている肚はらかも知れない。逆に出たらあわてて尻尾を出す奴だろ
う。そう考えたので彼は断乎として答えた。

「よろしい。貴僧が捕まえたなら武蔵の処置は、貴僧に一任すると
いたそう。——その代り万一、三日のあいだに、縄にしてお出し
なさらぬ時は？」

「庭の木で、こうする」

沢庵は、首を縊くる手真似をして、舌を出して見せた。

七

「気でも狂ちこうたのか、あの沢庵坊主、今朝聞けば、飛んでもない

ことを引き受けたちゆうぞ

寺男は、心配のあまり、庫裡くりへ来てわめいていた。

聞く人々も、

「ほんまけ？」

眼をまろくして――

「どうする気じやろ」

住持も、やがて知って、

「口は禍わざわいの門かどとはこのことよ」

などと、賢かしこそうに、嘆息した。

けれど誰より真実に心配し出したのはお通であつた。信頼しき

つていた許いいなすけ婚けの又八から、ふいに受けた一片の去り状は、又

八が戦場で死んだと聞くより大きな心の傷手いたでであつた。あの本位田家の婆ばばさま様にせよ、やがて、良人おつととする人の母と思えばこそ、忍んで仕えている人である。誰を頼みに、このさき生きてゆこう。

沢庵は、その悲嘆の闇にある彼女にとつて、ただ一つの光明あかりであつた。

機舎はたやで、独りで泣いていたあの時は、去年から又八のためにと丹精して織りかけていた布を、ズタズタに切り裂いて、その刃やいばで死んでしまおうかとまで、思いつめていたのである。それを考え直して方丈へ酌をしに行つたのも、沢庵なだに宥められ、沢庵に引かれた手に人間の温か味が思い出されたからであつた。

——その沢庵さんが。

お通は自分の身よりも、今は沢庵を、つまらない約束のために失つてしまうことが悲しくもあり破滅な心地がした。

彼女の常識をもつて考えても、この二十日余りあんなに山狩しているのに捕まらない武蔵が、沢庵と自分との二人きりで、三日のあいだに縄目にかけてしまえるなどは、どうしても考えられなかつた。

こつちの条件と、先のいい分とは、弓矢八幡も照覧しょうらんと、かたく誓い合つて、どじよう髯ひげとわかれて沢庵が本堂へ戻つて来ると、彼女は沢庵へ向つて、その無謀を責めて熄やまなかつた。しかし沢庵はやさしくお通の肩をたたいて——何も心配することはない、村の迷惑を払い、因幡いなば、但馬たじま、播磨はりま、備前の四州にわたる街

道の不安をのぞき、その上、幾多の人命を救うことになれば、自分の一命のごときは鴻毛こうもうよりも軽い、まあ明日あしたの夕方までは、お通さんも悠ゆつくり体をやすめて、黙もくつてそれから先はわしに尾ついておいで——という。

気が気ではない——

もう夕方は迫っているのだ。

沢庵はと見れば、本堂の隅で、猫といつしよに昼寝をしている。住持をはじめ、寺男も、納所の者も、彼女の空虚うつろな顔を見ると、

「およしよ、お通さん」

「かくれておしまい」

沢庵との同行を極力避けるようにすすめたが、さりとてお通は、

そんな気にもなれなかつた。

もう、西陽にしびが、沈みかける。

中国山脈の皺しわの底のような英田川あいだと宮本村は、夕方の濃い陽かげになりかけた。

猫が、本堂から飛び降りた。——沢庵が眼をさましたのである。廻廊へ出て、大きな伸びをしている。

「お通さん、そろそろ出かけるが支度をしてくれんか」

「草鞋わらじと、杖と、脚絆きゃはんと、それから葉だの桐油紙とうゆがみだの、山支度はすつかりしておきました」

「ほかに、持って行きたい物があるんじや」

「槍ですか。刀ですか」

「なんの。……ご馳走だよ」

「お弁当？」

「鍋、米、塩、味噌。……酒もすこしありたいな、何でもよい、
 厨くりやにある食けい物を一ひと括からげにして持つて来ておくれ。杖つえに差して、
 二人で担かついで行こう」

縛しばり笛ふえ

一

近い山は漆うるしより黒い、遠い山は雲母きららより淡あわかった。晩春なので、

風はぬるくて。――

熊笹や、藤づるや、道の辺りは、霧の巢だった。人里から遠ざかるほど、山は、宵に一雨かぶったように濡れていた。

「暢気のんきだのう、お通つうさん」

竹杖に差した荷物の先を担かついで歩きながら、沢庵たくあんがいう。

お通は、後を担になつて、

「ちつとも、暢気なものですか。一体、どこまで行くおつもり？」

「そうさな……」

と、沢庵の返辞は心ぼそい。

「ま、も少し歩こう」

「歩くのはかまわないけど」

「くたびれたか」

「いいえ」

肩が痛むとみえ、お通は、時々、右の肩から左の肩へ、杖をかえて、

「誰にも会いませんね」

「きようは、どじょう髯ひげの大将、一日寺にいなかったから、山狩の者を、残らず里へ引き揚げて、約束の三日を、見物している肚だろうよ」

「いったい、沢庵さんは、あんなことをいつちまって、どうして武蔵たけぞうさんを捕まえますか」

「出て来るよ、そのうちに」

「出て来たって、あの人は、平常ふだんでもとても強い男です。それに、山狩の者にかこ囲まれて、もう死にももの狂いでいるでしょう。悪鬼と
いうのは、今の武蔵さんのことだと思ひます。考えても、わたし
は脚がふるえてくる」

「ホラ……その脚もと」

「嫌ツ。——ああ、びっくりしたじやありませんか」

「武蔵が出たんじやないよ、道端に、藤づるを張ったり、茨いばらの垣
を結ったりしてあるから、気をつけてあげたのだ」

「山狩の者が、武蔵さんを追い詰めるつもりで拵こしらえたんですね」

「気をつけないと、わしらが、墜おとし穿あなに落ちてしまうよ」

「そんなこと聞くと、竦すくんで、一足も歩けなくなってしまう」

「落ちれば、わしから先だ。しかしつまらん骨折りをやったものさ。……おおだいぶ溪たにが狭くなつたな」

「讚甘さぬもの裏は、先刻さつき、越えました。もうこの辺は辻ノ原あたり」

「夜どおし歩いてばかりいても為方しかたがあるまいな」

「私に相談しても、知りませんよ」

「ちよつと、荷物をおろそう」

「どうするんです」

沢庵は、崖きわの際まで歩いて行つて、

「お尿しツこ」

といつた。

英田川あいだがわの上流をなしている奔湍ほんたんは、その脚下、百尺の巖いわか

ら巖へぶつかつて、どうしようと、吠えくるツている。

「アア、愉快。……自分が天地か、天地が自分か」

颯々さつさつと、尿いばりの霧を降らしながら、沢庵は星でも数えているよ

うに天を仰いでいる。

お通は、彼方かなたで、心細げに、

「沢庵さん、まだですか。ずいぶん長い」

やっと、戻つて来て、

「ついでに、易えきを占たててきた。さあ、見当がついたからもう占しめ

たものだ」

「易を」

「易といつても、わしのは心易しんえき、いや靈易れいえきといおう。地相、

水相、また、天^{てん}象^{しょう}など考えあわせ、じつと、目をつむったら、

あの山に行けと卦^けが出た」

「高^{たか}照^{かてる}ですか」

「何山というか知らんが、中腹に、樹のない高原が見えるじやろ
うが」

「いたどりの牧^{まき}です」

「いたどり……去^いた者^と捕るとは、さい先がよいぞ」

沢庵は大きく笑った。

ここは東南に向つて、なだらかな傾斜と、広い展望を持つ高^{たか}照峰^{るみね}の中腹で、いたどりの牧と里では称^よぶ。

牧というからには、いずれ牛か馬かが放牧してあるにちがいないが、ぬるい微風が草をなでているだけの寂寞^{せきぼく}とした夜のここには、今、それらしい影は一頭も見あたらぬ。

「さ、ここで陣を布^しくのだ。さしずめ、敵の武蔵は、魏^ぎの曹操^{そうそう}、わしは諸葛^{しよかつこうめい}孔明^{めい}というところかな」

お通は、荷をおろして、

「——ここで何をするんです」

「坐っているのさ」

「坐っていて、武蔵さんが捕まりますか」

「網をかければ、空とぶ鳥さえかかる。造作ぞうさくもないことだ」

「沢庵さんは、狐にでも憑つままれているんじゃないやありませんか」

「火を焚たこう、落ちるかも知れない」

枯れ木を集めて、沢庵は、焚火たきびを作った。お通は、幾分か気づよくなつて、

「火つて、賑やかなものですね」

「心ぼそかったのか」

「それは……誰だつて、こんな山の中で夜を明かすのは、いいものじゃないでしょう。……それに、雨が降つて来たらどうする気です？」

「登つてくる途中、この下の道に横穴を見ておいた。降つたらあ

そこへ逃げ込もう」

「武蔵さんも、晩や、雨の日は、そんな所に隠れているんですよ。……一体、村の人は、何だつて、あんなにまで武蔵さんを目のかたきにするのかしら」

「ただ権力がそうさせるのだな、純朴じゆんぼくな民ほど官権を怖こわがるから、官権を怖おそるる余り、自分たちの土……兄弟を、郷土から追い出そうとする」

「つまり、自分達だけの身を庇かばうんでしよう」

「無力の民には、そこは恕じよすべきところもあるが」

「気が知れないのは、姫路のお武士さむらいたちです、たった一人の武蔵さんを、あんなにまで、大騒ぎしなくつても」

「いや、それも治安のためにはやむを得まい。そもそも武蔵が関ヶ原から絶えず敵に追われているような気持に駆られていたので、村へ帰るのに、国境の木戸を破って入って来たのがよろしくないことだ。山の木戸を守っていた藩士を打ち殺し、そのため次から次へと、人間を殺めなければ、自分の生命が保てなくなつたのは、誰が招いた禍いでもない、武蔵自身の世間知らずから起つたことだ」

「あなたも、武蔵さんを憎みますか」

「憎むとも。わしが領主であつても、断乎だんことして、彼を嚴科げんかに処し、四民の見せしめに、八ツ裂きにせずにはおかない。彼に、地を潜くぐる術すべがあれば、草の根を搔きわけても、引ツ捕えて磔はりつけ刑けいに

かける。多寡^{たか}の知れた一人の武蔵をなどと、寛大にしておいたら、領下の紀綱^{きこう}がゆるむというものだ。まして、今のような乱世には「沢庵さんは、私にはやさしいけれど、案外、肚^{はら}の中はきついんですね」

「きついとも、わしはその公明正大な厳罰と明賞を行おうとする者だ。その権力をあずかつて、ここへ来ている」

「……オヤ！」

お通は、びくりとしたように焚火^{たきび}のそばから立った。

「何か、今、彼方^{むこう}の樹の中で、ガサツと跫音^{あしおと}がしやしませんか？」

三

「ナニ、登音が？ ……」

と沢庵もつり込まれて耳を澄ましたが、にわかには大声で、

「あははは、猿だ。猿だ。……アレ見い、親子猿が、木の枝を渡つてゆく」

ほっとしたように、お通は、

「……あ。びっくりした」

つぶや 眩いて、坐り直した。

焚火の焰ほのおを見つめて、それからほんとき半刻も一刻も——夜の更ふけゆ

くままに、二人は、黙り合っていた。

消えかけて来た焚火へ、沢庵は、枯れ木を折って加えながら、

「お通さん、何を考えているのかね」

「わたし？ ……」

お通は、焔で腫はれぼつたまぶた瞼を星の空へ外そらして、

「——私は今、この世の中というものが、何という不思議なものだろうと、それを考えていました。じつと、こうしていると、無数の星が、せきぼく寂寞とした深夜の中に——いいえいいい違いました——深夜も万ばんしよう象いを抱いだいたままです——大きくそろそろと動いているのがわかるではありませんか。どうしても、この世界というものは、動いているものです。それを感じます。同時に、私という小ちッぽけな一つのものも、何か、こう……眼に見えないものに支

配されて、こうしている間にも、運命が刻々に、変っているんじゃないか……などと止め途ないことを考えておりました」

「嘘だろう。……そんなことも頭にうかんだかも知れぬが、其女には、もつと必死に考えつめていることがあるはずだ」

「……………」

「悪かったら謝るがの、実はお通さん、そなたの所へきた飛脚文を、わしは読んでおる」

「あれを？」

「機舎はたやの中で、折角、拾ってやったのに、手にも触れんで、泣い

てばかりおるから、自分の袂たもとに入れておいたのじや。……そして

尾籠びろうな話じやが、雪隠せっちんの中で、退屈たいくつのぎに、細々こまごまと読んで

しもうた」

「まあ、ひどい」

「一切いっさいの理由わけが、そこで、分つたよ。……お通さん、あのことは、むしろ其女にとってはしあわ倖せじやないか」

「どうしてです？」

「又八のようなむら気な男じやもの、女房になつてから、あんな去り状を投げつけられたらどうするぞ。まだお互いに、そうならないうちだから、わしは却つて、よろこ欣びたい」

「女には、そのような考え方はできないのです」

「じゃあ、どう考えているのか」

「口惜くやしくツて！ ……」

不意に、しゆくつと、自分の袖口へ噛みついて、

「……屹度きつと、きつと、わたしは又八さんをさがし出して、思うさまのことをいってやらなければ、この胸がおさまりません。そして、お甲とかいう女にも」

沢庵は、そういって、無念そうに泣きじやくるお通の横顔を見つめながら、

「始まったのう……」

と、何のことかつぶやいた。

「——お通さんだけは、世間の悪も人間の表裏も知らずに、娘となり、おかみさんとなり、やがては婆さんとなつて、無憂華むゆうげの潔きよい生涯を結ぶ人かと思つたら、やはり其女にも、そろそろ運命の

あらい風が吹いて来たらしい」

「沢庵さん！ ……。わ、わたし、どうしましょう！ ……口惜

しい……口惜しい」

背に波をうって、お通は、いつまでも、袂たもとの中に顔を埋めていた。

四

昼間は、山の横穴へかくれて、眠りたいだけ二人は眠る。

食物も困りはしなかった。

だが——もつと肝腎かんじんな武蔵を捕まえることのほうは、どうい

う量りょうけん 見か、沢庵は捜しにも歩かないし、気にかけている風もない。

三日目の晩が来た。

またきのうのように、おとといのように、焚火たきびのそばにお通は坐つて、

「沢庵さん、もう今夜きりですよ約束の日は」

「そうだな」

「どうするつもりですか」

「なにを」

「何をつて、あなたは、大変な約束をしてここへ登つて来たのじやありませんか」

「ウム」

「もし今夜のうちに武蔵さんを捕まえなければ」

沢庵は彼女の口を遮さえぎって、

「わかっている。まちがえばこの首を、千年杉の梢こずえで縊くるだけのことだ。……だが心配は無用、わしだって、まだ死にとうない」

「ではすこし、捜しに歩いたらどうですか」

「捜しに出たって、会うものか。——この山中で」

「まったく、あなたは、気が知れない人ですね。私までが、こうしていると、何だか、なるようになれと、度胸がすわってしまします」

「そのことだ、度胸だよ」

「じゃあ沢庵さんは、度胸だけでこんなことをひきうけたんですか」

「まあ、そうだな」

「アア心ぼそい」

何かすこしは自信があるのであろうと、密かに頼りを持っていたお通も、今は、ほんとに心細くなつて来たらしい。

——馬鹿かしら？ この人は。

すこし気が狂ふれている人間は、時には、偉えらい者のように買いかぶられる場合があるから、沢庵さんも、その例かも知れない。

お通は疑ういだした。

しかし、沢庵は、相変らず漠ぼくとした顔つきを焚たき火びにいぶして、

「もう夜半よなかだな」

今気がついたようにつぶや呟く。

「そうですよ、すぐに、夜が白むでしょう」

わざと、お通が、切り口きこうじょう上でいってやると、

「はてな？ ……」

「何を、考えているのです」

「もう、そろそろ、出て来なくちやならんが」

「武蔵さんがですか」

「そうさ」

「たれが、自分から捕まえられに来るものですか」

「いや、そうでないぞ。人間の心なんて、実は弱いものだ。決し

て孤独が本然なものでない。まして周囲のあらゆる人間たちから邪視され、追いまわされ、そして冷たい世間と刃の中に囲まれている者が。……はてな？ ……この温かい火の色を見て訪ねて来ないわけがないが」

「それは、沢庵さんの独り合点というものではありませんか」
「そうでない」

俄然、自信のある声で首を横に振った。お通はそう反対されたほうが欣しかった。

「——思うに、新免武蔵は、もうついそこらまで来ておるのじやろう。しかしまだ、わしが、敵か味方か、わからないのだ。不愍や自らの疑心暗鬼に惑うて、言葉もよう懸け得ずに、物蔭に、

卑屈な眼をかがやかせているものとみえる。……そうだ、お通さん、そなたが、帯に差している物——それを、わしにちよつと貸してくれい」

「この横笛ですか」

「ウム、その笛を」

「いやです、こればかりは、誰にも貸せません」

五

「なぜ？」

いつになく、沢庵は執しつこくいう。

「なぜでも」

お通は、首を振る。

「貸してもよかろう。笛は、吹けば吹くほど、良くこそなるが減りはしまい」

「でも……」

帯に手をあてて、お通は依然、はいといわない。

もつとも、彼女が肌身離さず持っているその笛が、如何に彼女にとって大事な品であるかは、かつてお通自身が、身の上話をした折に聞いてもいるので、沢庵は十分にその気もちを察しはするが、ここで自分へ貸すぐらいな寛度かんどはありそうなものと、

そそろう「粗相には扱わないから、とにかく、ちよつとお見せ」

「嫌^{いや}」

「どうしても」

「え。……どうしても」

「強情だのう」

「え。強情です」

「じゃあ……」

と、ついに、沢庵は折れて、

「お通さんが、自分で吹いてくれてもよい。何か、一曲」

「嫌です」

「それもいやか」

「ええ」

「どういう理^{わけ}で」

「涙がこぼれて吹けませんもの」

「ウム……」

孤^{みなしご}児は、頑^{かたくな}固なものと、沢庵は憐^{あわ}れにもなつたが、その頑

固な心の井戸はつねに冷たい空虚^{うつろ}をいだし、そして何か^{かわ}に渴いて
いる。また、孤児が持たないものを、常に深く強く望んでいるこ
とがふと思われた。

それは、孤児に恵まれていない愛の泉であつた。お通の胸にも、
お通の知らない幻^{げん}覚^{かく}だけの親たちがいて、こうしている間も絶
えず、呼びかけたり呼びかけられたりしているらしいが、彼女は、
その骨^{こつ}肉^{にく}の愛も知らない。

笛も、実はその親の遺物かたみなのである。たツた一つの親の姿が笛だった。——彼女がまだ、世の光もよく見えないでいた嬰兒あかごの頃、七宝寺の縁がわへ、猫の子みたいに捨て児されてあつたとき、帯に、この一管の笛が差してあつたのだという。

してみると、その笛は、彼女に取つては、寔まことに、将ゆくすえ来、自分の血液のつながりを捜し求める唯一の手がかりでもあるし、また、こうしてまだ相見ぬうちは、笛こそ親の姿であり、笛こそ親の声でもある。

——吹くと涙がこぼれるから。

お通が、貸すのも嫌、吹くのも嫌といった気持は、よくわかるし、可憐いじらしい。

「……………」

沢庵は、黙ってしまった。

めずらしく三日目の今夜は、薄雲の裡うちに、ぼやっと、真珠色の月が溶とけている。秋に来て春に帰る雁かりが、こよいも日本を去つてゆくときみえ、雲間に時々啼とほき声を捨てている。

「……………また、火が乏とほしくなつたな。お通さん、その枯れ木をくべておくれ。……………おや。……………どうしたのじゃ」

「……………」

「泣いているのか」

「……………」

「つまらぬことを思い出させて、心ないわざをしたの」

「……いいえ。沢庵さん……わたしこそ、強情を張って悪うございました。どうぞ、おつかい下さいまし」

帯の間の笛を抜いて、沢庵の手へ差出した。

それは、色褪いろあせた古金こきん欄らんの袋に入っている。糸はつづれ、紐ひもも千断ちぎれているが、古雅こがなおいと共に、中の笛までが、ゆかしくしの俵はしらばれる。

「ほ。……よいのか」

「かまいません」

「じゃあ、ついでのことに、お通さんが吹いてはどうじゃな。わしは、聴いていてもよいのだ。……こうして聴いているから」

笛には手を触れないで、沢庵は横向きになった。そして自分の

膝を抱えこむ。

六

常ならば、笛など聞かしてあげようといえ、吹かない先から、茶化すに極まっている沢庵が、聴き耳澄まして、じつと眼をつむっているのでお通は、却って、羞恥はにかんでしまつて――

「沢庵さんは、笛がお上手なんでしょう」

「下手へたでもないそうだね」

「じゃあ、あなたから先に吹いてみせて下さい」

「そう、謙遜するほどではないよ。お通さんだって、相当に習つ

たという話ではないか」

「え。清原流の先生が、お寺に四年も懸かかり人ゆうどになつていたことがありましたから」

「では大したものだ、獅し々しとか、吉き簡かんとかいう秘曲もふけるのじゃろ」

「とんでもない——」

「まあ、何でも好きなもの……いや自分の胸に鬱うつしているものを、その七つの孔あなから、吹き散じてしまうつもりで吹いてごらん」

「ええ。私もそんな気がするんです、胸のうちの悲しみや恨みやため息や、そんなもの思うさま吹き散らしてしもうたら、さぞ爽せ々せいするでしょうと思つて」

「それよ、気を散じるといふことは大切だ。笛の一尺四寸は、そのままが一個の人間であり、宇宙の万象だといふ。……干、五、上、ク《さく》、六、下、口の七ツの孔は、人間の五情の言葉と両性の呼吸ともいえよう。懐竹抄を読んだことがあるだろう」

「覚えておりませんが」

「あの初めに——笛は五声八音の器、四徳二調の和なりとある」

「笛の先生みたいです」

「わしは、極道坊主のお手本のようなものじゃ。どれ、ついでに、笛を鑑てあげよう」

「鑑てください」

手に取るとすぐ沢庵はいつた。

「ウーム、これは名器だ。この笛を捨子に添えてあつたといえ、
そなたの父もてて母者人ははじゃひとも、およそ人がらがわかる気がする」

「笛の先生もほ賞めていましたが、そんなにこれはよい品ですか」

「笛にも、姿がある、心格がある。手に触れて、すぐ感じるのだ。

むかしは、鳥羽院の蝉せみおり折とか、小松殿の高野丸こうやまるとか、清原

助種のすけたねが名をたかくした蛇逃じやにがしの笛とか、ずいぶんの名器もあ

つたらしいが、近ごろの殺さつばつ伐な世間で、こんな笛を見たことは、

沢庵も初めてと申してもさしつかえない、吹かぬうちから身ぶる
いが出る」

「そんなことを仰つしやると、下手な私にはよけいに吹けなくな
つてしまう」

「銘めいがあるの。……はて、星明りでは、読めないわえ」

「小さく、吟ぎん龍りゆうと書いてあります」

「吟龍。……なるほど」

と、笛鞘さやや袋とともに、彼女の手へかえして、

「ぎ。……所望しよもう」

と、厳肅にいった。沢庵の真剣な容子ようすにお通もひきこまれて――

「では、拙つたい技なでございますが……」

草のうえに坐り直し、作法を正して、笛へ礼儀をする。

もう沢庵は口もきかない、深夜じやくの寂とした天地があるだけで、

そこに沢庵という改まった人間はないものようである、彼の黒

いすがたは、この山の一個の岩のようにしか見えていなかった。

「……………」

お通は、唇へ、笛をあてた。

七

白い面おもてをやや横向きにし、お通はおもむろに笛を構えた。歌口しめに湿りを与えて、まず心の調べから整ととのえているすがたは、いつものお通とも見えなかった。芸の力といおうか威厳があった。

「では……………」

と、沢庵へ改まり、

「不束ふつつかなすさびですが」

「……………」

沢庵は、默然もくねんとうなずく。

りよりよ

呂々と、笛は鳴りはじめた——

彼女の細くて白い指のふしが、一つ一つ、生きている小人こびとのよ
うに、七ツの孔を踏んで踊る。

低い——水のせせらぎにも似た音ねに、沢庵は自分自身が、行く

水となつて、谷間にせかれ、瀬に遊んでいるような思いに引き込
まれた。甲かんの音のあがる時は、魂を宙天そらへ攫さらわれて、雲と戯れる

心地がするし——と思えば、また地の声と天の響きとが和して、

さっさつ

颯々と世の無常をかなしむ松風の奏かなでと変つてゆく。

じつと眼をとじて、聞き惚れているうちに、沢庵は、昔三位さんみひ博雅卿ろまさきようが、朱雀門すじやくもんの月の夜に、笛をふいて歩いていたところ、楼門の上で同じように笛を合調あわす者があつたので、話しかけて笛を取りかえ、夜もすがら二人して興きように乗じて吹き明かしたが後で聞けばそれは鬼の化身けしんであつたという、名笛の伝説を思い出さずにいられなかつた。

鬼ですら音楽にはうごかされるという。まして、この佳人の横笛に、五情にもろい人間の子が、感動しないでおられようか。

沢庵は信じた。また、泣きたくなつた。

涙こそこぼさないが、彼の顔は膝の間へだんだんに埋うずまつていた。その膝を、われともなく固く抱きしめていた。

焚火たきびの火は、トロトロと、二人のあいだに燃え衰えて来たが、お通の頬は反対に紅あかくなつた。自分のふく音に三昧さんまいとなつて、彼女が笛か、笛が彼女かわからない。

母は何処いずこ? 父は何処? とその音は宙を翔かけて、生みの親を呼んでいるかのようにであつた。また——自分を捨てて他国にいる無情な男に、かくも、裏切られた処女おとめごころは痛み傷ついていることを、纏綿てんめんと恨んでいるようである。

なお、なおさらのこと。

この先——この傷手いたでを持った十七の処女おとめは——親も身寄りもない孤児みなしごは——どうして生き、どうして人なみな女の生きがいを、夢みて行かれるだろうか。

その遣るせなさを 嫺々 と憩えている。芸に陶醉してか？

——或は、そうした感情のようやく乱れかけて来たものか、お通の呼吸がやや疲れをあらわし、髪が生えぎわに、薄い汗がにじみ見えて来たかと思う頃、彼女の頬にぼろぼろと涙のすじが白く描かれていた。

長い曲はまだ終らない。 唳々 と、 淙々と、 咽ぶ限りを咽んで、止まるところを知らないものようである。

すると……

ふと暗くなりかけた焚火明りから二、三間ほど先の草むらで、何か、ごそりと、獣でも這ったような物音がした。

沢庵は、ふと首を擡げて、その黒い物体を、じっと見つめてい

だが、静かに手をあげて、

「——そのお人、霧の中では冷たかろうに、遠慮なく、火のそばへ寄つて、お聴きなされ」

と、話しかけた。

お通は、怪しんで、笛の手をやめ、

「沢庵さん、何を、ひとごと独り言をいつているのですか」

「——知らぬのか、お通さん、さつき先刻から、ソレそこに、武蔵が来て、そなたの笛を聴いているじゃないか」

と、指さした。

何気なく、ひよいと振り向いたお通は、途端に、我れにかえつて、

「きやツ——」

と、その人影へ向つて、手の横笛を投げつけた。

八

きやツと叫んだお通よりも、却つて驚いたらしいのは、そこ
うずくまっていた人間であつた。草むらから鹿のように起つて、
ぱつと彼方へ駈け出そうとする。

沢庵は、予期しなかつたお通のさげびに、折角静かに網へ掬すく
かけていた魚を汀なぎさこから逃がしたように、これも、あつと慌あわてて、

「——武蔵たけぞう？」

と、満身の力で呼んだ。

「待たツしやれ！」

つづいて投げた言葉にも、圧するような力があつた。声せい圧あつと
いうか、声せい縛ばくというか、そのまま振りほどいて行かれない力が
ある。武蔵は、足に釘を打たれたように振り向いた。

「? ……」

らんらんと光る眼が、じつと、沢庵の影とお通のほうを見てい
た。猜疑さいぎにみち、殺氣さいぎにみち、殺氣さいぎに燃えている眼である。

「……………」

沢庵はそれつきり黙っていた、胸の両の腕を静かに拱くむ、そし
て、武蔵が睨にらんでいる限り彼も相手を見つめているのだ、——息

の数まで同じように合せて呼吸しているように。

そのうちに、沢庵の眼のまわりに、何ともいえない親しみぶかい皺しわが和なごやかに寄ると、拱くんでいた腕を解いて、

「お出いでよ」

と、彼から手招きした。

すると武蔵は、途端に眼まばたきをして、異様な表情をその真っ黒な顔にあらわした。

「ここへ来ぬか。——来て、一緒に遊ばぬか」

「? ……」

「酒もあるぞ、食べ物もあるぞ、わしらはおぬしの敵でも仇かたきでもない。火をかこんで、話そうじゃないか」

「……………」

「武蔵。……おぬしはきつい勘違いをしておりはせぬか。火もあり、酒もあり、食べ物もあり、また温かい情けも酌めばある世の中だよ。おぬしは、好んで自身を地獄へ駈り立て、この世を歪ゆがんで視みておるのじやろ。……理窟はよそう。おぬしの身となれば、理窟など耳には入るまい。さあ、この焚火のそばへ来てあたれ。……お通さん、先刻煮た芋いもの中へ、冷飯をいれて、芋雑炊いもぞうすいでもつくろうじやないか。わしも腹がへったよ」

お通は、鍋なべをかけ、沢庵は酒の壺を火であたためる。二人のそういう平和な様子を見さだめて、武蔵ははじめて安心を得たらしく、一歩一歩、近づいて来たが、今度は何か肩身のせまいような

羞恥はにかみに囚とらわれて佇立たたずんでいるのであった。沢庵は、一つの石ころを火のそばへ転がして来て、

「さあ、おかけ」

と、肩をたたいた。

武蔵は、素直に腰かけた。だがお通は彼の顔を仰ぐことが出来なかつた。鎖くさりのない猛獣の前にいるような気持だつた。

「ウム、煮えたらしい」

鍋のふたを取つて、沢庵は、箸はしの先へ芋を刺した。むしやむしや自分の口へ入れて、試みながら、

「ホ。やわからかに煮えたわい。どうじゃ、おぬしも食べるか」

「……………」

武蔵はうなずいて、初めて、ニツと白い歯を見せた。

九

お通が茶碗へ盛つて渡すと、武蔵は、ふうふうと、熱い雑炊をふいて喰べる。

箸を持つている手がふるえている、茶碗のふちへ歯がガツガツと鳴る。いかに、飢^うえていたことか、浅ましいなどは常日頃のとばである。怖ろしいほど真剣な本能の戦^{せんりつ}慄であつた。

「美味^{うま}いのう」

沢庵は、先へ箸を措^おいて、

「酒はどうじゃ」

と、すすめる。

「酒は飲みません」

武蔵は答えた。

「きらいか」

というと、武蔵は首を振った。幾十日の山ごもりに、彼の胃は強い刺戟に耐えないらしかった。

「お蔭様で、暖かになりました」

「もうよいのか」

「十分に——」

武蔵は、お通の手へ茶碗を返して——

「お通さん……」

と、改めて呼んだ。

お通は、うつ向いたまま、

「はい」

聞きとれないような声でいう。

「ここへ、何しに来たのか。ゆうべも、この辺に、火が見えたが」

武蔵の質問に、お通はどきつとした。どう答えようかと顫おのいて

いると沢庵が傍らから無造作に、

「実はの、おぬしを召捕りに登って来たのじゃ」

と、いつて退けた。

武蔵は、かくべつ驚きもしなかった。默もくねん然と首を垂れて――

むしろ不審そうに二人の顔を見くらべるのだった。

沢庵は、ここぞと膝を向けて、

「どうじやな武蔵、同じ捕まるものならばわしの法ほうじよう縄じように縛られぬか、国主の掟おきても法だし、仏の誡いましめも法だが、同じ法は法でも、わしの縛る法の縄目のほうがまだまだ人間らしい扱いをするぞよ」

「嫌だ、おれは」

奮然と首を振る武蔵の血相を、宥なだめて、

「まあ聞くがよい。舍利しやりになつても反抗してやろうという、おぬしの気持はわかる。だが、勝てるか」

「勝てるかとは」

「憎いと思う人間どもに——領主の法規に——また自分自身に、

勝ちきれるか」

「敗けだ！ おれは……」

うめくようにいって、武蔵は、悲惨な顔を泣きたそうに顰めた。

「最後になったら、斬り死にするばかりだ。本位田の婆ばばや、姫路さむらいの武士どもや、憎い奴らを、斬ッて斬ッて、斬り捲くッて」

「姉は、どうする」

「え？」

ひなぐら

「日名倉の山牢にとらわれているおぬしの姉——お吟ぎんどのはどうする気かな？」

「……………」

「あの気だてのよい、弟思いなお吟どのを……。いや、そればか

りか、播磨はりまの名族赤松家の支流平田ひらたしやうげん将監しやうげん以来の新免しんめん無二齋むにさいの家名をおのれは、どうする気か」

武蔵は、爪の伸びた黒い手で、顔をおおつて、

「……しつ、知らんつ。……もう、そ、そんなこと、どうなるものか」

瘦せ尖とがつた肩を大きくふるわせ、そして濟さんぜん然と泣いて叫んだ。

すると、沢庵は拳骨こぶしをかためて、不意に武蔵の顔を横から力まかせに撲なぐり、

「この、馬鹿者っ！」

と、大喝だいかつした。

あつと、気をのまれた武蔵が、よろめくところを、沢庵は乗し

かかつて、さらに、その顔へもう一つ鉄拳を下しながら、

「不所存者めツ、不孝者め。おのれの父、母、また先祖たちに代つて、この沢庵が折檻せつかんしてやる。もう一つこの拳こぶしを食らえ！

痛いか、痛くないか」

「ウーム痛い……」

「痛ければまだすこし人間の脈があるのじやろう。——お通さん、そのこの縄をおよこし。——何を憚はばかっているか？ 武蔵はもうわしに縛られると観念しているのだ。それは、権力の縄ではない。わしの縛るのは、慈悲の縄だ。——何を怖れたり不愆ふびんがツたりすることがあろうぞ！ 早くよこしなさい」

組み敷かれた武蔵は、眼をつむっていた。匆はね返せば、沢庵の

体ぐらい、鞠まりになつて跳ぶであらうに、その脚も手も、ぐったり草の上に伸ばしたまま——そして、眼じりからとめどもなく涙をながして。

千年杉

一

朝である、七宝寺しつぽうじの山で、ごんごんと鐘が鳴りぬいた、何日いっもの刻ときの鐘ではない、約束の三日目だ。吉報か、凶報かと村の人々は、

「それっ」

とわれ勝ちに、駈けのぼって行つた。

「捕まった！ 武蔵たけぞうが、捕まッて来た」

「おう、ほんまに」

「誰たどりが、手捕にしたのじゃ」

「沢庵たくあん様がよ！」

本堂の前は、押し合うばかりな人で囲まれていた。そしてその階段のてすり手欄に、猛獣のように縛りつけられている武蔵のすがたをながめ合つて、

「ほウ」

と、大江山の鬼でも見たように生唾なまつばをのんだ。

沢庵は、にやにや笑いながら、階段に腰かけていた。

「村の衆、これでお前らも安心して耕作ができるじやろうが」

人々はたちまち沢庵を村の護りまもり神か、英雄かのように見直した。

土下座をするものがあつた。彼の手を押しただいて、足元から拝む者もあつた。

「ごめん、ごめん」

沢庵は、それらの人々の盲拝に、閉口しきつた手を振って、

「村の衆、よう聞け、武蔵が捕まったのは、わしが偉えらいたためじゃ

ない。自然の理だよ。世の掟おきてにそむいて勝てる人間はひとりもあ

りはしない、偉いのは、掟おきてじゃよ」

「ご謙遜なさる、なお偉いわ」

「そんなに押し売りするなら、かりにわしが偉いにしておいてもよいが。——時に、皆の衆に、相談があるがの」

「ほ、なんぞ？」

「ほかではないが、この武蔵の処分だ。わしが三日のうちに捕えて来なかつたら、わしが首を縊くり、もし捕えて来たら武蔵の身はわしの処分にかかると、池田侯の御家来と約束した」

「それは聞いておりましただ」

「だが、さて……どうしたもののじやろうな。本人はこの通り、ここへ召捕つて来たが、殺したもののか、それとも、生かして放してやつたものか？」

「滅めっそう相な——」

人々は、一致して叫んだ。

「殺してしまうに限る。こんな恐ろしい人間、生かしておいたとて、何になるうぞ、村の崇りたたになるだけじゃ」

「ふム……」

沢庵が何かを考えているのをもどかしがって、

「ぶち殺せっ」

と、うしろの人達はわめいた。

すると、その凶に乗って、ひとりの老婆が、前へ出て、武蔵の顔をにらみつけながら側へ寄って行った、本位田家のお杉隠居であつた、手に持っていた桑の枝を振りあげて、

「ただ殺したぐらいで腹が癒いえようか。——この憎ていな頬ゲタ

め！」

と、二ツ三ツ打ちすえて、

「沢庵どの」

と、今度は彼のほうへ喰つてかかるような眼を向けた。

「なんじや、おばば」

「わしの倅せがれ、又八はこやつのために生涯あやまを過り、本位田家は大事な跡とりを失うたのじや」

「ふム又八か、あの倅は、あまり出来がよいから、かえつて、養子をもろうたほうが、おぬしのためじやないかの」

「何をいわつしやる。よかれ悪しかれ、わしの子でござる。武蔵は、この身にとって子の仇、こやつ身の処置は、この婆に、ま

かせて下されい」

すると——婆のそういう言葉を、誰かうしろの方で遮さへぎった者が
ある。ならん！ という横柄な声だった。人々は、その人物の袂たもと
にさわることを怖れるようにさつと開いた、例の山狩の大將、ど
じょう髯ひげの武士さむらいの顔がそこに見えた。

二

おそろしく不機嫌なていでいる。

「こらッ。見世物ではないぞ、百姓や町人どもは、立ち去りおろ
う」

どじよう髯は、呶鳴った。

沢庵も、横からいった。

「いや、村の衆、去るには及ばんよ、武蔵の処分をどうするか、相談のため、わしが呼んだのだ、いておくれ」

「だまれっ」

どじよう髯は、肩をそびやかし、そういう沢庵をはじめ、お杉隠居と群集を睨めまわして、

「武蔵めは、国法を犯した大罪人、しかも、関ヶ原の残党、断じてその方どもの手で処置することは相成らん。成敗は、お上に
おいてなされる」

「いけないよ」

沢庵は、顔を振って、

「約束がちがう！」

断乎とした色を示した。

どじよう髯は、自分の一身にかかわるところと、躍起やつきになつて、

「沢庵どの、貴公には、お上より約束の金子をとらせるであろう。

武蔵の身は此方こつちへ申しうける」

聞くと、沢庵はおかしげに、からからと哄こうし笑しょうした。答えも

せず、笑つてばかりいた。

どじよう髯は、真まつ蒼さおになつて、

「ぶツ、ぶ礼な。何がおかしい」

「どちらが無礼か。これ、お髯ひげどの。おぬしはこの沢庵との約束

を反古ほごにする気か。よろしい、反古ほごにしてみい、その代り、沢庵の捕えたこの武蔵は、今すぐ、縄目を解いて、押っ放すぞ」

村の人々は、驚いて、逃げ腰を退ひいた。

「よいか！」

「……………」

「縄を解いておぬしへケシかけよう。おぬしはここで武蔵と一騎打ちして、勝手に召捕るがいい」

「あつ、待て待て」

「なんじゃ」

「折角、召捕ったもの、縄目を解いて、また騒動を起すにもおよぶまい。……では、武蔵を斬ることはまかせるが、首は、此方へ

渡すであろうな」

「首を？ …… 冗じょうだん戯ごではない、葬式は坊主のつとめ。おぬし

に、死骸をまかせては、寺の商売が立ちゆかぬ」

子供あしらいである。沢庵は、擲や揄ゆして、また村の人々へ向き直っていた。

「一同へ、ご意見を求めても、遽にわかに評議は決まりそうもない。

殺すにしても、ばつさり斬ってしまつては、腹が癒いえんという婆もいるからの。——そうだ、四、五日のあいだ、武蔵の身は、あの千年杉の梢こずえに上げて、手足を幹に縛りつけ、雨ざらし風ざらし、からす鴉からすに眼だまをほじらせてくれたらどうじゃろ？」

「……………」

すこし酷^{ひど}すぎると思っただのであろう、誰も返辞をしなかった。

すると、お杉隠居が、

「沢庵どの、よい智慧じゃ、四日五日はおろか、十日でも二十日でも、千年杉の梢へ曝^{さら}しにかけ、最後にはこの婆がとどめを刺してくれまする」

と、いった。

無造作に、

「じゃあ、そう決めよう」

沢庵は、武蔵の縄じりをつかんだ。

武蔵は、黙^{もく}然^{ねん}と、うつ向いたまま千年杉の下へ歩むのだった。

村の者たちは、ふと、不愍^{ふびん}を感じたが、先頃からの憤怒はまだ

消え切れなかった。たちまち、麻縄を足して、彼の体を、二丈も空の梢へ引き揚げ、わらにんぎょう藁人形のように縛りつけて降りて来た。

三

山から降りて来た日、寺へもどつて、自分の部屋へ入ると、お通つうはその日から急に、独りぼっちの身が淋しくてならなくなった。
(なぜかしら?)

独りぼっちは、今始まったことではないし、寺には、ともかく、人もおり火の気もあり明りも燈ともっているが、山にいた三日間というものは、せきばく寂寞たる闇の中に、沢庵さんとたった二人であつた。

——だのに何故、寺へ歸つて来てからの方が、こんなに淋しい気がするのか？

自分の気もちを、自分に訊いてみようとするものらしく、この十七の処女おとめは、窓の小机に頬づえをついたまま、半日をじつとそうしていた。

(わかつた)

うつすらと、お通は、自分の心を観みた気がした。淋しいという心は飢うえと同じだ。皮膚の外のものではない、そこに、満ち足りないものを感じる時、さびしさが身に迫る。

寺には、人の出入りがあるし、火の気も明りもあつて賑やかさうだが、そういう形の現象でこの淋しさは癒いやせるものでない。

山には、無言の樹と霧と闇しかないが、そこにいた一人の沢庵という人は、決して、皮膚の外の人ではなかった。あの人の言葉には、血をくぐって心に触れ、火よりも明りよりも心を賑やかにしてくれるものがある。

(その沢庵さんがいないから！)

お通は、起ちかけた。

しかしその沢庵は、武蔵の処置をしてから姫路藩の家来たちと何か客間で膝詰め相談事をしていた。里へ降りてはとても忙しくて、自分と山の中でのような話などしていられそうもない。

そう気づくと、彼女はまた、坐り直した。ひしひしと、知己ちぎが欲しいと思う。数は求めない、ただ一人でよい、自分を知つてく

れるもの、自分の力になってくれるもの、信じられるもの——それが欲しい！ もう気が狂うほど、そういう人がこの身に欲しい！

笛。——ふた親のかたみの笛。——ああそれはここにあるが、おとめ処女の十七ともなれば、もう、冷たい一管の竹では防ぎ得ないものが育っている。もつと切実な、現実的な対象でなければ満ち足りない。

「くやしい……」

それにつけても彼女は、ほんいでんまたはち本位田又八の冷たい心を恨まずにはいられなかつた。ぬりづくえ塗机は涙でよごれ、独りで怒る血は、こめかみの筋を青くして、ずきずきと、その辺がまた痛んでくる。

うしろの襖ふすまが、そつと開あいた。

いつの間にか大寺の庫裡くりには暮色が湧わいでいた。開けた襖ふすまごしに、厨くりやの火が赤く見える。

「やれやれ、ここに居ゐったかいの。……一日暇をつぶしてしも
うた」

眩くらきながら入いつて来たのは、お杉おぎんばばであつた。

「これは、おば様」

あわてて敷物を出すと、お杉は、会釈もなく木魚のように坐まつ
て、

「嫁御」

と、いかめしい。

「はい」

竦すくむように、お通は手をつかえた。

「そなたの覚悟をたしかめた上、ちと話があるのじや。今まで、あの沢庵坊主や、姫路の御家来たちと話していたが、ここの納なっし所よ、茶も出さぬ。喉かわが渴かわきました。まず先に、ばばに茶を一ぱい汲んでおくりやれ」

四

「ほかではないがの……」

お通の出す渋茶を取ると、ばばは改まって、すぐいい出した。

「武蔵めのいうたことゆえ、うかとは信じられぬが、又八は、他
国で生きているそうじゃよ」

「左様でございますか」

お通は冷ややかだった。

「いや、たとい、死んでおればとてじゃ、そなたという者は、又
八の嫁として、この寺の和尚おすどのを親元に、確しかと、本位田家にも
らいうけた嫁御、この後どんな事情になろうと、それに、ふたごこ二一
心ろはあるまいの」

「ええ……」

「あるまいの」

「は……い……」

「それでまず、一つは安心しました。ついては、とかく、世間がうるさいし、わしも、又八がまだ当分もどらぬとすれば、身のまわりも不自由、分家の嫁ばかり、そうそうこき使うてもおられぬゆえ、この折に、そなたは寺を出て、本位田家のほうへ身を移してもらいたいが」

「あの……私が……」

「ほかに誰が、本位田家へ嫁として来るものがあるうぞいの」
「でも……」

「わしと暮すのは嫌とでもおいしいか」

「そ……そんな理わけではございませぬが」

「荷物を纏まとめて置きやい」

「あの……又八さんが、帰ってからでは」

「なりません」

と、お杉は極めつけて、

「せがれが戻るまでの間に、そなたの身に虫がついてはならぬ。嫁の素行を見まもるのは、わしの役目、この婆の側において、せがれ伴がもどるまでに、畑仕事、飼蚕かいこのしよう、お針、行儀作法、何かと教えましょう。よいか」

「は……はい……」

仕方なくいう自分の声が、情けなくて泣くように自分には聞えた。

「次に」

と、お杉は命じるように、

「武蔵のことじゃが、あの沢庵坊主の肚は、ばばには、どうも解せぬ。そなたは、幸いに此寺ここにいる身でもあることゆえ、武蔵めいのちの生命が終るまで、怠らずに、ここで見張つていやい——真夜半まよなかなど、気をつけておらぬと、あの沢庵が、何を気ままにしてのけぬものでもない」

「では……私が此寺こちちらを出るのは、今すぐでなくともよいのでございますか」

「いちどに、両方はできますまい。そなたが、荷物と一緒に本位田家へ移つて来る日は、武蔵の首が胴を離れた日じゃよ。わかりましたか」

「かしこ畏まりました」

「きつと吩咐いいつけましたぞよ」

念を押して、お杉は去った。

すると——その機会を待っていたように、窓の外に人影が映さし、
「お通、お通」

と小声で誰か招く。

ふと、顔を出してみると、どじょう髯ひげの大将がそこに佇たたず立んで
いる。いきなり窓ごしに彼女の手を強く握って、

「そちにも、いろいろ世話になったが、藩からお召状が来て、急
に姫路へもどらねばならぬことになった」

「ま、それは……」

手をすくめたが、どじよう髯はなお固く握って、

「御用は、今度の事件が聞えて、それについてのお取^{とり}糺^{ただ}しらしい。武蔵の首級^{しるし}さえ取れば、わしの面目は立派に立ち、言い開きもつくのじゃが、沢庵坊主め、何といても意地を曲げて渡しおらぬ。……だが、そなただけは、こつちの味方じやろうな。……この手紙、後でよい、人のおらぬ所で、読んでくれい」

何か、手へ掴ませると、どじよう髯の影は、あたふたと、麓のほうへ急ぎ足にかくれた。

五

手紙だけではない、何か、重い物がそれにはつつんである。

どじよう髯の野心は彼女にもよく分つていた。不気味であつたが、怖々こわごわ、開けてみると、眩まばゆい山吹色の慶長大判が一枚。

そして、手紙には、

言葉のうえにても申し候通り、この数日以内に、武蔵が首級を打つて密かに、姫路の城下まで、急ぎお越し候らえ。

さなくとも此方こなたの意中は、すでにお許もとも御ぞん知に候うべし、身不肖ふしようなれど、池田侯の家中にて、青木丹左衛門と申せば千石取りの武士もののかにて、知らぬは無これなくそうろう之候もと。お許もとを、宿の妻にせんと真実もつて存ずるなり、千石どりの奥方ともなれば、栄華も意のままに候ぞかし。八幡、偽りはあらじ、この文を、誓

紙がわりに持ち候らえ。又、武蔵が首級、良人のためぞと、それも必ずお携たずさえ給たまわるべく候。

先は、急ぎのまま、あらまし。

丹左

「お通さん、御飯を食べたかね」

外で沢庵の声でしたので、お通は、草履をはいて出て行きながら、

「こん夜は食べたくないんです。すこし頭が痛くて——」

「何じゃ！ 持っておるのは」

「てがみ」

「誰の」

「見ますか」

「さしつかえないならば」

「ちツとも」

お通が渡すと、沢庵は一読して、大きく笑った。

「苦しまぎれに、お通さんを色と慾とで買収と出おったな。あのお髯どのの名が青木丹左衛門とはこの手紙で初めて知った。世の中には、奇特なさむらいもある。いや、おめでたいことだ」

「それはいいですけど、お金がつつんであつたのです。どうしましよう、これを？」

「ホ、大金だのう」

「困ってしまふ……」

「何の、金の始末なら」

沢庵は取つて、本堂の前へ歩いて行つた。そして、賽銭箱さいせんばこの中へ抛ほうり込もうとしかけたが、その金を額ひたいに当てて拜まじんだ後、

「いや、そなたが持つておるさ。邪魔にもなるまい」

「でも、後で何か、いいがかりをつけられると嫌ですから」

「もうこの金は、お髯どのの金ではない、如来様にょらいさまへ賽銭さいせんにさしあげて、如来様から改めていただいたお金じやよ。お守りのかわりに持つておいで」

お通の帯のあいだへそれを差し入れて、

「……あ。風だな、今夜は」

と、空を仰ぐ。

「しばらく降りませんでしたから……」

「春も終りだから、散った花^{はな}屑^{くず}やら人間の惰^だ気^きを、ひと雨ドツと、洗いながすもよかろう」

「そんな大雨が来たら、武蔵さんは一体どうなるでしょう」

「うム、あの人か……」

二つの顔が一しよに、千年杉のほうを振り向いた時である。風の中の喬木の上から、

「沢庵っ、沢庵っ！」

人間の声があった。

「や？ 武蔵か」

眸をこらしていると、

「くそ坊主つ、似非坊主えせの沢庵。一言いうことがある。この下へ

参れつ——」

こずえ梢を烈しく吹きなぐる風に、声は裂けて異様にひびく。そして

大地へも沢庵の顔へも、さんさんと杉の葉が落ちて来た。

六

「はははは。武蔵、なかなか元気でおるな」

沢庵は、声のする大樹の下へ、草履を運んで行きながら、

「元気はよいらしいが、近づくと死の恐れに、逆上しての、気ちがい元気ではあるまいな」

程よい所に足をとめて、仰向くと、

「だまれっ」

武蔵の再びいう声だ。

元気というよりは怒気どきであつた。

「死を怖れるほどならば、なんで神妙に貴さまの縛ばくをうけるかつ」
「縛をうけたのは、わしが強くて、おまえが弱いからだ」

「坊主っ、何をいうか！」

「大きく出たな。今のいい方がわるければ、わしが慥巧で、おまえが阿呆——といい直そうか」

「うぬ、いわしておけば」

「これこれ、樹の上のお猿さん、もがいた所でこの大木へ、がん

じ絡がらみになつてゐるおまえが、どうもなるまい、見ぐるしいぞ」

「聞けツ、沢庵」

「おお、なんじゃ」

「あのと看、この武蔵が争う気ならば、貴様のようなへボ胡瓜きゆうり、踏み殺すのに造作はなかつたのだぞ」

「だめだよ、もう間に合わん」

「そ！ ……それを！ ……自分から手をまわしたのは、貴様の高僧めかしたことに巧うまうま々と騙たばかられたのだ。たとい縄目にはかけても、このような生き恥をかかせはしまいと信じたからだ」

「それから——」

と沢庵は嘯うそぶいた。

「だのに、なぜ！　なんで！　……この武蔵の首を早く打たないかつ……同じ死所ししよを選ぶなら、村の奴らや、敵の手にかかるより、僧でもあるし、武士の情けもわきまえていそうな貴様に——と思つて体を授けたのがおのれの誤りだった」

「誤りは、それだけか。おまえのしてきたことは誤りだらけだと思わないか。そうしている間に、すこし過去を考えろ」

「やかましい。おれは、天に恥じない。又八のおばは、おれをかたき仇の何のと罵つたが、おれは、又八の消息たよりをあのおふくろへ告げることが、自分の責任つとめだ、友達の信義だ、そう思つたからこそ、山木戸をむりに越え、村へ歸つて来たのだ。——それが武士の道にそむいているか」

「そんな枝葉えだはの問題じゃない、大体、おまえの肚——性根——根本の考えかたが間違っているから、一つ二つさむらいらしい真似をしても、何もならんのみか、却かえつて正義だなどと、力りきめば力むほど、身をやぶり、人に迷惑をかけ、その通り自縄じじょう自縛じばくというものに落ちるのだよ。……どうだ武蔵、見晴らしがよかろう」

「坊主、覚えておれ」

「乾物ひものになるまで、そこから少し十方世界のひろさを見ろ、人間界を高処からながめて考え直せ。あの世へ行つてご先祖さまにお目にかかり、死に際に、沢庵という男がこう申しましたと告げてみい。ご先祖さまは、よい引導いんどうをうけて来たと欣よろこぶに違ちがいない」

——それまで、化石したように、うしろの方に立ち竦すくんでいた

お通は、ふいに、走りよって、甲だかく叫んだ。

「あんまりです！ 沢庵さん！ いくら何でも、先刻から聞いていれば、抵抗てむかいのできない者へ酷ひどすぎます。……あ、あなたは僧侶じゃありませんか。しかも武蔵さんのいう通り、武蔵さんはあなたを信じて、争わずに、縛しまめをうけたのではありませんか」

「これはしたり、同士打ちか」

「無慈悲ですつ。……わたしは、今のようなことをあなたがいうと、あなたが嫌になってしまいます。殺すものなら、武蔵さんも覚悟のこと、いさぎよく殺してあげてはどうですか」

お通は、血相を変えて、喰ってかかった。

七

激^{げき}しやすい処女^{おとめ}の感情は、青じろい権まくを顔にもつて、涙まじりに、あいての胸へしがみついて行つた。

「うるさい」

沢庵は、いつになく怖い顔して、

「女などが知つたことか。黙っておれつ」と、叱つた。

「いいえ！　いいえ！」

つよく顔を振りながら、お通も、いつものお通でなかつた。

「わたしにも、このことについては、口を出す権利があります。」

いたどりの牧まきへ行つて、私も、三日三晩、努めたのですから」

「いかん！ 武蔵の処分は、誰がなんといおうと、この沢庵がする」

「ですから、斬るものなら、斬つたがよいではありませんか。何も、半殺しにして、他人ひとの酷むごい目を、たのしむような非道をしな
くても」

「これが、わしの病やまいだ」

「ええ、情けない」

「退のいていなさい」

「退きません」

「また、強情が始まったな。この女め！」

力づくよく振り放すと、お通は、杉の根へよろめいて行つて、わつと、そのまま樹の幹へ、顔も胸も押しあてて泣き出した。

沢庵までが、こんな残酷な人とは、彼女は思っていなかった。村の者のてまえ一応は樹へ縛つても、最後には何か情けのある処置を執るのだらうと思つていたのに、実はこういう残酷なことを楽しむのが病やまいだとこの人はいうのだ。お通は、人間というものに、戦慄せずにはいられない。

信じぬいていた沢庵までが、嫌な人になることは、世の中のすべてが嫌になるのも同じだった。あらゆる人が信じられないとしたら……彼女は滅失の底に泣き沈んだ。

だが――

彼女は、ふと、泣き顔を、押しあてている樹の幹に、あやしい情熱を覚えた。この千年杉のうえに縛られている人——凜烈な声を天から投げってくる人——その武蔵の血が、この十人の腕でも抱えきれないような太い幹へ通かよっているような心地がする——

武士の子らしい！ 潔いさぎよい！ そして、何という信義のつよい人。

沢庵さんに縛られたあの時の様子や先刻さつきからの言葉を聞けば、この人は、涙もろい、気のよわい、情けの半面すら持っている。

今までは、衆評にまき込まれて、自分も武蔵という人を考え違っていた。——どこにこの人を、悪鬼のように憎むところがあろう、猛獣のように怖がったり狩立てなければならぬ性質があるだろうか。

「……………」

背にも肩にも嗚咽おえつの波を打ちながら、お通はひしと千年杉の幹を抱きしめるような気持でいた。頬の涙を、樹の皮膚かわはだへこすりつけた。

天狗がゆるするように、天そらの梢こずえが鳴りだした。

ポツ！ と大きな雨つぶが、彼女の襟もとへも、沢庵の頭へもこぼれて来たのである。

「お！ 降って来たわ」

頭へ、手をやりながら、

「おい、お通さん」

「……………」

「泣き虫のお通さん、そなたが泣くので、天までベソを掻かいて来たじゃないか。風があるし、これや大降りになろう、濡れぬうちに、退散退散。死んでゆく奴にかまっていけないで、はやくお出ですぼりと法衣ころもを頭からかぶると、沢庵は、逃げるように本堂の内へ駆け込んでしまう。

雨は、やにわに降りそそいで来て、闇のすそが、真つ白にぼかされた。

ぼたぼたと背に落ちるしずくの打つにまかせて、お通はいつまでも動かなかつた。——梢こずえの上の武蔵はいうまでもない。

お通は、どうしても、そこを去る気もちになれなかつた。

雨やしずくが、背をとおして、肌着にまで浸^しみて来たが、武蔵のことを思えば何でもない気がする。だが、何で、武蔵の苦しみとともに自分も苦しみたいのか——それは考えている余裕もない。ただ遽^{にわ}かに、彼女には見事な男性の象^{かたち}がそこに見えていたのである。こんな人こそ、真の男性ではないかと思うと共に、殺したくないと念ずる思いが真剣にこみあげてくるのであつた。

「かあいそうな！」

彼女は、樹をめぐつて、おろおろしだした。仰いでも、その人の影すら見えない雨と風であつた。

「——武蔵さあん！」

思わずさげんだが、返辞はない。あの人もまたこの私を、本位田家の一人のように、村の人々と同じように、冷酷な人間と視ているにちがいない。

「こんな雨に打たれていたら、一晩で死んでしまう。……ああ、誰か、これほど人間の多い世間なのに、一人の武蔵さんを、助けてやろうとする人はないのか」

お通は、突然、雨の中をまっしぐらに駈けだした。風は彼女を追いかけるように吹いた。

寺の裏は、庫裡も方丈も、すべて閉まっていた。樋をあふれる水が、滝のように地を穿っていた。

「沢庵さん、沢庵さん」

その戸は、沢庵にあてがわれている一室だった。お通が、外から烈しく叩くと、

「誰だい？」

「わたしです、お通です」

「あつ、まだ外にいたのか」

すぐ戸を開けて、みずけむり水煙ひさしの廂の下をながめ、

「ひどい！ ひどい！ 雨がふき込む、早くお入り」

「いいえ、お願いがあつて来たのです。後生ごしやうですから、沢庵さ

ん、あの人を、樹から下ろしてあげて下さい」

「誰を」

「武蔵さんを」

「とんでもないこと」

「恩に着ます」

お通は、雨の中に膝まずいて沢庵のすがたへ、掌てをあわせた。

「この通りです……私をどうしてもかまいませんから……あの人を、あの人を」

雨の音は、お通の泣き声を打ちたたいたが、お通は、滝つぼの中にある行ぎょうじや者しやのように、合わせた掌てをかたくして、

「おがみます、沢庵さん、おすがりいたします、私にできる事ならどんな事でもしますから……あ、あのお方を、た、たすけて」

泣いてさけぶ彼女の口の中まで雨はふき荒すさんでいる。

沢庵は、石みたいまぶたに黙っていた。本尊仏を秘めた厨子ずしの扉のよ
うに瞼まぶたをふかくふさいでいるのである。大きな息をついて、やが
てその瞼をくわつと開けると、

「はやく寝なさい。丈夫な体でもないのに、雨水は毒じやとい
うことを知らんのか」

「もしつ……」

お通が、戸へすがると、

「わしは寝る。そなたも寝や」

雨戸はかたく閉められてしまった。

だがお通は、諦あきらめなかつた。屈しなかつた。

床下へ入って行って、沢庵の寝床の敷かれたあたりへ、

「おねがいです！ 一生のおねがいです！ ……もしツ、聞えませんか、ええ沢庵さんの人非人ひとでなし……鬼ツ……あなたには血がかよつていないのですか」

根気よく黙りこくつていたが、とても寝つかれないとみえて、
 沢庵はどうとう癩かんしゃく癩やくを起したように飛び起きて呶鳴った。

「おーいッ、寺の衆つ、わしが部屋へやの床下に、泥棒が忍んでおるで、捕まえてくれんか」

樹石問答

春も、ゆうべの雨や風で、残りなく洗われてしまった。今朝は、陽の光もおそろしく強く額ひたいを射る。

「沢庵たくあんどの、武蔵たけぞうはまだ生きておりますかいの」

お杉隠居は、夜が明けると、待ち遠しい楽しみでも見物に来たように寺を覗のぞいてそういつた。

「おう、おばばか」

沢庵は、縁へ出て来て、

「ゆうべの雨はひどかったのう」

「よい気味な嵐でおぎった」

「だが、いくら豪雨に叩かれたとて、一夜や二夜で、人間は死ぬ

まいて」

「あれでも生きているのじやろうか？ ……」

とお杉婆は、皺しわの中の針のような眼を眩まぶしげに、千年杉の梢こずえに向けて、

「雑ぞうきん巾のように貼りついたまま、身うごきもしていぬが」

「鴉からすが、あの顔へたからぬところを見れば、武蔵は、まだ生きて
いるに違いなからうで」

「大きに——」

お杉はうなずきながら、奥を覗いて、

「嫁が見えぬが、呼んでおくれぬか」

「嫁とは」

「うちのお通^{つう}じゃ」

「あれはまだ本位田家の嫁ではあるまいが」

「近いうち、嫁にする」

「^{むこ}聳のいない家へ、嫁をむかえて誰が添うのか」

「おぬし、風来坊のくせに、よけいな心配はせぬものよ。お通は、どこにいますかいの」

「たぶん、寝ておるじやろう」

「アアそうか……」

独り合点して——

「夜は、武蔵の見張をしておれとわしが吩咐^{いいつ}けたゆえ昼間は眠た
いも道理……。沢庵どの、昼間の見張は、おぬしの役じゃぞ」

お杉は、千年杉の下へ行つて、しばらく仰向いていたが、やがてこつこつと桑の杖をついて里へ降りて行つた。

沢庵は、部屋へ入ると、晩まで顔を見せなかつた。里の子が上がつて来て、千年杉の梢へ石を投げた時、障子をあけて、

「^{はな}洩たれッ！ 何をするかッ」

と一度、大声で叱つたきり、その障子は、終日閉まつていた。

同じ棟の幾間かを隔てて、お通の部屋があつたが、その障子も今日は閉まつたきりであつた。納^{なつしよ}所の僧が、煎^{せん}じ薬を持って入つたり粥^{かゆ}の土鍋を運んで行つたりしていた。

ゆうべあの大雨の中を、お通は寺の者に見つかつて無理やりに屋内へ引上げられ、住職からは、さんざん叱^{こごと}言をいわれたりした。

そのあげく風邪ぎみの熱を発してきようは寝たきり頭があらないでいるということだった。

こよいは、ゆうべの空とは打って変つて、月が明るかった。寺の者が寝しずまると、沢庵は、書物に倦いたように、草履ぞうりを穿はいて、外へ出て行つた。

「武蔵——」

そう呼ぶと、杉の梢が、高い所ですこし揺れた。

バラバラと露の光が落ちてくる。

「——不憫ふびんや、返辞をする元気も失せたのか、武蔵っ、武蔵っ」
すると、すさまじい力で、

「なんだッ！ くそ坊主！」

少しも衰えのない武蔵の唎号どごうだった。

「ホ……」

と、見上げ直して、

「声は出るな。そのあんばいではまだ五、六日は持つだろう。時に……腹ぐあいはどうだ」

「雑言は無用、坊主、はやく俺の首を刎はねろ」

「いやいや、うかつに首は斬られない。貴さまのような我武者がむしやは、首だけになっても、飛びついて来るおそれがあるからな。……まあ、月でも見ようか」

沢庵は、その石へ、腰をおろした。

二

「うぬつ、どうするか、見ていろつ——」

武蔵は、満身の力で、自分の身を縛いましめている老杉ろうさんの梢をゆさゆさうごかしている。

バラバラと、杉の皮や、杉の葉が、沢庵の頭へこぼれて来る。

その襟元を払いながら沢庵は仰向いて——

「そうだ、そうだ。それくらい怒ってみなければ、ほんとの生命力も、人間の味も、出ては来ぬ。近頃の人間は、怒らぬことをもって知識人であるとしたり、人格の奥行きと見せかけたりしているが、そんな老成ぶった振舞を、若い奴らが真似るに至っては言

語道断じや、若い者は、怒らにやいかん。もツと怒れ、もツと怒れ」

「才才！ 今に、この繩を摺り切つて、大地へ落ちて貴様を蹴殺してやるから、待つておれ」

「頼もしい。それまで待つていてやろう。——しかし、つづくか。繩の切れないうちに、おぬしの生命いのちが断きれてしまいはせぬか」

「何をっ」

「おう、えらい力、木がうごく。しかし、大地はびくともせぬじやないか。そもそも、おぬしの怒りは、私憤だから弱い。男児の怒りは、公憤でなければいかん。われのみの小さな感情で怒るのは、女性の怒りというものだ」

「何とでも、存分に吐ほぎいておれ。——今にみよ」

「駄目さ。——もうよせ武蔵、疲れるだけじゃぞ。——いくらもがいたところで、天地はおろか、この喬木の枝一つ裂くことはなるまい」

「うーむ……残念だ」

「それだけの力を、国家のためとまではいわん、せめて、他人のためにそそいでみい、天地はおろか、神もうごく。——いわんや人をや」

沢庵はこの辺から、やや説教口調になって、

「惜しむべし、惜しむべし。おぬし、折角人と生れながら、猪しし、

狼にひとしい野性のまま、一步も、人間らしゆう至らぬ間に、紅

顔、可惜あたらここに終ろうとする」

「やかましいッ」

唾つばを吐いたが、唾は、高い梢から地上へ来るまでの途中で霧になつてしまふ。

「聞けよ！ 武蔵。——おぬしは、自分の腕力に思い上がつていたろうが。世の中に、俺ほど強い人間はないと慢じていたろうが。……それがどうじゃ、その態さまは」

「おれは恥じない。腕で貴さまに負けたのではない」

「策で負けようが、口先で負けようが、要するに、負けは負けだ。その証拠には、いかに口惜くやしがつても、わしは勝者となつて石の床しょうぎ几ぎに腰かけ、おぬしは敗者のみじめな姿を、樹の上に曝さらされ

ているではないか。——これは一体、何の差か、わかるか」

「……………」

「腕すもうづくでは、なるほど、おぬしが強いに極まっている。虎と人間では、角力すもうにならん。だが、虎はやはり、人間以下のものではないのだぞ」

「……………」

「たとえば、おぬしの勇氣もそうだ、今日までの振舞は、無智から来ている生命いのち知らずの蛮勇だ、人間の勇氣ではない、武士さむらいの強さとはそんなものじゃないのだ。怖いものの怖さをよく知っているのが人間の勇氣であり、生命いのちは、惜しみいたわって珠とも抱き、そして、真の死所を得ることが、真の人間というものじゃ。」

……惜しいと、わしがいうたのはそのことだ。おぬしには生れながらの腕力と剛気はあるが、学問がない、武道の悪いところだけを学んで、智徳を磨こうとしなかつた。文武二道というが、二道とは、ふた道と読むのではない。ふたつを備えて、一つ道だよ。——わかるか、武蔵」

三

石もいわず、樹も語らず、闇は寂しやくとしたままの闇であつた。そしてややしばらくの沈黙がつづいていた。

——と。やがてやおら沢庵は石の上から腰をあげて、

「武蔵、もう一晩、考えてみなさい。そのうえで、首を刎はねてやろう」

と、立ち去りかけた。

十歩——いや二十歩ほど、彼が背を見せて、本堂のほうへもう歩み出していた時である。

「あ。しばらく！」

武蔵が空からいった。

「——なんじゃ？」

遠くから沢庵が振向いて答える。

「もいちど、樹の下へもどつてくれ」

「ふム。……こうか」

すると樹上の影は突然、

「沢庵坊——助けてくれッ」

と、大声で喚わめいた。

にわかに泣いてでもいるように、天そらの梢こずえはふるえていう。

「——俺は、今から生れ直したい。……人間と生れたのは大きな使命をもつて出て来たのだということがわかった。……そ、その生甲斐がわかったと思つたら、途端に、俺は、この樹の上にしばられてゐる生命いのちじゃないか。……アア！ 取り返しのつかないことをした」

「よく気がついた。それでおぬしの生命は、初めて人間なみになつたといえる」

「——ああ死にたくない。もう一ぺん生きてみたい。生きて、出直してみたいんだ。……沢庵坊、後生だ、助けてくれ」

「いかん！」

断乎として、沢庵は首を振った。

「何事も、やり直しの出来ないのが人生だ。世の中のこと、すべて、真剣勝負だ。相手に斬られてから、首をつぎ直して起ち上がろうというのと同じだ。不愆ふびんだが沢庵はその縄を解いてやれん。せめて、死に顔のみぐるしくないように、念仏でも唱えて、静かに、生死の境を噛みしめておくがよい」

——それなり草履の音はピタピタと彼方へ消えてしまった。武蔵も、それきり喚わめかなかつた。彼にいわれたとおり、大悟たいごの眼まなこを

ふさいで、もう生きる気も捨て、死ぬ気もすて、颯々と夜を吹く
かぜと小糠星こぬかぼしの中に、骨の髄しんまで、冷たくなつてしまつたもの
のようであつた。

……すると、誰か？

樹の下へ立つて、梢を仰いでいる人影があつた。やがて千年杉
に抱きついて、一生懸命に、低い枝の辺までよじ登ろうとするの
であつたが、樹のぼりに妙を得ない人とみえ、少し登りかけると、
木の皮と一緒にすべにすべり落ちてしまう。

それでも——木うの皮より手の皮がすり剥むけてしまひそうになつ
ても——倦うまず屈せず、一心不乱に繰返してかじりついでいるう
ちに、やっと、下枝に手が懸り、次の枝に手をのばし、それから

先は、難なく、高い所まで登ってしまった。

そして、息を喘きりながら――

「……武蔵さん……武蔵さん……」

武蔵は、眼だけまだ生きている髑どくろ髑どくろのような顔を向けて、

「……オ？」

「わたしです」

「……お通さん？ ……」

「逃げましょう。……あなたは、生命いのちが惜しいと先刻さつきいいました

ね」

「逃げる？」

「え……。わたしも、もうこの村にはいられないんです。……い

れば……ああ堪えられない。……武蔵さん、わたしは、あなたを救いますよ。あなたは、私の救いを受けてくれますか」

「おうっ、切つてくれ！ 切つてくれ！ この縄目を」

「お待ちなさい」

お通は、小さな旅包みを片かた襷たすきに負い、髪から足ごしらえまで、すっかり旅出たびでの身仕度をしているのである。

短刀を抜いて、武蔵の縄目を、ぶつりと断きった。武蔵は、手も脚も知覚がなくなっていたのである。お通が抱き支えはしたが、却つて、彼女も共に足を踏み外し、大地へ向つて、二つの体は勢いよく落ちて行つた。

四

武蔵は立っていた。二丈もある樹のうえから落ちたのに、茫然と、大地に立っている。

ウーム……と呻く声うめが彼の足もとに聞えた。ふと眼を落して見ると、一緒に落ちたお通が、手脚を突ツぱつて地にもがいているのである。

「おっ」

抱き起して——

「お通さん、お通さん！」

「……痛い……痛い」

「どこを打った？」

「どこを打ったか分かりません。……だけど、歩けます、大丈夫です」

「途中の枝で、何度もぶつかっているから、大した怪我はしていません」

「私より、あなたは」

「俺は……」

武蔵は、考えてから、

「——俺は生きている！」

「生きていますとも」

「それだけしか分らないんだ」

「逃げましょう！一刻も早く。……もし人に見つかったら、私もあなたも、今度こそは、生命がありません」

お通は、びっこ跛行をひきながら歩き出した。武蔵も歩いた。——黙々と、遅々と、秋の霜を、片輪の虫が歩むように。

「ご覧なさい、はりまなだ播磨灘の方が、ほんのり夜が白みかけました」

「ここは何処」

「中山峠。……もう頂上です」

「そんなに歩いて来たかなあ」

「一心は怖いものですね。そうそう、あなたは、まる二日二晩、何も食べていないでしょう」

そういわれて、武蔵は初めて飢渴きかつを思い出した。

背に負っている包みを解いて、お通は、米の粉を練った餅を出した。甘い餡あんが舌から喉へ落ちてゆくと、武蔵は、生のよろこびに、餅を持っていて指が顫ふるえて、

(俺は生きてぞ)

と、つよく思い、同時に、

(これから生れ変わるのだ！)

と、信念した。

紅あかい朝雲が、二人の顔を焼いた。お通の顔が鮮やかに見えてくると、武蔵は、ここに彼女と二人でいることが夢のようで、どうしても不思議な気がしてならない――

「ぎ、昼間になったら、油断は出来ませんよ。それに、すぐ国境くにぎにかかりますから」

国境と聞くと武蔵の眼は、急に、爛らんとして、

「そうだ、おれはこれから日名倉の木戸へ行く」

「え？ ……日名倉へですって」

「あそのこの山牢には、姉上が捕まっている。姉上を助け出して行くから、お通さんとは、ここで別れよう」

「……………」

お通は、うらめしげに、武蔵の顔を黙って見ていたが、やがて、
「あなたは、そんな気なんですか。ここでもう別れてしまおうくらいなら、私は、宮本村を出ては参りません」

「だって、為しかた方がない」

「武蔵さん」

お通は、詰め寄るような眼まなざしをもつて、彼の手へ、自分の手を触れかけたが、顔も体も、熱くなつて、ただ情熱にふるえるだけだった。

「わたしの気持、今に、ゆつくり話しますけれど、ここでお別れするのは嫌です。どこへでも、連れて行って下さい」

「……でも」

「後生です」

とお通は手をついて、

「——あなたが嫌だといっても、私は離れません。もし、お吟ぎんさ

まを救い出すのに、私がいて足手まといなら、私は、姫路の御城下まで先に行つて待つていますから」

「じゃあ……」

と武蔵はもう起ちかけた。

「きつとですね」

「あ」

「城下端れの花田橋で待つていますよ。来ないうちは、百日でも千日でも立つていますからね」

ただうなず頷きを見せて、武蔵はもう峠づたいに山の背を駈けていた。

三日月茶屋

「おばば。——おばばッ」

孫の丙太だった。

跣足はだしで、そこから素ツ飛んで帰って来ると、青い鼻汁はなを横にこすって、

「たいへんだがな、おばば、知らんのけ。何してるんや」

と、台所をのぞいて喚わめいた。

竈かまどのまえに、火吹竹を持って火を吹いていたお杉隠居は、

「なんじゃ、仰ぎょうさん山な」

「村の者が、あんなに騒いでいるに、おばば、飯など炊いているんか。——武蔵たけぞうめが、逃げたのを、知らんのやろ」

「えつ。——逃げた？」

「今朝けさなつたら、武蔵めが、千年杉のうえに見えんのや」

「ほんまか」

「お寺ではお寺で、お通姉ねえも見えんいうてでかい騒ぎだぞい」

丙太は、自分の知らせが、予想以上に、おばばの血相を物凄く変らせたので、びっくりしたように、指を嚙んでいた。

「丙太よ」

「あい」

「汝われ、突ツ走って、分家の兄あんちやまを呼んで来う。河原の権ご

叔父んおじにも、すぐ来てくれというて来るのじゃ」

お杉隠居の声はふるえていた。

だが——丙太が、門を出ないうちに、本位田家の表には、がやがやと人が集まっていた。その中には、分家のむこ賀も、河原の権叔父も交まじっていたし、また、ほかの縁類や小作人などもいて、

「お通阿女あまが逃がしたのやろ」

「沢庵坊主も、姿が見えぬ」

「ふたりの仕業しわざじゃ」

「どうしてくれよう」

すでに、分家の賀や、権叔父などは、祖先伝来の槍をかかえて、本家の門に、悲壮な眼を集めているのだった。

そして――

「おぼば、聞いたか――」

と、奥へいう。

お杉隠居は、さすがに、この大事が事実と分ると、こみあげる
怒気を抑えて、仏間ぶつまに坐っていたが、

「――今参るまで、静かにしていやい」

と、そこからいつて、何か黙もく禱とうして後悠ゆうゆう々と、刀かた箆なだん筒すを
あけたり、衣裳や足ごしらえをして皆の前へ出て来た。

短い脇差を帯にさし、草履の緒おを足にしばっているので、人々
はこのきかない氣の老としより婆ばがもう何を決意しているか、よく分つ
た。

「——騒ぐことはない、婆が、追手となつて不埒な嫁を、成敗して来ますわいの」

のこのこ、歩き出すので、

「お婆ばまで、行くからには」

と、親類も小作も、いきり立って、この悲壮な老婆を大將とし、途々、棒、竹槍などをひろつて、中山峠へ追つて行つた。

しかし、すでに遅い。

この人たちが、峠の頂へかかったのは、もう午に近かつた。

「逸したか」

と一同は、地だんだを踏んで無念がった。

それのみでなく、ここは国境なので、役人が来て、

「徒党ととを組んで通行は罷まりならぬ」

と、往来はばを阻めた。

それに対しては、権叔父が応対に出て、事情わけを話し、

「これを捨ておいたでは、われら遠き先祖以来の面目にかかわり、村の者よりは笑いぐさとなり、本位田家は、御領下にもいたたまれぬことに相成りますので。——何とぞ、武蔵、お通、沢庵の三名を討ちとるところまで、通行おゆるし願いたい」

と、こつちでは、頑張った。

理由は酌くめるが、しかし法令がゆるさぬ、と役人側では断じていう。もつとも、姫路城まで伺うかがいを出して許可のうえなら格別だが、それでは先に通った者は、遠く藩地の外へ出てしまっている

から、それでは無駄な沙汰というほかはない。

「では——」

と、お杉隠居は、親類一同と、合議のうえで折れて出た。

「このばばと、権叔父ごんの二人なら通るも帰るも、さしつかえはおざるまいの」

「五名までなら、勝手じゃ」

役人は、いった。

お杉隠居は、うなずいて、意気まく他の人々へ、悲壮な別れを告げようとするらしく、

「皆の者」

と、草叢くさむらへ呼びあつめた。

二

「こういう手違いも、家を出る時から、あらかじめ、覚悟のうちにあつたことよ。何も、あわてるには及ばぬわいの」

お杉隠居のそういう薄い唇と、齒ぐきの出ている大きな前歯を、一族の者は、厳肅に、立ち並んで見まもっていた。

「この婆ばばはの、もう、家伝でんらい来らいの一腰刀ひとこしを帯びて出る前に、ちやんとご先祖様のお位牌いはいへ、おわかれを告げ、二つのお誓いをして参つた——それは、家名に泥を塗つた不埒ふらちな嫁を成敗すること。も一つは、せがれ又八の生死をたしかめ、いきてこの世にいるも

のなら、首に縄をつけても連れ帰って、本位田家の家名をつがせ、他から、お通に何倍も勝るとて劣らぬほどなよい嫁をむかえ、村の者へも晴れがましゆう、きようの名折れを雪がにやならぬ」

「……さすがは」

と、大勢の縁者のうちで、誰か、唸くように洩らした。

お杉は、分家の智の顔へ、じろりと、眼をやつて、

「ついては、わしと、河原の権叔父とは、どつちやも、まあ隠居身分。ふたつの大望を果すまで、一年かかるか三年かかるか、巡礼いたすつもりで、他国を巡つて参ろうと思う。留守中には、分家の智を家長と立て、飼蚕も怠るまいぞ、田や畑に草を生やすまいぞよ。よいかの、皆の者——」

河原の権叔父も五十ちかいし、お杉隠居も五十をこえている。万一、武蔵にでも出会ったら、ひとたまりもなく返り討ちにあうに極っている。——誰かもう三人ほど若い者が従ついて行つては——という者もあつたが、

「なんのい」

と、婆ばばは首を振つていう。

「武蔵武蔵というが、あか児にすこし毛が生えたような餓鬼がき一人、何を怖れることがあるうぞ。婆には、力はないが、智謀というものがあるぞよ。また、一人や二人の敵ならば、ここ——」

と、自分の唇へ、ひとさし指を押し当てて、何か自信ありげにいった。

「いい出したら、後へは退かぬおばばのことじゃ、それでは、去いになされ」

と、励まして、もう一同も止めようとはしなかった。

「さらばじゃ」

河原の権叔父と肩をならべ、お杉は、中山越えを、東へ降りた。

「お婆ば。——慥しつかりやらっしやれのう」

縁者たちは、峠から手を振って、

「病やんだら、すぐに、村へ使いを立てなされよっ——」

「はよう、元気でもどらっしやれ——」

口々に、わかれを送った。

その声が、背に聞えなくなると、

「のう権叔父。どうせ、若い者より、先へ逝く身じや。心やすいではないかの」

権叔父は、

「そうとも、そうとも」

と、うなずいた。

この叔父は、今でこそ、狩猟かりをして生活たつきをたてているが、若いうちは、血の中で育った戦国武者の果てだ。今でも頑丈な骨ぐみをつつんでいる皮膚には、戦場や焦けの色が残っている。髪も、婆ほどは白くない。姓は淵川ふちかわ、名を権六という。

いうまでもなく、本家の息子の又八は、甥おいにあたるので、この叔父が、こんどの事件に対して、関心をもたないでいるはずはな

い。

「おばば」

「なんじやい」

「おぬしは、覚悟して、旅支度もして来たろうが、わしはふだんのままじや。どこかで足あしごしら拵あしごしらえをせにやならんが——」

「三日月山みかづきやまを下ると、茶屋があるわいの」

「そうそう、三日月茶屋までゆけば、わらじもあろう、笠もある」

ここを下れば、もう播州ばんしゅうの龍野たつのから斑鳩いかるがへもほど近い。

だが、夏隣なつどなりのみじかくない日も、もう暮れかけていた。三

日月茶屋で一息入れていたお杉隠居は、

「龍野までは、ちと無理、今夜は、新宮しんぐうあたりの馬方宿うまかたやどで、

臭い蒲団に寝ることかいの」

と、茶代をおく。

「どれ、参ろう」

と、権六は、ここで求めた新しい笠を持って立ったが、

「おばば。ちよつと、待たれい」

「何じゃ」

「竹筒へ、裏の清水を入れて来るで——」

茶屋の裏へ廻つて、権六は、かけひ 笥の水を竹筒へ汲んだ。——そして戻りかけたが、ふと、窓口から、薄暗い屋の内をのぞいて、足をとめた。

「病人か？」

誰か、わら 藁ぶとんをかぶつて寝ているのである。薬のにおいがつよくする。顔は、ふとんへ埋めているのでよく分らないが、黒髪が枕にみだれかかっていた。

「権叔父よ。はよう来ぬか」

婆のよぶ声に、

「おい」

駈けてゆくと、

「なにをしていなさる」

と、婆は、不機嫌だ。

「何さ、病人がいるらしいで」

権六が歩み出しながらいいわけすると、

「病人が、何でめずらしい。子どものような道草する人じや」と、婆は叱りつける。

権六も、本家のこの隠居には、頭が上がないものとみえ、

「は、は、は」

と、磊落らいらくにごまかしてしまふ。

茶屋の前から、道は、播州路ばんしゅうじへ向つて、かなり急な坂である。

銀山がよ通いの荷駄が往来を荒すので、雨天のひどい凸凹でこぼこがそのま

まに固まっている。

「ころぶなよ、おばば」

「何をいやる、まだ、こんな道に、宥いたわられる程、ばばは、
碌くしておらぬわいの」

すると、二人の上から、

「お年より、お元気でございますなあ」

と、誰かいう。

見ると、茶屋の亭主だった。

「おう、今ほどは、お世話になった。——何処へお出でか」

「龍野まで」

「これから？ ……」

もうろ
耄

「龍野まで行かねば医者はごぎいませぬでの。これから、馬で迎えて来ても、帰りは夜中になりますわい」

「病人は、御家内か」

「いえいえ」

亭主は、顔をしかめ、

「嬢かかや、自分の子なら、為方しかたもないが、ほんの床几しょうぎに休んだ旅

の者さつでな、災難でござりますわ」

「先刻さつ……実は裏口からちよつと見かけたが……旅の者か」

「若い女子おなでな。店さきに休んでいる間に、悪寒さむけがするといふの

で、捨ててもおけず、奥の寝小屋を貸しておいたところ、だんだん熱がひどくなって、どうやらむつかしい様子なのじゃ」

お杉隠居は、足をとめて、

「もしやその女子は、十七ぐらいの——そして、背の細ツそりした娘じゃないか」

「左様。……宮本村の者だとは申しましたが」

「権叔父」

と、お杉隠居は、眼くばせをして、急に、帯を指先でさぐりながら、

「しもうたことした」

「どうなされた」

「数珠じゆずをな、茶屋の床しょうぎ几へ、置き忘れたらしい」

「それはそれは。てまえが、取って参りましょう」

と、亭主が走りかけると、

「なんのいの、おぬしは、医者へ急ぐ途中、病人が大事じや程に、先へ去いんで下され」

権叔父は、元の道を、もう大股に先へ戻っていた。茶屋の亭主を追いやって、お杉も後から急いでゆく。

——たしかにお通つう！

ふたりの呼吸いきは荒くなっていた。

四

大雨に打たれて冷えこんだあの晩からの風邪熱かぜねつなのである。

峠で武蔵と別れるまでは、それも忘れていたが、彼と袂を分つて歩きだしてから間もなく、お通は、体じゆうが痛いた懶だるくなつて、この三日月茶屋の奥に臥床ふしどを借りて横たわるまでの辛さは一通りではなかつた。

「……おじさん……おじさん……」

水がほしいのであろう、嚙うわごと言ことのように洩らしている。

店をしめると、亭主は、医者を迎えに出て行つたのだ。たった今、彼女の枕元をのぞいて、帰つて来るまで辛抱しておいで——といったのを、お通は、もう忘れているほどな高熱らしい。

口が渴かわく。茨いばらのトゲを頬ほばっているように、熱が舌を刺す。

「……水をくださいな、おじさん……」

遂に、起き出して、お通は、流し元のほうへ首をのぼした。

水桶の側まで、やっと這い寄った。そして竹柄杓たけびしやくへ手をかけた時である。

ガタと、何処かで、戸がたお仆れた。元より戸閉まりなどはない山小屋である。三日月坂から引つ返して来たばばと権六は、そこからのそのそ入つて来て、

「暗いのう、権叔父」

「待たつしやれ」

土足どそくのまま、炉のそばへ来た。そしてひとつかみの柴をく燻べて、その明りに、

「あつ……おらぬぞ。ばば」

「えっ？」

——だが、お杉はすぐ、流し元の戸が少し開いているのを見つけて、

「外じゃ」

と、さげんだ。

その顔へ、ざつと、水の入っている水柄杓みずびしやくを投げつけた者があつた。ある、お通だった、風の中の鳥のように、途端に、袂すそも裳ひるがえも翻して、茶屋前の坂道を、真つ逆さまに、逃げ走つて行く——

「畜生っ」

お杉は軒下まで駈け出して、

「権叔父よつ、何しているのじゃ」

「逃げたか！」

「逃げたかもないものよ、こなたが間抜けゆえ、さと覺られてしもうたのじゃわ。——あれつ、はよう、どうかせぬかいの」

「あれか」

黒く——坂の下をまるで鹿のように逃げてゆく影をのぞんで、

「大事な、先は病人、それに程の知れた女子おなごの脚、追いついて、

一討ちに」

駈け出すと、お杉も、後から駈けつづいて、

「権叔父よ、一太刀浴びせるはよいが、首は婆が怨みをいつてから斬りますぞい」

そのうちに、先を走っている権六が、

「しまった」

大声を放つて振向いた。

「どうしたぞ」

「この竹谷へじや——」

「躍りこんだか」

「谷は、浅いが、暗いのが閉口じやわ。茶屋へもどつて、
松たいまつ明

など持って来ねば」

もうそうだけ

孟宗竹の崖ぶちから覗きこんで、ためらっていると、

「ええ、何を悠長な！」

と、お杉は権叔父の背なかを突きとばした。

「あつ」

——ザザザツと、笹落葉ささおちばの崖を駈すべけ込こつて行つた大きな足音が、やがて、遙か闇の下で止まると、

「くそばば。何を無茶しやるぞつ。汝われも早う降りて来こうつ！」

弱い武蔵たけぞう

一

きのうも見えたが、また、きょうも見える。

日名倉の高原の十国岩のそばに、その岩の頭が欠け落ちたように、ぽつんと、一個の黒い物が坐っている。

「——なんだろう」

と、番士たちは、小手をかざしていた。

生憎あいにくと、陽のひかりが虹のように漲みなぎっていてよく見さだめがつかない。そこで一人が、

「兎だろう」

と、よい加減にいうと、

「兎より大きい。鹿だ」

と一方はいう。

いや違ちがう、鹿や兎があんなにじっとしている筈はない、やはり

岩だ、と傍かたわらから他ほかの者が唱なえると、

「岩や木の株が、一夜に生はえるはずはない」

と、異説が出る。

するとまた、饒舌じょうぜつなのが、

「岩が一夜に生える例はいくらかもある。

隕石いんせきといって、空から

降る」

と、交ぜまかえす。

「まあ、どうでもいいじゃないか」

と、いつも暢気のんきなのが、中を取って打ち消すと、

「何でもよいということがあるか。われわれは、この日名倉の木戸に何のために立っているのか。但馬たじま、因州、作州、播磨四カ国

にわたる往来と国境とを、こうして、嚴として守っているのは、

ただ禄ろくを頂戴して、陽なたぼツこをしていよというためではある

まいが」

「わかったよわかったよ」

「もしあれが、兎でも石でもなく、人間だったらどうする？」

「失言失言。もういいじゃないか」

宥^{なだ}めて、やっと納まったと思うとまた、

「そうだ、人間かも知れないぞ」

「まさか」

「何ともわからない、試しに、遠矢で射てみる」

早速、番所から弓を持ち出して来たのが、弓自慢とみえ、片肌外^{はず}して、矢をつがえ、キリキリとしばった。

問題の目標は、ちょうど、番所のある地点から深い谷間を隔て

ている向うがわのなだらかな傾斜と、澄みきった空との境にポツ
ンと黒く見えるのである。

ヒユツ——

矢は、ひよどり鶉のように、谷をまっすぐに渡って行った。

「低い」

と、後ろでいう。

二の矢が、すぐ唸った。

「だめ、だめ」

引つ奪たくつて、こんどは他の者がねら覗う。それは、谷の途中で沈
んでしまった。

「何を騒いでいるかっ」

番所に詰めている山目付の武士が来て、そう聞くと、

「よし、俺に貸せ」

と、弓を取った。これは、腕において、明らかに、段がちがう。満をひいて、矢筈をキキと鳴らしたと思うと、山目付は、弦を^{つる}もどして、

「こいつは、滅多に放せん」

「なぜですか」

「あれは、人間だ。——人間とすれば、仙人か、他国の隠密か、谷へとび込んで死のうと考えている奴か。とにかく、捕まえて来い」

「それみろ」

先に、人間説を唱えた番士は鼻うごめかして、

「はやく来い」

「オイ待て。捕まえるはいいが、何処からあの峰へ渡るか」

「谷づたいでは」

「絶望だ」

「しかた為方がない、中山のほうから廻れ」

じつと、腕を拱くんだまま、武蔵たけぞうは、谷をへだてて見える日名倉の番所の屋根を睨にらんでいた。

幾棟かあるあの屋根下の一つには、姉のお吟ぎんが捕まっているのだと思う――

だが、彼は、きのうも一日こうして坐りこんでいたし、今日も、容易に立ちあがる気色はなかつた。

二

なんの番所侍の五十人や百人。

ここまでは、そう思つて来た武蔵であつたが——きて。

彼は、坐りこんで、その番所が一目に見える所からつらつら地の理を按^{あん}じるに、一方は深い谷間、往来は二重木戸。

加うるに、ここは高原なので、十方碧^{へきらく}落身をかくすべき一木もないし、高低もない。

夜陰に乗じて事を為^し遂^とげるのは、元よりこんな場合の法則だが、その夜も来ない夕刻から、番所の前の往来は、一の柵^{さく}も二の柵も閉まって、すわといえは鳴子が鳴りそうだ。

(近づけない!)

武蔵は、腹のそこで唸った。

そして二日の間も、十国岩の下に坐りこんで、作戦を考えたが、いい智恵もなく、

(駄目だ!)

と思った。一死を賭してもという気力は先ずそこに挫^{くじ}かれた形である。

(はてな、俺は、どうしてこんな臆病者になったのか)

すこし自分を齒がゆくも思った。——こんな弱い俺ではなかつたはずなのに、と吾に問う。

腕ぐみは、半日経つても、解けなかつた。——どうしたものか、怖いのだ！ 頻りと、その番所へ近づいてゆくことが怖いのである。

（俺は、怖がりになった。たしかに、ついこの間の俺とは違つてしまつた。——だが、これは一体、臆病というものだろうか）

否！

と彼は自分で首をふつた。

この気持は、臆病なために起つていゝのではない。沢庵坊たくあんぼうから、智恵を注ぎ込まれたためだ。盲目めくらの目があいて、かすかに、

物が見え始めたからである。

人間の勇氣と、動物の勇とは質がちがう。真の勇士の勇と、生いのち命知らずの暴れんぼの無茶とは、根本的にちがうものであるともあの人には俺に教えた。

目があいたのだ。——心の目が、何かこう世の中の怖さがうっすらと見えだして来たために、生れながらの己れに返ってしまつたのだ。——生れながらの俺は決して野獣ではない、人間だった。その人間になろうと思ひ立つた途端に、俺は、なにものよりも、この身に享うけている生命いのちというものが大事になつてしまった。——生れ出たこの世において、どこまで自分というものが磨き上げられるか——それを完成してみないうちに、この生命をむぎと落

してしまいたくないのである。

「……それだ！」

我を見出して、彼は空を仰いだ。

だが——姉は救わずにはおけない。たとえ、それほど惜しいそれほど怖い今の気持を冒おかしてもである。

夜になったら、今夜はこの絶壁を降りて、あなたの絶壁へ上がつてみよう。この天嶮をたのんで、番所の裏手には柵さくもなし、手薄でもあるらしい。

——そう思い決めていた時である。足のつま先から少し離れた所へ、ぶすつと一本の矢が立った。

気がついてみると、彼方の番所の裏に、豆つぶほどな人間が多

勢出て、どうやら自分の影を見つけて騒いでいるらしいのだ。そしてすぐ、散らかってしまった。

「――試し矢だな」

わざと、彼は動かさずにじっとしていた。間もなく、中国山脈の背を西へ荘厳な落日の光耀こうようはうすずきかけた。

夜が待たれた。

起つて、彼は、小石をひろった。彼の晩飯は空を飛んでいるのだ。小石を投げると、空から、小鳥が落ちた。

その小鳥の生肉を裂いて、むしゃむしゃ喰べていると、二、三十人の番士たちが、わつと声を合せて、彼のまわりを取りかこんだ。

三

武蔵だ。宮本村の武蔵だ。

近寄ってから、気づいた声である。番士たちは、わああつと、

二度目の武者声をあげ、

「見くびるな、強いぞ」

いまし
「誠め合った。」

武蔵は、くわつと、殺気に対して殺気に燃える眼をした。

「これだぞツ」

大きな岩を、両手にさしあげ、輪になっている人間たちの一角

へ向つて、どすんと抛りつけた。

その石は、真つ赤になつた。鹿みたいにそこを跳びこえて、武蔵は走っていた。逃げるのかと思うと、反対に、番所のほうへ向つて、獅子のような髪の毛を逆立てて駈けてゆく。

「ヤヤ彼奴、どこへ？」

番士たちは、呆ツけにとられた。眼のくらんだ蜻蛉のように、武蔵は飛んでゆくのだ。

「気が狂ツているんだ」

誰かが、そう叫ぶ。

三度目の鬨の声をあげて、番所のほうへ追いかけてゆくと、武蔵は、もうその正面の木戸から中へ、躍りこんでいた。

そこは、檻^{おり}だ、死地である。——しかし武蔵の眼には、厳^{いか}めしく並んでいる武器も、柵も、役人も見えなかった。

「あッ、何者だ」

と、組みついてきた目付役人を、たツた一拳^{けん}のもとに仆してしまつたのも、彼自身は意識しない。

中木戸の柱を、揺りうごかし、それを引き抜いて振りまわした。相手の頭数など問題でない。ただ真つ黒に集合してかかつて来るものが相手だった。それを、ただおよその見当で撲りつけると、無数の槍と太刀が、折れては宙に飛び、また地へ捨てられた。

「姉上っ——」

裏へ廻る。

「あねじゃひと
姉者人！」

と、そこらの建物を血ばしつた眼で覗いてゆく。

「——武蔵じゃ、姉者人ツ」

閉まっている戸は、引つ抱えている五寸角の柱で、軒ごとに突き破つた。番人の飼っている鶏が、けたたましく絶叫して、役宅の屋根へ飛び上がつて、天変地変でも来たように啼きぬいている。

「姉者人ツ——」

彼の声は、鶏のようにシャ嘎がれてしまった。お吟ぎんは、どこにも見えないのだった。姉をよぶ声次第に絶望的になつてきた。

牢屋らしい汚い小屋の蔭から、一人の小者が、鼪いたちのように逃げだすのを見つけた。血しおで、ぬるぬるになつた角柱を、その足

もとへ抛りなげて、

「待てッ」

と、武蔵が跳びついた。

意気地なく泣きだす顔を、ぴしやツと撲りつけて、

「姉上は、どこにいるか。その牢屋を教えろ。いわねば、蹴殺すぞ」

「こゝ、ここには、おりませぬ。——一昨日、藩のいいつけで、姫路のほうへ、移されました」

「なに、姫路へ」

「へ……へい……」

「ほんとか」

「ほんとで」

武蔵は、また寄つて来る敵へ、その番人の体を投げつけて、小屋の蔭へ、ぱつと身を退ひいた。

矢が、五、六本そこらへ落ちた。自分の裾すそにも一本とまつてい
る。

瞬間——

武蔵は、拇おやゆび指の爪を噛んで、じいっと、矢の飛ぶのを見ていたが、突然、柵のほうへ走つて、飛鳥のように外へ躍り越えた。

ドカアン！

と、その姿へ向つて放たれた種たね子島の音が、谷底から笈こだまを揺
すり上げた。

逃げだしたのだ！ 武蔵は途端に、山の頂から転落してゆく岩のように、逃げ出している！

——怖いものの怖さを知れ。

——暴勇は兇戯、無知、けだもの獣の強さ。

——もののふの強さであれ。

——いのち生命は珠よ。

沢庵のいった言葉のきれぎれが、疾風のように駈けてゆく武蔵の頭の中を、同じ速度で駈けめぐっていた。

こうみょうぞう
光明蔵

そこは、姫路の城下^{はず}端れ。

花田橋の下で、また、或る日は橋の上あたりで、彼は、お通^{つう}の来るのを待っていた。

「どうしたのだろう？」

お通は、見えない。——約束をして別れた日からもう七日目だ。ここで百日でも千日でも待っているといったお通なのに。

かりそめにも、約束の言葉をつがえた以上は、それを捨てて忘れてゆく気もちにはなれない武蔵^{たけぞう}であった。武蔵は、待ちしびれた。

かたがた、彼には、この姫路へ移されて来たという姉のお吟ぎんが、どこに幽閉されているか、それを探るのも、目的のひとつであった。花田橋の畔ほとりに、彼のすがたがない時は、城下町のここかしここもを、菰をかぶって、物乞いのように彷徨さまよっている日だった。

「やあ、出会うた」

突然、彼へ向って、駈け寄って来た僧がある。

「武蔵たけぞう」

「あつ」

顔も姿も変えて、誰にもこれなら知れまいとしていた武蔵は、そう呼ばれてびっくりした。

「さあ、来い」

手首をつかんだその僧は、沢庵たくあんであつた。ぐいぐいと引つ張つて、

「世話をやかせずと、早く来い」

何処へか連れて行こうとするのである。この人に手向う力はなかつた。武蔵は、沢庵の行くままに歩いた。また、樹の上か、それとも今度は藩の牢獄か。

おそらく、姉も城下の獄つなに繋なれているのであろう。そうなれば、姉きょうだい妹いひとつ蓮はすの台うてなだと思おもう。どうしてもない一命とすれば、
せめて、

(姉と一緒に——)

武蔵はひそかに心で願つた。

はくろじょう

白鷺城の巨大な石垣と白壁が、眼のまえに仰がれた。大手の唐橋をずかずかと沢庵は先に立って渡って行くのである。

びょううち

鉦打の鉄門のかげに、槍ぶすまの光芒を感じると、さすがに、武蔵もためらった。

沢庵は、手招きして、

「はやく来ぬか」

多門を通つてゆく。

内堀の二の門へかかる。

まだ泰平に落着き切れない大名の城地であつた。藩士たちも、なん時でも戦にかかれる緊張と姿をもっていた。

沢庵は、役人を呼びたてて、

「おい、連れて来たよ」

と武蔵の身を引き渡し、そして、

「頼むぞ」

と念をこめていうのである。

「は」

「——だが、気をつけないといかぬぞよ、これは牙きばの抜いてない獅子の兎だからな。まだ多分に野性なのだ。いじり方が悪いとすぐに噛みつくぞ」

いいすてて、二の丸から太閤丸たいこうまるのほうへ案内なしに、行つてしまつた。

沢庵にことわられたせいか、役人たちは、武蔵の体へ、指も触

れないで、

「——どうぞ」

と、うなが促す。

黙って尾ついてゆくと、そこは風呂場だ、風呂に入れとすすめるのである。すこし勝手のちがう気がする。それに、お杉婆の策にかかった時、風呂では苦い経験を武蔵は持っている。

腕を拱くんで考えていると、

「お済みになられたら、衣服はこちらに用意してござるゆえ、お召しかえなされい」

と、小者が、黒木綿の小袖と袴はかまを置いて行つた。

見ればそれには、懐紙、扇子せんす、粗末ながら、大小も乗せてある

ではないか。

二

姫山の緑をうしろに、天守閣と太閤丸のある一廓が、白鷺城の本丸だった。

城主の池田輝政てるまさは、背がみじかくて、うす黒いあばたがあり、頭は剃そっている。

脇息きょうそくから、庭を見やって、

「沢庵坊たくあんぼう。あれかよ」

「あれでござる」

そばに控えている沢庵が、あごを引いて答えた。

「なるほど、よい面つらだましい。お汝ことよく助けてとらせた」

「いや、ご助命をいただいたのはあなた様からで」

「そうではない、役人どものうちにお汝ことのようなのがいれば、ずいぶん助けておいて世のためになる人間もあるうが、縛しばるのを、吏務だと考えているやつばかりだから困る」

縁をへだてた庭のうえに武蔵は坐っている。新しい黒木綿の小袖を着、両手を膝について、俯ふし目めになっていた。

「新免しんめん武蔵というか」

輝政がたずねると、

「はいっ」

はつきり答えた。

「新免家は元、赤松一族の支流、その赤松政則まさのりが、昔はこの白鷺城あるじの主であつたのだ。そちが、ここへひかれて来たのも、何かの縁だな」

「……………」

武蔵は、祖先の名に泥を塗っている者は自分だと思つている。輝政に対しては、何も感じなかつたが、祖先に対して、頭があがらない気がした。

「しかし！」

輝政は語気を改めていった。

「その方の所業、不埒ふらちであるぞっ」

「はい」

「巖科を申しつける」

「……………」

輝政は、横を向いて、

「沢庵坊。身の家臣、青木丹左衛門が、わしの指図も仰がず、お汝ことに対して、この武蔵を捕えたら、その処分は、おてまえに任せるといったという話は——あれは真まかの」

「丹左を、お調べ下されば、真偽は明白でおざるが」

「いや、調べてはある」

「しからは、何をか、沢庵に嘘うそ偽いつわりがおざろう」

「よろしい、それで、両者のいうことは一致しておる。丹左は、

身の家来、その家来が誓ったことは、わしの誓いも同様である。

領主ではあるが、輝政には、武蔵を処分する権能はすでないのだ。……ただこのまま放免は相成るまい。……しかしこの先の処分は、お汝ことまかせじゃ」

「愚僧も、そのつもりでおざる」

「で、いかがいたそうか」

「武蔵に、窮命をさせる」

「窮命の法は」

「この白鷺城のお天守に、変化へんげが出るといふ噂のある開あかずの間まがあるはずで」

「ある」

「今もつて、開かずに間でおざろうか」

「むりに開けてみることもなし、家臣どもも嫌がつておるので、そのままらしい」

「徳川随一の剛の者、しようにゆうさい勝入斎輝政どのお住居に、明りの

入らぬ間が一つでもあることは、威信にかかわると思われぬか」

「そんなことは考えてみたことがない」

「いや、領下の民は、そういうところにも、領主の威信を考えます。それへ明りを入れましょう」

「ふむ」

「お天守のその一間を拝借し、愚僧が勘弁のなるまで、武蔵に幽閉を申しつけるのでござる。——武蔵左様心得ろ」

と、申し渡した。

「ははは。よかろう」

輝政は、笑っている。

いつか七宝寺で、どじょう髯ひげの青木丹左へ向って、沢庵のいたことばは、嘘ではなかった。輝政と沢庵とは禅の友であった。

「後で、茶室へ来ぬか」

「また、下手茶へたでござるか」

「ばかを申せ、近頃はずっと上達。輝政が武骨ばかりでないところを今日は見せよう。待っておるぞ」

先に立って、輝政は奥へかくれる。五尺に足りない短小なうしろ姿が、白鷺城いっばいに大きく見えた。

三

真つ暗だ。——開かずの間といわれる天守閣の高いところの一室。

ここには、暦日こよみというものがない、春も秋もない、また、あらゆる生活の物音も聞えて来ない。

ただ一穗すいの燈ともし灯びと、それに照らさるる武蔵の青白く頬その削そげた影とがあるだけであつた。

今は、大寒の真冬であろう、黒い天井の梁はりも板いたじきも、氷のように冷えていて、武蔵の呼吸いきするものが、燈心の光に白く見える。

孫子曰く

地形通ずる者あり

挂かかる者あり

支さうる者あり

隘あなる者あり

険なる者あり

遠き者あり

孫子の地形篇が机の上にひらかれていた。武蔵は、会心の章に出会うと、声を張って幾遍も素読をくりかえした。

——故に

兵を知る者は動いて迷わず

挙^あげて窮せず

故に曰く

彼を知り己を知れば

勝^{かち}すなわち殆^{あやう}からず

天を知り地を知れば

勝^ますなわち全^まうすべし

眼がつかれると、水のたたえてある器を取つて、眼を洗つた。

燈心の油が泣くと燭を剪^きつた。

机のそばには、まだ山のように書物が積んであつた。和書がある。漢書がある。またそのうちにも、禅書もあるし、国史もあり、彼のまわりは本で埋まっているといつてもよい。

この書物は、すべて、藩の文庫から借用したものである。彼が沢庵から幽閉を申しつかつて、この天守閣の一室へ入れられた時、沢庵は、

「書物はいくらでも見よ。^{いにしへ}古の名僧は、^{だいぞう}大蔵へ入つて^{まんがん}万巻を
読み、そこを出るたびに、少しずつ心の眼をひらいたという。おぬしもこの暗黒の一室を、母の胎^{たいない}内^{ない}と思い、生れ出る支度をしておくがよい。肉眼で見れば、ここはただ暗い開^あかずの間だが、よく見よ、よく思え、ここには和漢のあらゆる聖賢が文化へささげた光明^{つま}が詰^つまっている。ここを暗黒蔵^{あんこくぞう}として住むのも、^{こうみや}光明^{みや}蔵^{ぞう}として暮らすのも、ただおぬしの心にある」
と、^{さと}諭^{さと}した。

そして沢庵は去つたのである。

以来、もう幾星霜か。

寒くなれば冬が来たと思い、暖くなれば春かと思うだけで、武蔵は、まったく月日も忘れていたが、今度、天守閣の狭間はざまの巢ねに、燕つばきが返つてくる頃になれば、それはたしかに三年目の春である。

「おれも、二十一歳になる」

彼は、沈ちんめん酒しゅと、自分かえりを省みてつぶやいた。

「——二十一歳まで、おれは何をして来たか」

慙ざん愧きに打たれて、鬢びんをそそけ立てたまま、じつともだえ暮くしている日もあつた。

チチ、チチ、チチ……

天守閣の廂ひさしの裏に、燕のさえずりが聞えだした。海を渡って、春は来たのだ。

その三年目である、或る日ふいに、

「武蔵、お達者か」

沢庵がひよっこり上がって来た。

「おっ……」

なつかしさに、武蔵は、彼の法衣ころもの袂たもとをつかんだ。

「今、旅から帰って来たのだよ。ちようど三年目じや。もうおぬしも、母の胎内で、だいぶ骨ぐみが出来たじやろうと思つてな」

「ご高恩のほど……何とお礼をのべましょうやら」

「礼？ ……。ははは、だいぶ人間らしい言葉づかいを覚えたな。さあ、今日は出よう、光明を抱いて、世間へ、人間のなかへ」

四

三年ぶりに、彼は天守閣を出て、また城主の輝政の前へ連れ出された。

三年前には、庭先へ据えられたが、今日は、太閤丸の広縁の板じきを与えられ、そこへ坐った。

「どうだな、当家に奉公する気はないか」
と輝政はいった。

武蔵は、礼をのべ、身に余ることではあるが、今主人を持つ意思はないと答えて、

「もし私が、この城に御奉公するならば、天守閣の開かずの間に、夜な夜な噂のような変化の物があらわれるかも知れませぬ」

「なぜ？」

「あの大天守の内を、燈心の明りでよく見ますと、梁や板戸に、斑々と、うるしのような黒い物がこびりついています。よく見るとそれはすべて人間の血です。この城を亡つた赤松一族のあえなき最期の血液かも知れませぬ」

「ウム、そうもあるう」

「私の毛穴は、そそけ立ち、私の血は、何ともいえぬ憤りを起し

ました。この中国に覇はを唱えた祖先赤松一族の行方はどこにあり
ましょう。茫ぼうとして、去年こぞの秋風を追うような儂はかない滅亡を遂げた
ままです。しかし、その血は、姿こそ変れ、子孫の体に、今もな
お生きつつあります。不肖、新免武蔵しんめんたけぞうもその一人です。故に、
当城に私が住めば、開かずの間に、亡霊どもがふるい立ち、乱を
なさないとも限りませぬ。——乱をとげて、赤松の子孫が、この
城を取り戻せば、また一つ亡霊の間がふえるだけです。殺戮さつりくの
輪廻りんねをくり返すだけでしよう。平和をたのしんでいる領民にすみ
ません」

「なるほど」

輝政は、うなずいた。

「では、再び宮本村へもどり、郷土で終るつもりか」

武蔵は、黙つて微笑した。しばらくしてから、

「流浪の望みでござります」

「そうか」

沢庵のほうへ向つて、

「彼に、時服と路銀をやれ」

「ご高恩、沢庵からも、有難くお礼を申します」

「お汝ことから、改まつて礼をいわれたのは、初めてだな」

「ははは、そうかも知れませぬ」

「若いうちは、流浪もよかろう。しかし、何処へ行つても、身の生い立ちと、郷土とは忘れぬように、以後は、姓も宮本と名乗る

がよかろう、宮本とよべ、宮本と」

「はっ」

武蔵の両手は、ひとりでに床へ落ち、ぺたと平伏して、

「そう致します」

沢庵が、側から、

「名も、武蔵たけぞうよりは、武蔵むさしと訓よまれたほうがよい。暗黒蔵の胎

内から、きょうこそ、光明の世へ生れかわった誕生の第一日。すべて新たになるのがよろしかろう」

「うむ、うむ！」

輝政は、いよいよ、機嫌がよく、

「——宮本武蔵か、よい名だ、祝ってやろう。これ、酒をもて」

と、侍臣へいいつける。

席をかえて、夜まで、沢庵と武蔵は、お相手をいいつかった。ほかの家来も多く集まった中で、沢庵は、猿樂舞などを踊りだした。酔えば酔うで、忽ちそこに愉樂ゆらくざんまいな世界をつくる沢庵の面白そうな姿を、武蔵は、慎んで眺めていた。

二人が、白鷺城はくろじょうを出たのは、翌る日であった。

沢庵も、これから行雲流水こううんりゆうすいの旅に向い、当分はお別れとなろうというし、武蔵もまた、きようを第一歩として、人間修行と、兵法鍛錬の旅路に上りたいという。

「では、ここで」

城下まで来て、別れかけると、

「あいや」

たもと
袂をとらえ、

「武蔵、おぬしには、まだもう一人会いたい人があるはずではないか」

「? ……、誰ですか」

「お吟ぎんどの」

「えっ、姉は、まだ生きておりましたよ」

夢寐むびの間も、忘れてはいないのである。武蔵は、そういうとすぐ眼を曇らせてしまった。

花田橋

一

沢庵たくあんのことばによると、三年前武蔵むさしが日名倉の番所を襲った時は、姉のお吟はもうそこにはいなかったたので、何の咎とがめも受けず、その後は、種いろいろ々な事情もあつて宮本村へは帰らなかつたが、佐用郷さよごうの縁者の家へ落着いて、今は無事に暮しているといふのである。

「会いたかろ」

沢庵は、すすめた。

「お吟どのも、会いたがつておる。したが、わしはこういつて待

たせて来たのじや。——弟は、死んだと思え、いや、死んでおるはずじや。三年経ったら、以前の武蔵たけぞうとはちがった弟を伴つれて来てやるとな……」

「では、私のみでなく、姉上の身まで、お救い下さいましたのか。大慈悲、ただかようでござりまする」

武蔵は胸のまえで、掌てをあわせた。

「さ、案内しよう」

促すと、

「いや、もう会ったも同じでござります。会かいますまい」

「なぜじや？」

「せっかく、大死一番して、かように生れ甦かわって、修業の第一歩

に向おうと、心を固めております門出かどで」

「ああ、わかつた」

「多くを申し上げないでも、ご推量くださいませ」

「よく、そこまでの心になってくれた。——じゃあ、気まかせに」

「おわかれ申します。……生あれば、またいつかは」

「む。こちらも、ゆく雲、流るる水。……会えたら会おう」

沢庵はさりりとしたもの。

別れかけたが、

「そうじゃ、ちよつと、気をつけておくがの、本位田家の婆と、
権叔父ごんとが、お通つうと、おぬしを討ち果すまでは、故郷こくにの土を踏ま
ぬというて旅へ出ておるぞよ。うるさいことがあるかも知れぬが、

関かまわぬがよい、——またどじょう髯ひげの青木丹左、あの大将も、わしが喋しゃべ舌べつたせいではないが、不首尾だらけで、永のお暇いとま、これも旅をうろついておろう。——何かにつけ、人間の道中も、難所せつしよ折所、ずいぶん気をつけて、歩きなさい」

「はい」

「それだけのことだ。じゃあ、おさらば」

と沢庵は西へ。

「……ご機嫌よう」

その背へいつて、武蔵はいつまでも、辻から見送っていたが、やがて、独りとなつて、東の方へ歩みだした。

孤劍！

たのむはただこの一腰。いちよう

武蔵は、手をやった。

「これに生きよう！　これを魂と見て、常に磨き、どこまで自分を人間として高めうるかやってみよう！　沢庵は、禪で行つてい
る。自分は、劍を道とし、彼の上にもまで超えねばならぬ」

と、そう思った。

青春、二十一、遅くはない。

彼の足には、力があつた。ひとみには、若さと希望が、らんらんとしていた。また時折、笠のつばを上げ、果て知らぬ——また測り知れぬ人生のこれからの長途へ、生々した眼をやつた。

すると——

姫路の城下を離れてすぐである。花田橋を渡りかけると、橋の袂たもとから走って来た女が、

「あつ！ ……あなたは」

と袂をつかんだ。

お通であつた。

「や？」

と、驚く彼を、恨めしげに、

「武蔵たけぞうさん、あなたは、この橋の名を、よもやお忘れではありません。あなたに来ぬうちは、百日でも千日でもここに待っているといったお通のことはお忘れになつても——」

「じゃあ、そなたは、三年前からここに待っていたのか」

「待っていました。……本位田家の婆ばよ様に狙ねらわれて、一度は、殺されそうになりましたが、辛からくも、命いのちびろいをして、ちようど、あなたと中山峠でお別れしてから二十日ほど後から今日まで——」

橋たもとの袂たもとに見える道みち中土産みやげの竹細工屋の軒を指さして、

「あの家へ、事情わけを話し、奉公しながら、あなたの姿を待つておりました。きようは、日数にしてちようど九百七十日目、約束どおり、これから先は、一緒に伴つれて行つて下さるでしょうね」

二

実は、心のそこでは、会いたくて会いたくて、うしろ髪をひか

れるような姉のお吟にさえ、眼をつぶって、会わずに足を早めて来た心の矢さきである。

(なんで！)

と、武蔵は、勃然と自分へいう。

——なんで、これからの修業の旅出たびでに、女などを連れて歩かれるものか。

しかも、この女なるものは、かりそめにも本位田又八の許いいなず婚けであった者。あのお杉婆にいわせれば、聳むこはいなくとも、

(うちの嫁女)

であるお通ではないか。

武蔵は、自分の顔に、苦にがい気持にじが滲みでるのをどうしようもな

く、

「連れて行けとは、何処へ」

と、ぶつきら棒にいった。

「あなたの行く所へ」

「わしのゆく先は、艱苦の道だ、遊びに遍路するのではない」

「わかつております、あなたのご修業はお妨さまたげしません、どんな

苦しみでもします」

「女づれの武者修業がアろうか。わらいぐさだ、袖をお離し」

「いいえ」

お通は、よけいに強く、彼の袂たもとを握つて、

「それでは、あなたは、私を騙だましたのですか」

「いつ、そなたを騙したか」

「中山越えの峠のうえで、約束したではありませんか」

「む……。あの時は、うつつだった。自分からいったのではなく、そなたの言葉に、気が急^せくまま、うんと、答えただけであつた」

「いいえ！　いいえ！　そうはいわせません」

闘うように、お通は迫つて、武蔵の体を、花田橋の欄干^{らんかん}へ押しつけた。

「千年杉の上で、私があなたの縄目を切る時にもいいました。——一緒に逃げてくれますかと」

「離せ、おい、人が見る」

「見たって、かまいません。——その時、私の救いをうけてくれ

ますかといったら、あなたは歓喜の声をあげ、オオ、断きつてくれこの縄目を断つてくれ！ 二度までも、そう叫んだではありませんか」

理をもつて責めてはいるが、涙でいっぱい彼女の眼は、ただ情熱のたぎりであつた。

武蔵は、理においても、返す言葉がなかつたし、情熱においては、なおさら焦やき立てられて、自分の眼まで熱いものになつてしまつた。

「……お離し……昼間だ、往来の人が振り向いてゆくじゃないか」
「……………」

お通は素直たもとに袂たもとをはなした。そして橋の欄干へ俯うツ伏すと、鬢びん

をふるわせてしゆくしゆくと泣き出した。

「……すみません、つい、はしたないことをいいました。恩着せがましい今のことば、忘れてください」

「お通どの」

欄干の顔をさしのぞいて、

「実は、わしは今日まで、九百幾十日の間——そなたがここでわしを待っていた間——あの白鷺城の天守閣のうえに、陽ひの目も見ずに籠こもっていたのだ」

「伺っております」

「え、知っていた？」

「はい、沢庵さんから聞いていましたから」

「じゃあ、あの御坊、お通どのへは、何もかも話していたのか」
「三日月茶屋の下の竹谷で、私が氣を失っていたところを、救ってくれたのも、沢庵さんでした。その土産物屋へ奉公口を見つけてくれたのも沢庵さんです。——そして、男と女のことだ。これから先は知らないヨ、と謎みたいなことをいって、昨日も店でお茶を飲んでゆきました」

「アア。そうか……」

武蔵は、西の道を振向いた。たった今、別れた人と、いつまた、会う日があるだろうか。

今になって、さらに、沢庵の大きな愛を感じ直した。自分へだけの好意と考えていたのは自分が小さいからだだった。姉へだけで

もない、お通へも、誰へも、その大きな手は平等に行き届いていたのである。

三

(——男と女のことだ。これから先は、知らないよ)

そう沢庵がいい残して去つたと聞くと、武蔵は、心に用意していなかつた重いものを、ふいに、肩へ負わされた気がした。

九百日、開あかまずの間で、眼を曝さらしてきた彪ほうだい大な和漢の書物の中にも、こういう人間の大事は一行もなかつたようである。沢庵もまた男と女の問題だけは、われ関せずえん焉、と逃げた。

（——男と女のことは、男と女で考えるほかはない）

そういう暗示か、

（それくらいなことは、せめて自分で裁さばいてみるがいい）

と自分へ投げた試金石か。

武蔵は、思い沈んだ。——橋の下を行く水をじっと見つめたまま。

するとこんどは、お通からその顔をさしのぞいて、

「いいでしょう。……ネ、ネ」

と、すぎる。

「いつでも、お店では、暇を下さる約束になっているんですから、すぐわけを話して、支度をして来ます。待っていて下さいましね」

「頼む！」

武蔵はお通の白い手を橋の欄干へ抑えつけた。

「——思い直してくれ」

「どういう風に」

「最前もいったとおおり、わしは、闇の中に三年、書を読み、悶えもだに悶え、やっと人間のゆく道がわかつて、ここへ生れかわつて出て来たばかりなのだ。これからが宮本武蔵たけぞうの——いや名も武蔵むさしと改めたこの身の大事な一日一日、修業のほかに、なんの心もない。そういう人間と、一緒に永い苦艱の道を歩いて、そなたは決して、倅せではあるまいが」

「そう聞けば聞くほど、私の心はあなたにひきつけられます。私

はこの世の中で、たった一人のほんとの男性おとこを見つけたと思つて
おります」

「何といおうが、連れてはゆかれぬ」

「では、私は、どこまでも、お慕い申します。ご修業の邪魔さえ
しなければよいのでしよう。……ね、そうでしょう」

「……………」

「きっと、邪魔にならないようにしますから」

「……………」

「ようございますか、黙って行つてしまうと、私は怒りますよ。

ここで待っていてくださいね。……すぐ来ますから」

そう自問自答して、お通は、いそいそと、
橋はしたもと 袂かど の籠細工屋

のほうへ駈けて行く。

武蔵は、その隙に、反対の方へ、眼をつぶって駈け去ってしまった。おうとしたのである。だが意志がわずかにうごいただけで、脚は釘で打ちつけられたように動かなかつた。

「——嫌ですよ、行つては」

振向いて、お通が、念を押している。その白い笑靨^{えくぼ}へ、武蔵は思わずうなずきを見せてしまった。彼女は、相手の感情を受けると、もう、安心したように、籠細工屋の内へかくれた。

今だ。——去るならば。

武蔵の心が、武蔵を打つ。

だが、彼の^{まぶた}瞼には、今のお通の白い笑靨が——あの哀れっぽい

ような愛くるしいような眸が——体を縛りつけていた。

いじらしい！ あれまでに自分を慕ってくれるものが、姉以外にこの天地にあらうとは思えない。

しかも決して、嫌いではないお通である。

空を見——水を見——武蔵は悶々と橋の欄干を抱いていた。迷っていた。そのうちに、^{ひじ}肱も顔も乗せかけているその欄干から、何をしているのか、白い木屑が、ボロボロこぼれ落ちては、行く水に流れて行つた。

浅黄の脚絆きやはんに、新しいわらじを穿はいて、市女笠いちめがさの紅い緒おをあざと頤あざとに結んでいる。それがお通の顔によく似あう。

だが――

武蔵はすでに其処にはいなかったのであつた。

「あらつ」

彼女はおろおろ泣き声して叫んだ。

さつき武蔵が佇たたずんでいたあたりには、木屑が散りこぼれていた。

ふと欄干の上を見ると、小柄こづかで彫つた文字の痕あとが、唯こう白々と

残のこされていた。

ゆるしてたもれ

ゆるしてたもれ

青空文庫情報

底本：「宮本武蔵（一）」吉川英治歴史時代文庫、講談社

1989（平成元）年11月11日第1刷発行

2010（平成22）年5月6日第41刷発行

※底本は、物を数える際や地名などに用いる「ケ」（区点番号5-86）を、大振りにつくっています。

入力：門田裕志

校正：仙酔ゑびす

2012年12月18日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

宮本武蔵

地の巻

2020年 7月13日 初版

奥付

発行 青空文庫
著者 吉川英治
URL <http://www.aozora.gr.jp/>
E-Mail info@aozora.gr.jp
作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU
URL <http://aozora.xisang.top/>
BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>